春日坂高校漫画研究部

あずまの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
春日坂高校漫画研究部

【Ｎコード】
Ｎ４４５５Ｑ

【作者名】
あずまの

【あらすじ】
吉村里穂子、高校二年生。リア充の兄妹に挟まれたオタクである。小説書きのキタちゃん、毒舌マリちゃん、イケメンオタクの五味に囲まれた漫研の日々。オシャレも恋も大学からでいい。そう思っていた彼女に三次元ボーイズが襲いかかる。

1、ジョブ→オタク

吉村里穂子。高校二年生。
兄はヤンキー、妹はギャル。そして私は三つ編み眼鏡のオタク女子である。
「兄妹見てると明らかにジョブチェンジ失敗したなって思うよ」
「ふーん。じゃあオタクやめたら」
「そんなのできないよ。私からオタクを取ったら眼鏡しか残らないじゃんか」
「それもそうだ」
親友はあっさりと納得した。冗談だったのに。こら後輩、笑うんじゃない。
私が所属する漫画研究部は、春日坂高校旧校舎二階にこぢんまりとだが存在した。
元は理科準備室であったそこにはホルマリン漬けされた謎の生物が今も棚に所狭しと並んでいた。日当たりも悪く、すっぱい薬品の匂いも染み付いていて部室としてはよろしくない。
良い点があるとするとすれば、ガス水道のついた小さな調理場の存在である。これだけはどこの部室にも負けていないだろう。
お陰で昼や放課後はインスタントラーメンやコーヒー紅茶が飲み放題。漫画を読みつつ優雅なティータイムも過ごせるという絶好の溜まり場なのである。
「吉村先輩って三人兄弟なんですか」
「そうだよー、私以外は二人ともリア充だよー」
話しかけてきたのは後輩の木崎真里。私たちはマリちゃんと呼んでいる。
大人しそうな外見でときどきこちらがドキっとするような言葉を吐く。今年入部した漫研のホープである。他にも二人一年生がいるが今は割愛しよう。

「家でどんな会話してるんですか？　うち、弟がいるんですけど、ほとんど話たりしないんですよね」
「あぁ、うちもそんなもんだよ。むしろ嫌われてるよ。昨日も妹にオタクキモいって言われたしね」
「妹悪魔だな」
「そうなんだよ！　私、弟欲しかった！」
「弟も変わりませんよ～」
「一人っ子の私、勝ち組だな」
そう言って勝ち誇っているのは同じ二年生であり漫研副部長の北川麗華。
ちなみに本人、自分の名前を心底嫌っている。女子にしては若干身長が高くがっしりした体型をしているが、男らしい外見に反して中身は大変乙女なやつだ。愛称はキタちゃん。
「兄弟の真ん中って一番ナメられるポジションだよ。上からも下からも突き上げられてさあ。親なんて長男と末っ子ばっか可愛がって真ん中の私はスルーだよ」
「それをいいことに部屋で漫画描いてるくせに」
「キタちゃんは私を悲劇のヒロインにはさせてくれないよね」
問題ばかり起こすヤンキーの兄に、ギャルだが甘え上手で末っ子気質の妹。親はなんだかんだ言って手のかかる子供ほど可愛がるものだ。目立たず大人しかった私はあまり構われることがなく、随分と寂しい思いをしたものである。
けれど中学一年生のとき、友達のお姉さんにイケない道へと誘われそのままどっぷり。寂しさなんて忘れ去り、私は腐れた趣味へと邁進した。
今では立派にオタクである。
「あと兄弟いるとさ、その友達を家に連れてくるんだよね。兄弟以外のヤンキーとギャルが家にいる間は怖くてトイレにもいけない」
「うちも弟、部活仲間連れてくるんですけど、こないだ何て言ったと思います？　ダサい姉ちゃん見られるの恥ずかしいから絶対部屋

から出ないでよ、ですよ！」
「弟悪魔だな」
「弟ひどぉ！　弟ってさ、帰り道に偶然会って『姉ちゃん、鞄重いだろ。持ってやるよ』って言ってくれるんじゃないの！？」
「そんな天使いませんよ」
ショック！　弟に夢見てただけに、ショーック！
「しゃーっす！」
兄弟話に阿鼻叫喚していると、突然部室の扉が開き、一人の男子生徒が入ってきた。
「あ！　なんかいい匂いがする！　何すか、紅茶！？　アップルティー！？　俺も飲みたい！」
「うるせえのが来たよ」
「イケメン帰れよ」
「五味君、部活は？」
散々な言われような男子生徒、その名を五味貴志。キタちゃんが吐き捨てたとおり、漫研には似つかわしくないイケてるボーイである。テニス部と兼部しており、暇を見つけてはやってくる。リアルテニ〇の王子様である。
「今日はミーティングだけなんだ。ねえねえ先輩、これ飲んでいいっすか」
「いいよ」
「やったー！　……って薄いっ、色が出ない！」
「すでに三人分出したからな」
「もっと早く来ればよかったぁ」
薄い茶色の飲み物を片手に、五味は女三人の輪の中に何のためらいもなく入ってきた。
「何の話してたんっすか」
「兄弟の話」
「妹と弟は悪魔だったよ」
「そーなんですか？　うち、妹も弟もいるけど、俺に懐いてめっち

ゃ可愛いですよー？」
　相変わらず空気の読めないイケメンである。
　どうせあれだろ、イケメンはたとえバリバリのオタクだろうと結局はイケメンであるから兄弟は嫌わないのだ。人間見た目が九割強、これが悲しい現実なのだ。
「五味お前なんで漫研なんだよ！！　キラッキラしやがってよー！！」
「え、マク○スF…？」
「違う！！」
　ポーズとんな！
　ガーガー怒鳴るも五味には堪えない。むしろ嬉しそうだった。
　こいつは非常にモテるため、女の子はたいてい決まったパターンの話しかしないのだという。しかしここではオタク全開フルスロットル、女の部員は自分をうるうるした目で見つめてこないしくっついてもこない。ここが俺の理想郷、と入部三日目で言っていた。
「そうそうリホ先輩、こないだ教えてもらったサイトすっげえ面白かったっす」
「ん、そうだろうそうだろう」
「俺と先輩の好みモロ被りっすよね。俺、どこまでも先輩についていくっす！」
　イケメンにそう言われて私も悪い気はしない。わざと眼鏡をクイっと直し、レンズを反射させながら言った。
「そうか、私についてくるか。じゃ、手始めにテニス部の写真撮ってこい」
「それはお断りします」
　ってオイ、私についてくるんじゃなかったのかよ！　紅茶飲んでんじゃねえよ！

2、キタちゃんと、

里穂子です。しがないオタクです。
奮発して写真屋買ってよかったと思う今日この頃。
漫画描くのもデジタルの波がやってきている。トーン貼りでひいひい言っていた昔から一転、今はデジタルトーンという便利なやつがある。お陰で前ほどトーンに金銭持って行かれるということがない。ペン入れの大変さは変わらんが。
「リホ、ゲーム貸して」
「ノックもしない奴には貸しませーん」
「うるせえオタクっ、いいから貸せよ」
「貸してくださいお姉ちゃんって言えたら貸してやる」
「誰が言うか。持ってくよ」
「別にいいけど。今度あんたの友達が来てるときに部屋に乱入してやる」
できないがな。お前の友達怖いし。
「……貸してくださいお姉ちゃん」
「いーよ」
最後に舌打ちしたけど許してやる。
そう、会話から分かるようにこの姉を姉とも思わないこいつが我が妹である。ギャルメイクを落とした今、眉毛が半分ないのが滑稽だ。
「また漫画描いてんの」
「うん」
「キモっ」
「はいはい」
ここは下手に反発しないのが吉である。でないと頭を一ミリも使ってないような罵詈雑言を吐きＰＣを殴ってくるからだ。前者はいいが後者はダメだ。妹よりもはるかに繊細で高価なＰＣのためなら

私は何を言われてもかまわない。
「ソフトも持ってくからね」
「んー」
やっと出て行った。しかも扉は開けっ放しという貴様…妹…。
ちなみに言ってはいないが、お前がキモいと吐き捨てたその漫画の売り上げでゲーム買ったんだぞ。言わないけど、言わないけど。
あ～それにしても夏の祭典に向けてそろそろ動くべきだな。まだ三ヶ月以上はあるが今年は新刊三冊出したい。キタちゃんもがんばるって言ってたしな、そうだサイト見てみよう。
このネット時代、オタクであれば自分のサイトもしくはブログをひとつは持っているものである。マリちゃんは読み専だと言っていたが、真実はどうだろう。五味は知らん。
キタちゃんは小説サイトを持っていた。更新を確認してみると、今一番たぎっているという作品の二次小説をアップしている。描きかけの漫画をいったん保存し、ニヤニヤしながらキタちゃんの小説を読み始めた。
「やべーキタちゃん天才すぎる」
将来は小説書いて生きていきたいらしい。
笑っちゃうよね、とキタちゃんは言ってたが笑わないよ。私だって漫画描いて生きていきたい。本気で。
二次創作ばっか描いてるくせに何言ってんだと言われそうだが、夢なんだから何言ったっていいはずだ。
と、キタちゃんからメールがきた。
『タイトル：頼みがある』
なんだなんだとメールを開き、本文を読んで私はニタ～と笑った。さっそく電話する。
「もしもしキタちゃん？」
『メール見た？』
「うん、見たよ。ていうか、実は前からやりたいなあとは思ってたんだけどね。私から言うのもなんだかなあって感じで」

『じゃあ、いいの？』
「いいよいいよ！　でさ、ついでと言ってはなんだけど、キタちゃん」
『なに？』
「キタちゃん原作で漫画描かせてくださいお願いします！！」
数拍遅れて携帯の向こうからキタちゃんの叫び声が聞こえた。
こうしてキタちゃんの小説本の表紙と、キタちゃん原作、絵は私という漫画の制作が決定したのだった。

3、スポーツイケメン現る

一時限目、数学。

窓際というベストポジションから遠ざかった真ん中の席というなんとも魅力のない位置に座る私がいそいそと一時限目の準備をしていたときだった。

「やべー！　俺今日当たってんのに問題やってねー！」

そりゃ大変だ。

数学の先生は怖くて有名だった。特に彼がそうであるように当てられた問題をやってこない生徒には絶対零度の視線と冷たい言葉でこれでもかと責めてくる。

「なあなあ吉村、問４やってない！？」

「え」

いきなり話しかけてきたのは問４をやっていない岩迫君だった。イケメンオタク五味と同じ部活の先輩である。

「……やってない、けど」

「うわーやばいっ」

短髪を茶色に染めた岩迫君はテニス部のエースである。猫目が可愛いと評判で、彼を好きな女子は多い。五味はともかく岩迫君はまっとうなイケメンである。初めて話しかけられた私がビビるのも仕方なかった。

「吉村、数学得意だったよな？」

「あー、うん」

「頼むよ、教えてくれない？　ジュース奢るから！」

人見知りな私と違い、岩迫君は初対面ながら実にフレンドリーであった。イケメンの社交力パネェ。私なら知らない人間に教えを請うぐらいな先生に怒られるほうを選ぶ。

「吉村さん、教えてあげたら？」

キター女子ィー！！

しかしここで私が教えてあげると言わない、いや言えないのかそこの明らかに岩迫君狙いの女子よ。
「時間がない！　頼む！」
「……分かった」
ルーズリーフを一枚取り出し、問４を解きはじめる。基本的に予習復習はしないが、今のところ数学を苦に思うことはなかった。オタクは文系ばかりではないのだよ。
「できた。どうぞ」
「助かった！　ありがとうございます！」
「よかったねぇ、岩迫くん」
私に注がれた女子の視線が一瞬ものごっつい冷たく見えたのは果たして被害妄想だろうか。女子怖いほんと怖い。
そのときちょうど一時限目開始のチャイムが鳴った。

放課後。
キタちゃんと漫画の打ち合わせをしていたところ、珍しく五味から電話がかかってきた。
「どーした五味」
『ちゅーっす、リホ先輩。岩迫先輩に代わりますね』
「え、ちょっ、おま」
『吉村？　おれおれー』
五味てめぇこっちは心の準備ができてねえんだよ！　てか声が近いっ。当たり前だが。
『あれ？　吉村聞こえてる？』
「…聞こえてます。なんでしょうか」
『今日の朝、ジュース奢るって言ったじゃん。なのに昼どっか行っちゃうし、だから放課後奢ろうと思ってさ』
「あー……」

本気で奢ってくれるつもりだったのか。どうせイケメンのその場しのぎの台詞だろって思ってました、すいません。

「じゃあそこにいる五味に渡しといてくれていいから」

テニス部が終わると漫研に来る五味。パシリに使って悪いな。

しかしである、ここからが真のイケメンの本領発揮であった。

『え～！　そんなんダメだって。お世話になったんだからさぁ、俺直接渡したいんだけど。あ、じゃあ、今休憩中だからそっち行っていい？　旧校舎の二階だったよな』

やめろぉおおお！！

何を好き好んでテニス部のイケメンエースをこの腐海に招かねばならない。ていうか机の上にネームが散らばってんだよ、何かの拍子に目に付いたらどーすんだ。

「ダメ！　ぜったい！！」

『え、なんで？』

「なんでも！！　岩迫君だってベッドの下覗かれたくないでしょ！！」

『漫研ってそんなヤバいものが隠してあんの！？』

ヤバいのベクトルが違うがそんなものだ。私は彼に玄関ホールに行ってもらうよう頼むと、キタちゃんに断って部室を飛び出した。

「わざわざ、どうも、」

息を切らしてやって来た玄関ホールには、岩迫君以外の生徒の姿は見えなかった。

ユニフォーム姿の岩迫君を見て「うわぁテニ◯リ…」と思った私を許して欲しいマジ許して欲しい。

「じゃ、買いに行こっか」

「え、買ってないの？」

「だって吉村の好きなジュース知らないもん」

この気遣いよう、五味に見習って欲しいものである。

あいつは二次元に重きを置いてるからか、三次元の女の子の扱い方がけっこう雑だった。だから平気で女ばかりの漫研に入ってきた

のだろうが。
　しぶしぶ自販機まで一緒に行った私に、岩迫君はどこまでもイケメンだった。８０円やそこらの紙カップのジュースだろうと思っていた私に対し、岩迫君は「ペットボトルのでいいよ」と言ったのである。
「え、いや、悪いよ」
「あの問題の答えは１５０円以上の値打ちがあるって」
　いや、ねえよ。ものの五分で解けたのに。
「高校生の１５０円はけっこう痛いと思うけど」
「そう？　さっきの電話もそうだけど、吉村って面白いこと言うよな」
　そこでニコっと笑うかー！
　面白人間扱いされたがまあいい、その笑顔プライスレス。お言葉に甘えてペットボトルのよっちゃん白ぶどう味を買ってもらった。
戻ったらキタちゃんと半分こしよう。
「じゃ、私はこれで」
「うん。また頼むな」
　またがあるのか。
　どんな顔をしていいのか分からなかったので、曖昧に笑っておいた。

3、スポーツイケメン現る（後書き）

数学教師の表現が途中で変わったので訂正を入れました。

4、映画は前戯

日曜日。

今日はキタちゃんと映画を見に行くことになっている。今話題のハリウッド映画を！

嘘です。アニメ映画です。

いや、ハリウッド映画も見に行くこともあるけど、今日はたまたまアニメなのだ。

せっかく出かけるのだしオシャレをしたいところだが、残念ながら化粧道具は一切持っていない。あるとすれば色つきのリップだけである。

金にはけっこう余裕はあるが、それは主に飲食代や漫画、ＤＶＤ、ゲームなどオタクライフを充実させる費用に消えていた。女子高生として何か間違っているのは分かっている。

化粧に興味がないわけではないが、大学に入ってからでもいい気がする。近所のお姉さんも都会の大学行って別人になって帰ってきたことだしな。

せめて髪型だけでも変えとくか。

ごわごわの癖っ毛は三つ編みにでもしておかないと見栄えが悪いのだが、ひとつにして片方の耳の後ろでシュシュで纏めてみる。このシュシュ、キタちゃんが誕生日プレゼントにくれたやつだ、喜んでくれるだろうか。

服はベージュのワンピースにレギンス、カーディガンを着て、よし。

いわゆる森ガールっぽい感じに……見栄を張った、私はどこまでも地味だった。

「キタちゃーん」
「リホ」
駅前の広場。キタちゃんはすでにいた。
「相変わらず早いね」
「小さいころからの習慣ってだけだよ。一分でも遅れたらじいちゃんにめちゃくちゃ怒られてたから」
キタちゃんのおじいさんというのは元警察官であり、退職後に剣道場を開いた人である。そのため礼儀作法にはとってもうるさく、私も遊びにいったときにはそれはもう怒られたものだ。
「リホ最近来ないから、じいちゃん寂しがってるよ」
「あのじいさまにそんな可愛いところがあるのかよ」
「あるある。今度の休み、漫画の打ち合わせがてらうちに来なよ」
「じゃー行く。道場やってる？　汗に輝く現役警察官たちの袴姿も見たいな」
「じいちゃんにはっ倒されるよ」
痛い目にあってもいい、男たちの戦う姿を見られるのなら。
「行こう。それとシュシュ、似合ってるよ」
「へへ」
照れ笑いしたら気持ち悪いと言われた。キタちゃん…！

「あ、リホちゃんだ」
なぜお前がここにいる、神谷。
「……おはようございます」
「すげー嫌そうな顔。テンション低いなあ」
映画館はけっこう混んでいた。並ぶのめんどいなあと思っていた矢先である。
後ろから声をかけてきたのは家によく遊びに来る兄の友人だった。
「けーたぁ、この子だれ？」

「ショータの妹だよ」
「えぇ!?　うっそぉ!!　全然似てなぁい」
神谷の彼女だろうか、髪の毛盛ガールがやってきた。私にとって苦手そうなタイプだ。
「眼鏡取ったらけっこう似てるよ、ほら」
「ちょ、」
勝手に眼鏡を取られてしまった。よく見えない。キタちゃんどこだ。
「うーん、似てると言われれば似てるような…」
「目がそっくりだと思うんだけど」
「ショータくん、いっつも睨んでるからユカ分かんない」
「はは、言えてる」
「……」
なんですかこいつらは、人の眼鏡を取っておいてチャラチャラと。見えないなりに睨みつけると、ぼやけた視界の中で神谷が笑った気がした。
「やっぱり似てる」
「似てませんよ。眼鏡返してください」
「あれ、怒った?」
怒らいでか。
私の想像の中だけで奴の顔面にグーパンを入れた。あくまで想像なのは、ヤンキーの兄の友人だけあって神谷もけっこう怖いのである。冗談で殴って許してもらえるのか私には分からなかった。
「友達待たせてるから行きたいんですけど」
「友達なら随分前から列に並んでるけど」
「なにー!?」
そりゃないぜキタちゃん!
時間を無駄にしない彼女らしいぜ泣けてくる。
「何見んの?　やっぱアニメ?」
「そっとしといてやろうって気遣いはないのですか、神谷さん」

「えー、ショータくんの妹ってオタクなの？　ウケるー！」
うわー……。
妹には散々バカにされてきて慣れてはいるものの、他人に笑われるのはツラいものがある。しかもこの人声大きいし、周りに見られてる気がする。ヤダな。眼鏡取られててよかった。
「おい」
「えーなにー？」
「俺のダチの妹、馬鹿にしてんじゃねえよ。マジイラつくんだけど」
お前も馬鹿にしてなかったか！
と思ったが黙っておいた。神谷怖ぇ…！
突如怒りだした神谷に、それまで私たちにまとわりついていた周囲の視線が一気に離れていった。
「あーもう萎えた。映画はもういいや、失せろよ」
「は？　何言ってんの、」
「映画なんてセックスしやすくするための前戯みてーなもんだし。お前じゃなくても他にいるからいいよもう」
そんな前戯聞いたことねえよ。
ていうか私さっきからツっこんでばっかだな。神谷ボケ体質なのか。
「なっ、マジムカつく！　死ねよ！！」
彼女はきっと殴りたかったんだろう。けど神谷を見た瞬間びくっと体が震えたのが不明瞭な視界でもよく分かった。振り上げた鞄を下ろし、早足に去っていった。
「ごめんな、リホちゃん」
「高校二年生にしては刺激的過ぎる場面でした」
「けっこー冷静だねー」
そう言いながら神谷は眼鏡を掛けてくれた。至近距離で微笑まれてツラがいいだけにうっとなったが、視線ひとつで激昂した女を退散させた男である。相手は三次元だ、二次元負けるな、と唱えた私の勝利だった。

「一人で映画観るんですか」
「どうしよっかな。リホちゃんと一緒にアニメ観てもいいけど」
「今日観るの三部作のうちの二作目ですよ。観るなら一作目観てからにしてくださいよ」
「そりゃ残念」
私の頭を撫でると神谷は帰っていった。
兄の友人というのは、だいたいがああいうわけの分からん連中ばかりである。

5、君の笑顔にカンパイ！

主にＢＬ漫画ばっかり描いている私だが、ノマカプや性転換なども大好きである。キタちゃんには節操がないと言われるが、広く深くがモットーだ。

「主人公、こんな感じでどう？」

「銀髪？」

「ううん、白髪」

「ベタ塗りめんどいだけでしょ」

「バレたか」

キタちゃんとタッグを組んだオリジナル漫画の制作が今のメインである。

舞台は架空の日本。和風ファンタジー。妖怪とか陰陽師とか式神とか。題材はよくある感じなんだけど、そこはキタちゃん、独自の色を出してくる。

漫画の原作ってどうやればいいのか分かんないと言ったキタちゃんは小説を書いてきてくれた。それを読んで私号泣。二次もそうだが、泣かせやがる。

キタちゃんの小説は読んでいると情景が浮かびやすい。私の頭の中で登場人物たちに色がつき動き出す。絵にするのは早かった。

「なんか脇役のキャラのほうが力入ってるように見えるのは気のせいなの」

「いや、まあ、」

「いいけどね。書いてる途中であんたの好きそうなキャラだとは思ったけど」

キタちゃんは私のことなどお見通しであった。

だってだって主人公の幼馴染で飄々としてて関西弁で、ってこれで萌えずにいられるか、否、ない。ＢＬ漫画ではないのだが、彼の主人公へと注ぐ目をイヤらしく描写してしまいそうだ。

「あ～完成が楽しみ～。キタちゃん、直してほしいところはばんばん言ってね」
「漫画に関してはあんたの好きにしていいのに」
「ううん。私ね、キタちゃんの小説の雰囲気っていうか空気をさ、完璧に漫画で表現したいんだ。今の私じゃ力不足なのは分かってるけど」
「……私もリホの描く漫画の雰囲気好きだよ」
「キタちゃん……！」
滅多に人を褒めないキタちゃんが視線を落として恥ずかしそうに言っている。
そんなことされたら私、
「萌えｒ」
「先輩たち、部室で百合はやめてください」
「来たなメグっぺ！　えぇい邪魔だ、私は今からキタちゃんと愛し合うのだ！」
「園田今日はパンなんだ」
「無視！」
と、茶番はここまでにしておいて現在昼休みである。あと三十分しかない、ごはん食べなきゃ。
「メグっぺ、玄米茶飲む？」
「いただきます」
部室には紅茶緑茶玄米茶が常備されている。他にも部員のお気に入りの茶葉やコーヒーが棚にあって、名前がなければ好きなときに飲んでいいことになっていた。
お昼ごはんはいつも部室で食べているわけではないが、今日みたいにクラスの違うキタちゃんと示し合わせてくる場合もある。
一年生のメグっぺこと園田めぐみは、いつも部室に来て昼ごはんを食べていた。教室で友達と食べないの、なんて野暮な質問は誰もしない。空気の読めない五味が言いかけていたが、そこは空気の読めるマリちゃんが光の速さで黙らせていた。

クラスに馴染めないのかもしれない。単に一人が好きなのかもしれない。

メグっぺを見ていると、自然と私は去年のことを思い出す。

高校一年生のとき、私は中々友達ができなかった。色んな中学から生徒が集まってくるし、運よく同じ中学の同じクラスだった子がいればいいけど、それもなくて私は孤立してしまった。

自分から話しかけて友達をつくるスキルがあればいいものの、名前も趣味も知らない相手になんて怖くてできない。話しかけられれば普通に話し返せるけど、内心はビクビクしていてあまり会話が長引かなかった。

そんな私に友達ができたきっかけは、キタちゃんだった。

家は道場、中学三年間は学級委員長だったキタちゃんの顔は実に広かった。席に座ってるだけだった私に知らない子たちが話しかけてきてくれたのは、キタちゃんのお陰だった。

「先輩たち、二人で漫画描くんですよね」

「あ、うん、そうだよ。世界のキタガワが原作ですよ！」

「できたら読ませてくださいね」

ん？　私、先輩なのにな、あしらわれてるな。

まあいいだろう。食べながらだけど、描いたキャラクターを見せてみた。

「メグっぺ、どう思う？　忌憚のない意見を聞かせてくれたまえ」

から揚げにお箸をぶっさし口に運ぶ。昨日の夕食の残りなだけあってけっこう固い。なんとか一個食べ終わったとき、メグっぺが言った。

「ヒロイン、薄いというか、特徴ないのはわざとなんですか」

「あぁうん、今回の話、ヒロインあんまり動かないんだ。一般人というか、ええと、キタちゃん、なんて言えばいい？」

「ヒロイン以外のキャラがけっこう濃いからね。存在感は薄く設定してる。主人公引き立てたいし」

「なるほど」

メグっぺは思ったことを割りとぽんぽん言う子なのでこういうときとても助かる。編集者に向いてるんじゃないだろうか。

「原稿、手伝ってね」

「はい」

完成、楽しみですね。

メグっぺは、はにかんだ笑みを浮かべながらそう言った。

やっべ、メグっぺ萌えるんですけど。肌白いからな、赤くなったらすぐ分かるんだよな。クラスの子達はそういうの知らないのか、なんかもったいないな。

「園田気をつけろ、リホが人間的にダメな顔してあんたを見てる」

キタちゃん、他の言い方でお願いします。

6、コンビニの変

午後七時半、自宅のプリンターのインクが切れた。ストックはなかった。

頼むぜジョニー（プリンター）、コピーしたい原稿があるっていうのに。

今から行ってもいつもの店には間に合わない。仕方ない、コンビニにコピーしにいくか。

透けないファイルに見られたくない原稿を入れると財布を持って一階に下りた。

去年ノリで買った日本語Tシャツに中学時代のハーフパンツ、パーカーを羽織っていざ出陣。

「リホ、今から出かけんのか」

「兄ちゃん」

帰ってたんだ。

足元を見下ろせば家族の中で一番大きな靴がたしかにあった。

リビングから顔を出した兄は、顔に絆創膏をいくつも貼っていた。唇の端っこには青あざ、こめかみは直りかけの変な色をしていた。

二日前には真っ赤だった髪は、今日には金髪に変わっている。

「コンビニ行ってくる。なんか欲しいものある？」

「もう暗いぞ」

「うん」

「……っチ、早く行ってこい」

「う、うん」

相変わらず兄とは会話が噛み合わないな。動物っぽいというか。

神谷たちはどうやって兄とコミュニケーションとってるんだ。

なぜか兄が睨みつけてくるのでぶん殴られないうちに行くことにした。

高性能のプリンターが家庭に普及してからはコンビニでこそこそコピーする機会は大分減った。
原稿忘れて二度と行けなくなったコンビニあったなあ…。
リアルで「ヒギャァアアア」と悲鳴を上げた懐かしいあの日。今でも寝る前に布団の中で思い出す。
やがて自宅から二番目に近いコンビニに到着した私はすばやく店員の位置を確認した。
いけるっ、店員はおにぎり並べててこっちには気づいてないぞリホコ！！
五百円玉を投入。すばやく原稿を取り出し、コピー機に並べてカバーを閉じる。この一連の作業があと十五回。早く終われぇえええ！！
「あ、吉村だ」
あと五枚というときだった。その瞬間、私の心臓はたしかに一瞬止まった。
「ひぃっ、岩迫君！？」
「やっほー偶然」
そんな爽やかに挨拶できるような状況じゃねえんだよっっっ！！
岩迫君はテニスラケットの入ったバッグを背負い、手には通学鞄を持っていた。テニス部ってばこんな時間までやってるのかこの頑張り屋さんめっ。
しかも後ろからは同じようなスタイルの男子生徒たちがぞろぞろと入ってくる。「サコ、知り合い？」とか言って次々私を見る。ノー、やめてくれ。
「吉村、家この辺なの？」
「えぇ、まぁ、うん」
「ここ部活帰りによく寄るんだ。買い食い楽しいよな」
「こ、ころっけとかね」

「コロッケは買ったことないなあ。パンとか豚饅だろ、普通」
普通じゃないことをやってる私は早くこの会話を終わらせたくてたまらなかった。コピーされて出てくる原稿が彼から死角にあって本当に助かった。
「あ、また明日数学教えてよ」
「う、うん」
「よかったあ。あの先生、俺にばっか難しい問題当てるんだよな」
「そ、そうだね」
毎日寝てりゃあ先生も意地悪したくなるよ。それに気づかない岩迫君はもしや天然キャラなのか。
しかしそれも彼なら萌えポイント加算である。五味はオタクという時点でマイナス2万点だがな。
「もうすぐ中間テストだよな。吉村、勉強してる？」
「いや全然」
「とか言ってー。本当はやってるんだろ」
やってない。テストは基本一夜漬けである。
それにしてもよくもこう会話のネタがあるものだな。これがリア充というやつか。私もアニメネタなら豊富にあるんだが。
「なあ」
「な、なんスか」
「コピー終わってない？」
ギックーそこに気づきましたか！
あと五枚コピーしたいんだがそんな贅沢言ってられん。速やかにここから立ち去りたい。だが、だがしかしっ。
原稿を取り出し、大量に印刷したブツを彼に見られずに鞄に仕舞えるだろうか。万が一取りこぼし、原稿がバッサーってなったらどうする？　そういや昔、大量の同人誌を道のど真ん中でバッサーしたことあったな。立派なトラウマだ。
そのときである。
コンビニに救世主が来店した。

「マイナス２万点五味ー！！」
「うわぁっリホ先輩だびっくりしたぁっマイナス２万点！？」
今！　このとき！　現れた五味、いや五味君！！
私は声無きテレパシーを駆使して現在の窮状を訴えた。奴なら分かってくれるはず。コピー機、大き目の鞄、具合の悪そうな顔。これらから導き出される答えはたったのひとつである。
「あ、サコ先輩、パン見に行きましょうよ」
ナイス！　超ナイス！
パンコーナーは店内一番奥。レジ横のコピー機とは正反対。お前はできる子だと思ってたよっ。
「ね、早く行きましょうよ！　俺、お腹ぺこぺこです」
……可愛い子ぶったな、マイナス５０点だ。
「引っ張んなよ五味、じゃあまた明日な、吉村」
顔の横で小さく手を振る岩迫君。うわっ、可愛い。
女子が騒ぐのも分かるわ。途中から岩迫空気読めよとほんのちょっと思ったことを反省する。五味もナイスアシスト、あとでメールで褒めておこう。
危機が去り、私は原稿の回収にとりかかった。
「そうだ、吉村」
「うぁあああああ」
「えっ、どした？」
行ったんじゃなかったの？　五味おめーパンに夢中になって岩迫君野放しにしてんじゃねーよ！
本日二度目の心臓停止にもはや涙目の私。もう絶対にこのコンビニ利用しない。絶対しない。
「驚かしてごめんな。訊きたいことがあってさ」
「は、はい、」
なんだ何を訊くんだ一体、ま、まさかコピー機で何を印刷してるのか訊きにきたとでもいうのか！？
「メアド教えて」

「へ」
「駄目？」
高二男子が首を傾げるなぁあああ！
教えます。教えさせていただきます。男子にそんなこと言われたのあんまりないからなんか緊張するな。オタクのメアドがイケメンの携帯に入っちゃっていいのかよ。岩迫君優しすぎる。
「ありがとな」
「いえいえこちらこそ」
「これで数学の問題、いつでも聞けるなー」
「答えメールで送るのめんどいからイヤだよ」
私は迷った末に名前を『天然岩迫君』と入力した。なんか温泉みたいだな。
今度こそバイバイし、私は速やかに原稿を回収してコンビニを去った。
残り五枚の原稿をコピーするべく別のコンビニに行く途中、携帯が震えてメールの到着を知らせてくれた。
『Ｆｒｏｍ：天然岩迫君』
早っ。そう思いながらメールを開く。
『吉村のメアドゲットー！　今度部室に遊びにいっていい？』
うっ、微妙。イケない本隠さないといけないじゃん。
「三日前にはお知らせください、と」
送信。五分と経たずに返信がきた。
『何隠してるんだよ？　気になる。まさかエロ本！？』
「乙女の夢です、と」
『五味がすっげー笑ってる。乙女の夢ってなんだよー』
「この世には知らなくていいことがあります。返信不要、と」
携帯を閉じて尻ポケットに仕舞った。家に帰ったら岩迫君のために数学の問題解いておくか。そんでジュースじゃなくて今度はお菓子買ってもらおう。
しかし、もう来ないだろうと思ったメールが来た。

『Ｆｒｏｍ：五味
乙女の夢ってなんスか。マジウケる！』
私は返信せずに携帯を閉じた。

7、現行犯逮捕

道場に持ち込んだデジカメと携帯は入り口で没収された。しかも見学者は正座。座布団なし。じじい許すまじ。

「おいそこしっかり声出さんかぁあアア！！」

「はい！」

休憩はまだか、防具で顔が見えん。

私的には右から三番目の彼の声が某声優に似ていてさっきからキュンキュンしてるんだが。

その隣の彼もいいな。一番若くて経験が浅そうだ。さっきから先輩たちに翻弄されてる様がおいしいです。

しごいてるおじさんも素敵だな。門下生たちを厳しくも見守るその眼差し。あぁ私も怒られてみたい。

「何をニヤニヤ笑っとるか」

「アイタ！」

後頭部をスパーンと叩いたのは誰であろう、キタちゃんのじいさまである。

「傷害罪だ」

「ふん、違う。暴行罪というのだこれは」

どっちも駄目じゃん。そう思った私の頭をじいさまが再び叩いた。

その瞬間思った。あの台詞を言うなら今しかないと。

「二度もぶったね？　親父にもぶたれたことないのに！」

防具をつけたキタちゃんがブハぁっと噴き出したのが分かった。

他にも数人の警察官たちが同様の反応を起こす。ガンダム世代ですね。

「貴様ら真面目にやらんか！！」

「「「っは、はい！！」」」

叱られたのは決して私のせいではないと思う。

昼ごはんは門下生の方々と一緒に食卓を囲むこととなった。キタちゃんのお母さんとおばあちゃんが大量のおにぎりやから揚げ、だし巻卵に沢庵を用意してくれていた。

ごはんは美味しかった。しかしひとつだけ文句を言いたいことがある。

なんで私がじいさまの隣なんだ。

「里穂子はちゃんと勉強やっとるか」

「やってるよ。じいさまが思ってる以上に私は優秀ですよ」

「本当か、麗華」

「一年の学期末テストは三十番以内に入ってたよ」

キタちゃんナイスフォローである。そういうキタちゃんは二十番以内に入るほどの優等生ぶりだった。

おかしいよね、テスト勉強一緒にしたことあるけど、教科書読まずに漫画ばっか読んでたのにね。

「里穂子、腰が曲がっとるぞ」

「曲げてるんですぅ」

間髪入れずに背中を叩かれた。

「人様の家の子を叩くとかっ！　現役警察官の皆さん見ましたか！？」

しかしなぜか全員に目を逸らされた。キタちゃんのお父さんなんか笑ってるし。

ここは完全アウェー。唯一の味方はキタちゃんだけだよ。

「そういえばリホ、岩迫君と何かあった？」

なんとここで味方からまさかのキラーパス！

処理できずに咽てしまった。

「そろそろ試験があるだろう。男にうつつを抜かすとはたるんどるぞ、里穂子」

「何言ってんすか、今は平成の世ですよ。ていうか岩迫君はただの

クラスメイトであって何かあったとすれば数学の問題の解き方教えてあげただけですよ」

「勉強口実に好きな女の子に近づくのは常套手段だと思うけど」

発言したのは若干二十歳の星野巡査である。

剣道を始めてまだ半年の彼は道場で何度も転ばされていた。その姿に私は萌を禁じえなかったのだが、防具を外した彼は童顔も相まってまるで高校生のようだった。

「メアド交換したんでしょ」

キタちゃんの怒涛の攻めが続く。目が笑ってるのは気のせいか。

「岩迫君誰にでも優しいもん。クラス全員のメアドどころか、裏庭に住み着いてる野良猫のメアド聞いててもおかしくないと思うよ」

「リホちゃんはその男の子が好きなのかい？」

キタちゃんのお父さーん！

親子そろって何言いだすんだ。ちなみにキタちゃんはお父さん似である。

「ないっす、ないっす。ていうか私、他に好きな人いますし」

二次元のな。

事情を知るキタちゃんが俯いて笑いを堪えている。「えーだれだれ？」とキタちゃんのお父さんが身を乗り出して訊いてくる。女子高生か。

「剣術が得意で糖分大好きで普段はだらしないけどやるときはやる人です」

キタちゃんが天元突破して咽ながら台所へと消えていった。

警察官の皆さんはその人物像に感心していて、キタちゃんのお父さんは「リホちゃんに彼氏かあ…」と気の早いことを言っていた。

いや、できることなら結ばれてみたいもんだが、二次元と三次元には超えられない壁が存在するんですよお父さん。

ちなみに隣に座るじいさまはムスっとした顔で黙っていた。

帰りはなんと星野巡査に送っていただいた。やったね！
いい機会だから警察官の仕事について色々訊いてみた。いつか警察官モノを描きたいものだ。上司×部下は王道として、警察官×リーマンもいいな。ある事件をキッカケに近づく二人とか全国の警察官の皆さんすいません。
しかしそんなヨコシマな私に神様は天罰を下しやがった。
「リホちゃんの好きな人ってアレだろ」
バレました。
星野巡査は漫画読む人でした。オタクじゃないです。
「すいません逮捕してくださいその代わり黙っててくださいお願いします」
「言わないよ。でも北川先生、ショック受けてたから誤解は解いておいたほうがいいぞ」
「おじさんが？」
「じゃなくて」
じいさまが、らしい。
「あの鬼先生がリホちゃんと漫才みたいな会話してるの見て、俺たちがどれだけ驚いてたか分かる？　リホちゃんは麗華ちゃんとはまた違った特別なんだなって俺は思ったよ」
「私、今日は三回も叩かれたんですけど。それも特別ですか」
「俺らなら拳骨だし」
大切にされてるんだよ。
そう言った星野巡査の笑みが、夕焼けに照らされてなんともいえない憂いを帯びていた。
私はその顔を見て、初めて三次元の男の人に対し純粋に格好良いと思ったのだった。

ちなみに自宅近くで兄と遭遇した。二人とも無言で睨みあっていた。

実は兄と星野巡査の間には浅からぬ因縁があったのだが、そのときの私にはまだ知るよしもなかった。

8、勉強は学生の本分

六月初旬。一学期の定期テストを一週間後に控え、放課後の部活動が一切休止になった。

午後の授業を終えて生徒たちが一斉に下校する最中、旧校舎の二階にある漫研の部室に私たちはいた。

「喜べ一年坊主たちよっ、これが去年のテストのコピーだ！」

「わーい！」

「助かります」

「後でコピー代払いますね」

一番喜びを露にしてくれたのは五味だけだった。先輩寂しい。

人数分の紅茶とコンビニで買ったチョコを囲み、漫研部員たちは一週間後のテストに向けて愚痴を言い合っていた。特に五味は深刻だった。定期テストで赤点を取ったら夏の大会に出場できないらしい。

「キタ先輩、リホ先輩、どうか俺にツーツーマンで勉強教えてください！」

「さてとキタちゃん、早く帰らないとアニメの再放送に間に合わないぜ」

「そうだね」

「待ったー！」

そろって帰ろうとする私たちの前に、五味は両手を広げて立ちはだかった。邪魔だ。

「マリちゃん、メグっぺ、同級生でしょ。教えてあげなよ」

「最初のテストで躓きたくないんでお断りします」

マリちゃんの攻撃！

五味は２０のダメージを受けた！

「あの、私も、五味君と一緒はちょっと……」

メグっぺの攻撃！

五味は心に４０のダメージを受けた！
五味は死んだ！
（メグっぺの場合は男の子が苦手という可愛いらしい理由であることを明記しておく）
「もう駄目だぁ……夏の大会は絶望的だぁ……」
「私たちじゃなくてテニス部の先輩に頼ったら？」
「そんなんムリだもん！　テニス部の先輩たちそろってバカばっかだもん！」
自分を棚に上げて五味は泣き真似を始めた。マリちゃんがうぜぇ…という顔をしている。五味、そろそろやめたほうがいいぞ。
「先輩たちのハクジョー者！　俺がレギュラーから外れてベンチを温めてればいいと思ってるんだ！　鬼！」
「ベンチウォーマーも大切な役だよ。豊臣秀吉だって織田信長の草履温めてたじゃない」
紅茶を飲みながらマリちゃんが見えない拳で五味を殴る！
五味が睨む！
おぉっとマリちゃん、鼻で笑い返したー！
「木崎の勝利だな。じゃあ皆、帰って各自テスト勉強に励むように」
「はーい」
空になったカップを洗って片付け、戸締り戸締りっと。
だがいざ入り口の鍵を閉めようとしたところ、五味が出てこようとしなかった。
「五味ー、早く出て来い、閉じ込められたいのか」
「勉強教えてくれないならここに閉じ篭ってやるぅ！」
望みどおり閉じ込めてやった。
「嘘っ、嘘だからぁっ、置いてっちゃやだぁあああ！！」
「五味君ってうっとうしいなあ…」
マリちゃんは心の底からうざそうに言っていた。イケメンも形無しである。

「五味、ついてくるな。ストーカーで訴えられて夏の大会どころか部活停止にさせられたいのか」
学校を出てから五分。家の方向が違うはずの五味が後ろを尾けてくる。しかも電柱や看板の後ろに隠れたりと、バレバレだしベタすぎだしでなんかイラっとくる。
「じゃあ堂々と隣歩いてもいいっすか」
「あんたんち、あっちだろ」
「先輩の家まで送ります！　一人は危険っす！」
もっともらしいことを言って本音は家まで着いてきたらこっちのもんだ部屋に乗り込んで勉強教えてもらおーっと！　と考えているに違いない。
キタちゃんじゃなくて私にしたのもキタちゃんの家が道場でしかも警察官が多く出入りしているという話に怖気づいたからだろう。明らかに私ナメられてるな。
「吉村？」
どうやって五味を追い返そうかと考える私に、彼は声をかけてきた。振り向くと、そこには岩迫君が立っていた。
「五味、お前まだ帰ってなかったのかよ」
「先輩こそ」
「俺は本屋に行ってたんだよ」
「えっ、まさか参考書を買いに！？」
ほら見ろ、お前が馬鹿にした先輩は偉大だぞ。イケメンは努力してこそイケメンなのだ。
私が感心していると、岩迫君はイケメンスマイルを浮かべて言った。
「雑誌立ち読みしてた」
駄目だこいつ…早く何とかしないと…。
リアルでこの台詞が思い浮かぶ。夏の大会は二人そろってベンチ

ウォーマー決定だな。
「お前らは何してんの？」
「俺はこれからリホ先輩のうちで勉強教えてもらうんです」
「何勝手なこと言ってんだ！」
強めのパンチを五味にお見舞いしていると、今度は岩迫君がとんでもないことを言い出した。
「えーいいな！　俺も混ぜてよ！」
「サコ先輩、数学ヤバいですもんね。よし、三人でテスト勉強だ！」
「じゃあコンビニ寄ってスナックとジュース買ってこうぜ」
「了解っす！」
うわぁあ勝手に決まってるぅうう！
なんて奴らだこっちの意見お構いなしかよ。部活ヒエラルキーで言うとたしかにテニス部はピラミッドの上のほうだが、だからってこんなことが許されるとでも言うのか。
「吉村、もしかして迷惑？」
「う！」
上目遣いっ、わざわざしゃがんで下から顔を覗き込んでの上目遣いっっ。
隣で五味が同じようなことしてるけどムカつくだけだからやめろ。
岩迫君の濁りの無い眼に見つめられ、私はものの見事に屈服したのだった。

9、おまえがナンバー1だ！

「おじゃましまーす！」
「でかい声出すな」
この時間、両親はまだ帰っていなかった。玄関には兄の靴も妹の靴もない。
二人を連れて二階に上がり、扉を開ける前に私は待ったをかけた。
「ちょっと片付けてくる」
デスクには原稿が置きっぱなしなのだ。ネームの束と一緒にファイルに入れて、まとめてそれらすべてを隠す。そして本棚をチェック。…よし、ＢＬ本は紛れてないな。
フィギュアは隠したほうがいいのかな。引いちゃうかな岩迫君。いやでもこっちが漫研だってことは分かってるし……布を掛けておこう。
部屋をざっと見回してみる。よし、ただの漫画の多すぎる部屋にしか見えないな。完璧だな私。
二人を呼び入れると、部屋の真ん中に折りたたみの机を置いた。それから一年のときに纏めた授業用ルーズリーフを取り出した。
「ほい、去年のノート。暗記物はこれで大丈夫だと思う」
「あざーっす！」
見えない尻尾を振る五味の隣で岩迫君は物珍しそうに部屋を見回していた。
「いいなあ、個人のパソコン。ゲーム機も揃ってるし、漫画もいっぱいある」
彼が羨ましそうに眺めている本棚は言わば外向き用である。一般人には見せられない本はクローゼットの中の本棚に仕舞ってあった。
「あ、この漫画前から読みたいと思ってたやつだ」
「テスト終わったら貸してあげるから。岩迫君、勉強しようか」
大丈夫なの、なんか不安になってきたんですけど。頼むからテニ

スで培った集中力を勉強に回してくれ。
　とりあえず二人が苦手な数学から始めることにした。二人ともまったく基本が分かっていなかったので、それぞれの公式を五十回ずつ書かせてから問題を解かせていった。
「理解しようとしなくていいから。とにかく公式に当てはめて解いていこう」
　試験問題の後半はいっそ捨てさせることにした。前半部分で点を稼げばライン４０点は取れるはずだ。
「リホ先輩、俺、英語もヤバいんですけど」
「安心しな。英語の下村先生はほとんど問題集から出してくるから。その答えを完璧に覚えたら３０点、発音問題で１０点、単語の読み書きで１０点、合計５０点取れるはずだ」
「うっす！　リホ先輩、頼もしいっす！」
　だがその前にまずは数学だ。五味の場合、苦手意識で避けているだけで向き合ってみれば案外できるはずである。
　問題は岩迫君だった。
「焦んなくていいから、ゆっくり解いていこう」
「うん…」
　コクンと頷く岩迫君に正直言うと萌えた。私よりずっと背が高いし男なのに可愛いってすげえ。二次元に負けてねえ。一問も解けてないけど。
「俺、もう駄目だ……出場無理かもしんない……」
「大丈夫っすよサコ先輩、そのときは俺が頑張りますから！」
「お前は黙ってろ！」
　とにかく優しい問題からだ。あとは数学の鰐淵先生の作った試験問題が手に入ったらいいんだけど。先輩に頼みたいところだが、あの人今入院してるんだよなぁ。
　過去問を手に入れる方法はまた追々考えるとして、私も勉強しよう。国語その他は一夜漬けでいいとして英単語は今から覚えとかないとな。

英単語帳を取ろうと腰を上げたそのとき、階段を駆け上る音がした。次の瞬間ドアが乱暴に開け放たれた。
「リホっ、おま」
「うわマジで男連れ込んでるよ。リホちゃんやるな」
「兄妹そろってメンクイかぁ」
「どっちが本命なの？」
上から兄を押しつぶすようにお馴染みの三人組が現れる。
呆気にとられる私たち。奴らはこっちが喋らないのをいいことに
「３Ｐ？　３Ｐ？」とか「お兄さんも入れてよぉ」とか言ってくる。
はっきり言おう。こいつらは最低である。
「四人ともリホ先輩のお兄さんっすか？」
しかしここで物怖じしない五味がやつらに話しかけた。お前はどれだけ怖いもの知らずなんだ。
「そうだよ。俺たち全員リホちゃんのお兄ちゃんさ！」
「嘘つけぇ！　五味、信じるなよ、全員違う！」
「だってよ、ショータ」
あ、やべ、間違えた。一人いた。
「一番目つきの悪いのがうちの兄ちゃんだった」
「おい聞いたかショータ、妹に愛されてんなぁ」
相変わらず神谷は意地の悪い男だな。ていうかもう出てけよ。
「テスト勉強してるんで出ていってもらえませんか」
そうそう。
「え！？」
私が言ったんじゃありませんよ。彼です、岩迫君です。
驚いてまじまじと彼を見ていると、後ろのほうから「ふーん」とものすごく嫌な感じの神谷の声が聞こえてきた。
「お前、名前は？」
「そっちが先でしょ」
「神谷蛍太」
「岩迫総一郎です」

……自己紹介って普通もっと和やかに行われるものなんじゃないの。なんですかこの空気は。会ったばかりなのに険悪にもほどがある。

「あ、俺は五味貴志っていいます！　リホ先輩にはお世話になってまーす！」

五味、でかした！　初めてお前の空気読めないのが役に立った！

あの神谷がぽかんとしてるぞ！

よし行け今だ。

「兄ちゃん、出てってくれる？」

「あァ？　勝手に他人を家にあげてんじゃねーよ」

おいおい、いつも来るこいつらは他人じゃないのかよ。なんで機嫌悪いんだよ。相変わらず読めねえよこの人。

「兄ちゃん、何怒ってんの」

「うるせえ」

「……神谷さん、ねぇちょっと兄ちゃんが」

「岩迫右利き？　なんかスポーツやってんの」

「だったら何だっていうんですか」

「怪我したら困るかなーって」

「脅してるんですか」

「ちょっと二人とも聞いてますかー？」

「リホ、これ読んでいー？」

「澤田さんっ、自由すぎる！」

「モンハンあるんだ。今度一緒に狩りしようよ」

「浅野さんっ、その眼鏡叩き割りますよ！」

バラバラ！　てんでバラバラ！　このままじゃオチつかないよ！

兄ちゃんキレてるし、岩迫君と神谷は睨みあってるし、澤田と浅野は人の部屋勝手に物色してるし、五味はジュース飲んでるし。

ここ私の部屋だよね。皆の部屋じゃないよね。今日はテスト勉強するんだったよね。

なんなの。なんで勝手なことばっかすんの。

五味と岩迫君がいないときはまだいいよ。好きにさせとく。でもさ、今日は私の友達が来てるんだよ。キタちゃん以外の友達が初めて私の部屋に来てるんだよ。

だから、

「お前らいい加減にしろ！！！」

全員の視線が私に集中した。私の頭は怒りを通り越して妙に冷めていた。

「神谷、私の友達に絡むのやめろよ。澤田、浅野、好きなもん持ってけ。兄ちゃん、ノックしてから入れって私いつも言ってるよね。全員、さっさと出てけよ」

あごで出口を指し示す。

最初に動いたのは澤田と浅野だった。その手にはちゃっかり漫画とゲームが握られていたが持ってけって言ったんだからいい。神谷は、なんだその心底びっくりしましたという顔は。さっさと行け。

最後に兄が部屋を出て行き、部屋の中は最初の三人となった。

「……勉強再開しよっか。私、英語からやろーっと」

わざと明るい声を出してみたが、二人が引いていたのは明らかだった。

オー、ジーザス！

10、ともだち

後輩とクラスメイトの目の前でブチギレた事件から一夜明けた学校の放課後。私は漫研の部室で昨日の出来事をキタちゃんに打ち明け、今盛大に落ち込んでいた。

後悔先に立たずという言葉が今さらながらに頭をよぎる。なんであのときもっと我慢できなかったのか。

「落ち込んだってしかたないでしょ。やっちまったもんはやっちまったんだし」

「それはそうだけど、でもでもキタちゃんっ」

「五味はあの性格だから一日経ったら忘れてるだろうし、岩迫君だって気にしてないって」

いやでも昨日の気まずい空気といったらなかった。

あれからほとんど会話もせずに勉強会は終わってしまった。五味はいつもと変わらない気がしたけど、岩迫君は明らかに暗い顔をしてた。今日の朝は教室で一瞬目が合ったと思ったら向こうから逸らされたもんね。昨日のこと引きずってるのは間違いない。

「私もヤンキーだと思われてたらどうしよう、もうお話できないのかな」

「別にいいんじゃない？　たかが岩迫君のひとりくらい」

テニス部のイケメンエースをたかが呼ばわり。キタちゃん、岩迫君ファンの女子に聞かれたらボコにされますよ。

「そうやってショック受けてるのって、やっぱり岩迫君のことが好きだから？」

「違うよ、そんなんじゃないよ」

キタちゃんは前からそれを疑っているようだが違うんだ。そんな甘酸っぱい思いとかじゃない。

机に上半身を倒し、私は昔のことをぽつぽつと語りだした。

「中学生のとき、けっこう仲の良い男の子がいたんだ。漫画とかゲ

ームの話でよく盛り上がってたんだけど、それを見たクラスの子が私たちが付き合ってるんじゃないかってからかってきたんだよね」

それを聞いた私は、からかってきた連中を見て「喋ってるだけで恋人同士だと思っちゃう思春期すごい」と暢気に考えていたけど、相手の男の子はそうじゃなかった。突然からかわれて冷静になれなかったのだろう。

「誰がこんなオタクと付き合うかよ、ありえねえ。そう言ってさっきまで楽しそうに話してたのに、私のこと突き飛ばしてどっか行っちゃった」

残された私はクラスに残った嫌な空気の中でひとり縮こまることしかできなかった。

彼に対して恋愛感情があったのかどうか、今の私にはよく分からない。好きだったのかもしれない。でもそうじゃないかもしれない。どっちでもいい。私はあのときただただ怖かった。さっきまで笑っていた人が、次にはもう私を睨みつけている。それが恐ろしかったのだ。

「最近、教室で岩迫君とけっこう話すんだ。そしたら全員じゃないけど、変に思う人っているんだよね。そしたらこの間、偶然にだけど聞いちゃったんだよね」

『サコ君、吉村さんのこと好きなの？』

たぶん彼のことを好きな女の子だろう。不安そうな声で、伺うように聞いていた。

私はまたあのときのように貶されながら否定されるんだろうかと不安になった。

『吉村？　うん、好きだよ。友達としてだけど』

『友達なの？』

『そうだよ。吉村と話したことある？　あいつ面白いよ』

私は心臓をドキドキさせながらその場を去った。

「嬉しかった。岩迫君が私を友達だって言ってくれたんだよ。そのとき気づいたんだ、私はあのときもそういうふうに言って欲しかったんだなって。『こいつとは友達だよ』ってそれだけでよかったんだって」

「だからその友達に嫌われたら怖い？」

「うん。怖いっていうよりかは悲しい、かな。でもこればっかりは仕方ないよね」

誰かを好きになったり嫌いになったり、私にはどうすることもできない問題だ。

「リホは悪くないよ」

「……うん」

「それしきのことで友達やめるんなら岩迫も大したことなかったんだって。忘れな、そんなやつ」

「岩迫君は良い子だよー」

「親友の私の前で他の人間ばっかり褒めないでよ」

「え、なになに？　嫉妬ですか、リホ嬉しい」

「うっさい。帰るよ」

キタちゃんったら照れてますよ。可愛いな。

でもちょっと元気出た。さすが親友。

「あ、来た来た。遅いっすよもー！」

正門にはなぜか五味がいた。でかい声を張り上げてぶんぶん手を振っているので、私とキタちゃんは顔を見合わせた。

「どうした五味、こんなところで待ち伏せしたって勉強は教えてやらないからね」

「テスト対策はリホ先輩に聞いたから大丈夫っす。俺よりもこの人のほうが危ないですよ」

どの人だよと思っていたら、門の後ろからなんと岩迫君が出てき

たではないか。キタちゃんの視線が微妙に尖る。
「あの、吉村」
なんだなんだ何を言う気だ。
私が及び腰になっていると、岩迫君は意を決した顔をした。
「昨日はごめん！！」
両手を合わせて頭を下げる顔を見下ろし、私は唖然とした。
「俺もう情けなくって、今日ずっと吉村の顔見れなかった。本当にごめん」
「はい？」
「あの人たち追い出した吉村見て、やっと自分がここに何しに来たのか思い出して、自分が情けないっていうか恥ずかしくなっちゃってさ、絶対呆れられてると思って今日なんか無視みたいなことしてますます恥ずかしくなってそれで」
「ストップ！　岩迫君、落ち着こう」
頭の中がぐちゃぐちゃになってるな。クールダウンだ岩迫君。
少しだけ間を置いてから私は自分の気持ちを語った。
「別に呆れてなんかないよ？　むしろ私のほうが呆れられてるんじゃないかと思ってた」
「なんで！？　昨日の吉村すっげえカッコよかったじゃん！！」
「そうっすよ。いきなり怒り出したのにはビックリしたけど」
「俺、あの神谷って人と話してるとき実はちょっとビビってたんだぜ。なのにまとめて追い出したからすげーって、それに比べて俺は」
「分かったもういい」
テンション上がって再び下がり始めた岩迫君を制し、私は状況の整理を行った。
つまりはだ。彼と私は以前と何も変わっちゃいないっていうことか。
「岩迫君。……私のこと、まだ友達だって思ってくれてる？」
「なにそれ、当たり前だろ」
あたりまえだろ。

聞きましたか、皆さん。いや、キタちゃんと五味しかいないけど。
私たち、友達なんだって。
「へ、ふへへ……」
「リホ先輩が不気味な笑いを！？」
「落ち着け、五味。あれはめちゃくちゃ喜んでる笑いかただ」
外野がうるせえ。
私は緩む口元を押さえ込み、岩迫君と向き直った。
「数学、どう？　ひとりでやれそう？」
「そんなのムリだって吉村が一番分かってるだろ」
「だね。じゃあ図書館行って勉強しようか」
岩迫君は嬉しそうな表情を浮かべて「うん！」と言った。男子が「うん」って……落ち着けリホコ、彼のこれにはもう慣れるんだリホコ。
その後、五味としぶしぶキタちゃんも加わった四人で一緒にテスト勉強した。楽しかった。

11、飛んでいくよ

中間テストも今日で終了し、あとはテスト結果を待つばかりである。

気の早い部活は今日から活動を再開していた。テニス部もその例に漏れず、岩迫君の肩には大きなテニスバッグが掛けられていた。

「俺、大丈夫な気がする。夏の大会、がんばるよ」

玄関ホールまでの道のりを共にしながら岩迫君は言った。テスト結果に対する不安は微塵も見られなかった。

「吉村、今日はもう帰るのか？」

「うん。やることあるから」

漫画を描くという大仕事がな。とは言えなかった私は笑顔の向こうで八月の大イベントに向けての過密なスケジュールを組み立てていた。新刊三冊という目標を掲げる私にとって、テスト終了すなわち夏の陣に向けての戦いの始まりである。

テスト勉強の片手間にネームを仕上げた私はこれからペン入れに入り漫画を仕上げ印刷所に依頼しキタちゃんの小説本の表紙を描いてサイト更新、あぁ時間が足りない。

「部活がんばってね」

「うん。あ、そうだ。テスト勉強のお礼に何かしたいから、何がいいか考えといてよ」

爽やかにそう言うと彼はテニスコートへと向かっていった。

相変わらず格好良いなあと思いつつ、私は靴を履き変えて学校を後にした。

学校を出ておよそ十分がたった頃。通学路の中ごろまで来た私は最大のピンチを迎えていた。

ヤバい。これはヤバい。どんだけヤバいというと印刷所の締め切りに原稿が間に合わなかった去年よりもヤバい。

「か、勘弁してくださいぃ…！」

通学鞄を抱きしめながら、私は人気のない路地の壁際に追い詰められていた。目の前には言っちゃ悪いが頭の悪そうな三人組がいる。

突然すぎてまだ混乱しているが、間違いなくこれはカツアゲである。漫画では何度も見たシーンだがまさか自分がこんな目に合う日が来るとは思ってもみなかった。さっきから歯の根が合わない。泣きたくないのに泣きたくなってくる。

「ごちゃごちゃうっせえよ。鞄よこせって」

基本、ビビリな私はいつもならさっさと鞄を渡していただろう。だが今日はできなかった。なぜなら鞄の中にはさっきコンビニで下ろしたばかりの五万円（印刷代金諸々）が入っていたからである。

「やめ、やめてください、」

「はぁ！？」

「うっわー、生意気ぃ」

「ブスがイキがってんじゃねえぞ」

はい生意気です、はいブスです、だがこの金は渡さん！！

お前らに分かるか、これはな寝る間を惜しんで描き上げた私の漫画を買って下さった皆様からいただいたものなんだぞ。慣れない接客のバイトをして稼いだものなんだぞ。

文字通り汗と涙と不眠の結晶をお前らなんかにやれるか。どうせゲーセンかエロ本に消えてくくせに。オタクなめんな。

「よこせって！」

「あ！」

鞄に手が掛かる。私は咄嗟にその手を払いのけた。間髪入れずに胸倉を掴まれる。

「てめー殴られてーのか？」

一応女だから勘弁してやってるみたいな言い方だったけど、今にもその握った右手は私の頬にめり込みそうだった。

おい、待て、せめてそのゴツい指輪は外してからにしてくれませんか。
「鞄渡したほうがいーよー？」
「テツがキレたらお前死ぬよ？」
死んだら漫画が描けなくなる。この状況の中で私はそんなことを思ってしまった。
思ったと同時に、鞄をより強く抱きしめていた。
「…本当に…やめてください」
目の前の不良の眉間にいっそう皺が寄った。大人しそうな外見の私にこうも抵抗されるとは思ってもみなかったのだろう。それが彼のプライドを著しく傷つけたのが分かった。
やられる。目をつぶって私は身を固くした。

「あれリホじゃない？」

聞きなれた声に私は閉じた目をぱっと開けた。ゆっくりと視線を横にずらしてみると、そこにはアイスを片手に持つ澤田と浅野がいた。
「あ、やっぱりリホじゃん。なになに、カツアゲされてんの？」
「襲われそうな顔してるもんな」
なんて暢気な連中だろう。だが今は許す。お前らよく来たな、ゆっくりしてってくれよな。
私は力の限り叫んだ。
「助けてください！」
「お、セカチューみたい」
「古いよ澤田」
「俺、元カノとあの映画観たんだよね。途中で寝てすごく怒られた」
「はは、澤田らしい」
「だってつまんなかったし。っと、アイス溶けてる」
澤田と浅野は慌ててアイスをペロペロし始めた。ちょっと待てあ

りえないだろ。襲われかけてる私よりも溶けかけたアイスの心配か。
「アイスぐらい私が奢ってやる！！　さっさと助けろお願いします！！」
「やだ」
なん…だと…。
私と同様、不良たちも唖然とした。
「リホ、この前俺たちのこと追い出したじゃん。だからやだ」
プイと顔を背ける澤田に、私は開いた口がふさがらなかった。
そんな理由で友人の妹を見捨てるというのか。可愛い顔して悪魔かこいつは。
「浅野さーん！」
貴方なら助けてくれますよね。私が密かにインテリヤンキーと呼んでいる眼鏡をかけた彼にすがるような視線を投げかける。
だが彼は笑顔で首を横に振った。
「なんだよこいつら…」
不良その一が言った。私も同意する。
たしかにやつらには私を助ける義務などない。このまま見捨てられても私に文句を言う権利はないだろう。所詮は他人なのだ。
だがしかし！　この怒りを誰かにぶつけるのは私に与えられた自由だ！
「テツ！　あいつらをやれ！」
「は？」
「ほら行け、なにグズグズしてんだやっちまいな！！」
胸倉を掴んでいたテツをけしかける。私は脅されていた事実などすっかり忘れ果て、目の前の澤田と浅野の抹殺に頭を支配されていた。
「こっちは三人だ、今謝るなら許してやる！」
「リホってさぁ……」
「はぁ……」
ため息を零す二人。

そのとき困惑する不良の一人が前のめりに吹っ飛んだ。
「なに敵に回ってんの、リホちゃん」
後ろから声がする。変だなとは思っていた。澤田、浅野、ときてなぜ神谷がいないのかと。
「ま、話はこいつら片付けてからにするとして」
私の頭に手を置いた神谷は、不良たちを見て不敵な笑みを浮かべた。

「だって知らなかったんです後ろから私を助けてくれようとしてたなんてそんなの言ってくれなきゃお釈迦様でも分かりませんよ！！」
ものの数秒で終わった喧嘩の後、私は責められていた。
「リホってバカなの？　ていうかなんでさっさと財布渡さないんだよ、このバカ」
と澤田が言って。
「眼鏡が割られてたらどうすんの、女の子なのに」
と浅野が言って。（そこは普通顔だろ）
「リホちゃんは隙だらけなんだよ」
と神谷が言った。
またしても三対一とは卑怯である。
「ごめんなさい。助けてくれてありがとうございました」
謝る私に満足したのか、彼らはようやく解放してくれた。そして意外なことに神谷が家まで送ってくれることになった。
帰り道、隣に並んだ神谷が私の頭に手を置きながら言った。
「怖かったよな。すぐに来てやれなくてごめんな」
「どうしたんですか神谷さん、さっきの喧嘩で頭でも殴られたんですか」
言った瞬間、手に力が込められた。痛い、やめろ、私の頭はボールじゃねえんだぞ。

「リホちゃんって素直じゃないよな」
「ひねくれてるのは自覚してます」
「そんなんじゃ彼氏できないよ」
「いりません」
できませんというのが正しいところだけど、今の私は彼氏というものに購買意欲を感じていなかった。
彼氏というのは聞くところによると月に何度かデートしないといけないらしい。漫画ばっかり描いててインドアな私には無理な話だ。休みの日は漫画を描くか録画したアニメを消費するのがオタクの正しい過ごし方なのに、外に連れ出されたり部屋に来られては非常に困る。
「リホちゃん、ついたよ」
家の前を通り過ぎようとしていた私の頭を神谷がつかんで引き戻す。いてて、私の頭はジョイスティックじゃねえぞ。
ムカついて文句を言おうとすると、神谷は何を思ったか自分の携帯を取り出し、そして私の制服の胸ポケットに入っていた携帯を抜き取った。
何してるんだろと眺めていると、神谷は操作を終えて私の携帯を返してくれた。どうやら自分の連絡先を登録したらしい。
「絡まれたら俺に電話すること」
「助けにきてくれるんですか」
「空飛んで来てやるよ」
何言ってんのこの人、と思ったけど頷いておいた。普通の女の子ならイヤーン素敵と思うのかもしれないが物理的に無理である。ほんとひねくれてるな私。
二度目がないことを祈りつつ、私はお礼を言って家へと引き上げようとした。そのときまたもや頭にぽんと手が置かれる。
「無事でよかった」
神谷の顔を見なければよかった。
私は不覚にもきゅんとした胸を押さえつつ、やつの背中を見送っ

たのだった。

12、くまさんに出会った

なんで月曜日の一時間目から体育なんだろう。
「あ～タルい～」
誰だこんな時間割組んだやつは。ただでさえ憂鬱な月曜日をさらに憂鬱にして楽しいのか。ゆとり教育カムバック。
体育の何がイヤって、授業の前に外周を二周走らないといけないところである。しかも一周５００メートルを二周って鬼か。体育教師は私たちをどうしたいんだ。強化兵士にでも作りかえるつもりなのか。
そう考えながら寝ぼけ眼でちんたら走る私の肩に、誰かがぽんと手を置いた。
「よっす」
「……ん？　おお、岩迫君ではありませんか」
「お前、今寝ながら走ってただろ」
「寝てないよ。目をつぶってただけだよ」
「同じじゃん」
岩迫君はさすが運動部、朝っぱらから元気溌剌だった。そもそも授業の前に朝練があるんだから、体育なんて朝練の延長にすぎないのだろう。
「女子って今日なにすんの？」
「サッカーだって」
「いいなあ。俺らハンドボールだぜ」
「よくないよ。女子のサッカーの怖さを知らないな」
私のペースに合わせて走る岩迫君に、その怖さとやらを聞かせてやった。
素人によって行われる女子のサッカーとはひとつしかないボールにすべての人間が群がる競技である。ポジション？　なにそれ？
とにかくボール奪ってゴールすりゃあいいのよ。邪魔よどきなさい

ちょっとあたしの足踏んだの誰よあれゴールってどっちだっけ！
「みたいなさ。ボールがリンチ状態で可哀想になってくる」
「アハハなにそれ！」
「笑いごとじゃないよ」
あの中に入る勇気なんて私持っていないよ。イヤだな、来週もサッカーなのかな。せめて卓球がいいな。ブタミントンでも可。
「あ、雨宮だ」
「ん？」
岩迫君に倣って前方を見ると、一人の男子生徒がこちらに向かって歩いていた。もうとっくに一時間目の授業は始まってるし、走っても仕方ないと諦めているのだろう。
ゆったり歩く彼と、スローペースだが走る私たちの距離がだんだんと近づいてくる。
「よっす雨宮、重役出勤だな」
「ん」
「またなー」
「ん」
それだけの会話を交わすと私たちはあっという間にすれ違っていった。
なんというか無口な子だな。体もすごく大きかったし、まるで森の熊さんみたいだった。柔道部かな。
「あいつ、相変わらず喋んねーの」
「でも動物みたいで可愛かったよ」
「え、吉村ってああいうの好きなの？」
「好きっていうかキャラが確立してる人って憧れるよね」
「なんだよそれー」
またもや笑い出す岩迫君に私は感心した。よく走りながらそんなに笑えるもんだ。私はさっきの会話ですらひいひい言ってるのに。
その後、走り終わるまで岩迫君は無邪気に話しかけてきたのだった。

『リホちゃん今なにしてる？』
これが『今なんの下着履いてるの？』だったら神谷は完全に変態だな、と思いつつ私はありのままを返信した。
『これからお弁当食べるところです』
ついでに弁当の写メも添付してやったら、すぐにメールがきた。
『うまそう。でもショータは今日パンだけど？』
『そうなんですか』
兄が何を食べようが勝手なのでそう返しておいた。
ちなみにメアドを交換してから、私と神谷は頻繁にメールのやり取りをしている。ほとんどというかすべてがさっきのような他愛のない内容だったりする。
「リホちゃん、食べよー」
「そっちの席借りてもいいのかな」
「食堂行くって言ってたから大丈夫だと思うよ」
同じクラスの友達、ちよちゃんと村っちがやってきた。キタちゃんと部室で食べることもあるけど、ほとんどが教室でこの二人と食べる場合が多い。
「今日は一時間目から体育でお腹減ったねー」
「ほんとほんと。今はまだいいけどさ、冬になったら持久走だよ。軽く死ねるね」
「私、足遅いし持久力ないからやだなあ」
愚痴を零しあっているとメールがきた。神谷だ。
『リホちゃんドライだねー。兄貴の分も弁当作ってやったら？　ショータが拗ねてるぞ。まあ見てて面白いけど』
「はぁ？」
「どしたの、ヨッシー」
「いや、うーん……村っちってさ、自分でお弁当作ってるって言っ

てたよね。それって兄弟の分も作ってあげてるの？」
「うん、作ってるよ」
そうなんだ、そういうものなんだ。
私たち兄弟のお小遣いは一月二万円である。その中には昼食代も含まれているのだが、私はコンビニや食堂を利用せずに自分でお弁当を作って持っていった。
だってそうしたほうが昼食代が浮いて余ったお金で漫画が買えるからである。
だけども私は自分ひとりのお弁当しか作っていなかった。これっていけないのかな。神谷の言うドライってやつなのかな。
昨日の夕食と冷蔵庫にあった余りものの食材で構成された弁当を見下ろし、私はつい考え込んでしまった。
「リホちゃん？」
「あ、うん。ねえ二人とも、頼まれもいないのに兄妹のお弁当作ってあげたらウザいかな」
「そんなことないと思うよ。嬉しいんじゃないかな」
「でもうちってあんまり仲良いとは言えないんだよね。だからビミョーっていうかなんていうか」
「うちも兄貴がいるけど、私が弁当作ってあげてるから色々と優位に立てることがあっていいよ」
「村っち、私は別に兄ちゃんに対して優位に立ちたいわけではないんだけど……」
とりあえずメールにはこう返信しておいた。
『頼まれたら作ります。それにしても神谷さんは兄ちゃん思いですね』
「神谷！？」
「うわぁ！」
突然後ろから声がして私は思わず携帯電話を取り落としてしまった。
慌てて拾うと、岩迫君が申し訳なさそうに私を見下ろしていた。

「ごめん、盗み見するつもりじゃなかったんだけど、見えちゃって」
「いいよいいよ」
「携帯壊れてない？　傷ついちゃってるだろ」
「大丈夫っす。それに何度も落としてキズだらけだから気にしなくていいよ」
「ほんとにごめん。あとこれ、返そうと思ってたんだ」
渡された紙袋には私が貸した漫画が入っていた。
「じゃあ明日、続き持ってくるね」
「ありがと。実は続きがすっごく気になってたんだよな」
「いいところで終わってるもんね。そこで終わるか！？　っていう」
「そうそうっ、あまりにも気になって、吉村の家に借りに行こうか迷ったもん」
興奮して話す岩迫君と漫画の感想を言い合っていると、またもやメールが送信されてきた。開いてみるとやっぱり神谷だった。
『気持ち悪い言い方しないでくれる？　次に会ったら苛めてやるからな。覚悟してろよリホちゃん』
「神谷っ…！」
メールでさえ意地悪を発揮するとはあいつは筋金入りの苛めっ子だな。この前助けてくれたけどチャラだチャラ。
「吉村、神谷ってあの人だよな？　仲良いのか？」
「何をおっしゃる岩迫君」
見るとなぜか真剣な顔をしている岩迫君がいらっしゃった。イケメンが真面目な顔をするとさらにイケメンだな。暢気に感心していると、岩迫君は眉間に皺をぎゅっと寄せて言った。
「友達に聞いたんだけど、あの人って佐倉木高校の有名な不良なんだろ？　吉村、嫌なことされたりしてないか？」
「え」
「前に何度も派手な喧嘩したことがあるって聞いたんだ。だから大丈夫なのか心配になって」
岩迫君、たぶんその派手な喧嘩の主犯はうちの兄ちゃんだ。

口が裂けても言えなかったので、私は言葉を選びながら慎重に言った。
「大丈夫だよ。神谷はたしかに性格歪んでるし喧嘩はするけど、岩迫君が思ってるような悪いやつじゃないよ」
良いやつでもないけどな。
「危ないことはないから心配ないって」
「だったらいいんだけどさ」
あまり納得してなさそうだが、言って理解してくれるものでもない。たぶん二人の相性が悪いから余計に心証もよくないのだろうけど、神谷が私に対して苛めることはあっても悪さをすることはないだろう。それだけは確信があった。
そのときクラスの男子が岩迫君を呼んだ。
「あ、分かった今行く。…吉村、なんか余計なこと言っちゃった、ごめんな」
「ううん」
笑顔で彼を送り出すと、私は再び昼食を再開した。しかし視線を感じて顔を上げてみると、ちよちゃんと村っちが驚いた顔をして私を見ていた。
「リホちゃん、最近よく話してるなあとは思ってたけど、本当に岩迫君と仲良しなんだね」
「仲良しっていうか、漫画の貸し借りくらい普通だよ」
「まあたしかにあんたたち見てると、男同士の友達みたいだったけどね」
村っちってちょっとキタちゃんと似てるんだよなあ…。
二人が話したらけっこう気が合うのかもしれない。今度紹介しようと思う私なのだった。

「辞書早めに返せよ。落書きすんなよ」

「……さっき話してた女子と仲良いのか？」
「は？　なんだよ雨宮、知ってんの」
「知ってる。吉村里穂子だろ」
「前のクラス一緒だったっけ」
「違う。じゃあこれ借りてくな」
私が弁当を食べているとき、岩迫君と謎の男子生徒との間ではそんな会話がなされていた。
謎の男子生徒、雨宮君との出会いの一週間前のことである。

13、くまさんとお喋りした

復讐は何も生み出さない。

とは一昔前のドラマでは頻繁に使われていた台詞だが、私はそこに反論したい。

なんでやられたまま黙ってなきゃならないんだと。

右の頬を打たれたら左の頬もと言うけれど、私にとってはまったくありえない話だ。せめて右の頬を打たれた時点で逃げなさいくらいは言ってほしいものである。

だったら復讐賛成派なのかといったらそうでもない。なぜなら私は小心者でビビリで忘れっぽいという三重苦を抱えているからだ。復讐なんかしてさらなる報復を受けるくらいなら我慢して忘れるのが一番である。

そう思うのは私が今までに大して辛い思いをしていないからだと気づいたのは、つい先ほどのことだった。

「雨宮君、ポッキーいる？」

「もらう」

一本あげるつもりが雨宮君は五本も持っていった。しかも五本一気に噛り付くという暴挙に出た。

私は二度と勧めないことを誓った。

「佐倉木高校からここまで二十分ぐらいかかるんじゃないかな」

「あと十分か…」

腕時計を確認した雨宮君がぽつりと呟いた。

そのときどこからともなく犬がやってきた。河原の土手は散歩スポットなのだろう。首輪のついた犬がハァハァ言いながら走り寄ってきたので、私は逃げるようにベンチの後ろに回った。

「犬嫌い？」

「いや、そうでもないんだけど、あんまり触ったことないから、」

「うちは二匹飼ってる。柴犬とワイマラナー」

柴犬は分かるけどワイマラナーというのは聞いたこともない。でもとりあえず「ふーん」とだけ言っておいた。

飼い主不明の犬は人懐こかった。雨宮君が無表情に撫で繰り回すとあっさりとお腹を見せてもっと撫でてと訴えてくる。

「触ってみたら」

「大丈夫かな。油断させといてガブっていかない？」

「そんな卑怯な真似しない」

本当かよ。恐る恐るお腹を撫でてみると犬はハヘハヘ言いながら尻尾を振りまくっていた。

「可愛い」

さっきまでの恐怖心など忘れ、私は両手でくすぐるように犬を触りまくった。その姿を雨宮君がじっと見ていたけど、あまりにも無表情すぎて何を考えているのか私には分からなかった。

そのうち飼い主に呼ばれたのか、犬は起き上がるとどこかへ行ってしまった。

「あーあ、行っちゃった」

私は座りなおすと携帯を開けた。着信履歴には神谷からの電話が十回以上も入っていた。

「出るなよ」

「出ないよ」

私は一応人質なのだ。自由な連絡は許されない、らしい。

「そういえば聞きたいことあったんだけど、いい？」

「なに」

「雨宮君ってなにか格闘技やってるの？」

「空手」

「柔道じゃないんだ」

「それも少しやってた」

「強い？」

「うん」

「兄ちゃんより？」

「それを今から確かめる」
雨宮君は拳を握った。大きな手だなと思っていると、遠くのほうからバイクの走る音がした。
「来た」
雨宮君が静かに立ち上がった。

１４、くまさんにパンチされた

「吉村里穂子」
日常生活においてフルネームで呼びかけられることなど滅多にない。
その滅多にないことに私は反応して足を止めた。下校途中のことだった。
「…岩迫君の友達？」
「雨宮森」
＜あまみやしん＞と名乗った男子生徒は、一週間前に遅刻してきた彼だった。その彼が一体何の用だろうと思っていると、雨宮君は大きな体の割には颯爽とした歩き方で私に近づくとこう言ったのである。
「お前の兄貴、呼び出せ」
「はい？」
「早く」
分かりました、と即座に言えるほど私は思考を放棄していない。とりあえず理由くらいは聞かせてほしい。
「うちの兄にどんなご用件でしょうか」
「殺す」
パードゥン？
本日最後の授業は英語だったからかな、思わず使っちまったぜ。それにしても今殺害予告を聞いた気がするのだが。
「もう一回言ってくれます？」
「場合によっては殺す」
リアリー？
おいおいマジかよ。この子本気ですか。無表情すぎてまったく何考えてんのか分かんないんだけど。殺すって、嘘だよね？
「あの、うちの兄が何かしましたでしょうか」

「俺の兄貴をひきこもりにした」
……ソーリー。

というのが今からおよそ二十分前のことである。
あれから私は仕方なく神谷に連絡して（だって兄のは知らなかった）、「兄ちゃんに恨みを持つ男子生徒に人質に取られました」と言った。
すぐ近くに電車の走る橋があるって言っておいたからたぶん分かるだろう。
かくして兄は十分足らずでやってきた。予想外に早かったのはバイクに乗ってきたからである。運転していたのは神谷だった。
「雨宮君、約束覚えてる？」
「話してから殺すかどうか決める」
「違う。話をして本当のことを聞き出す、でしょ。場合によっては謝ってもらう。殺すはいらないから」
こそこそ喋っていると、土手の上に止まったバイクから兄がものすごい勢いで走り降りてきた。昨日ディスカバリーチャンネルで観た牡牛のようだった。
「リホ！！」
初っ端からトサカに来てるんですけどこの人。
私は意外な展開に少々驚いていた。
「ほんとに来たぁ」
「なに驚いてる」
「だって来るとは思ってなかったもん」
家で顔を合わせてもほとんど喋らないし、むしろ相方の神谷のほうが兄よりも会話が多い気がする、というか事実だ。
小学生まではよく喋っていたと思うけど、中学生になってからは兄はグレるは私はオタクになるはですれ違いが続いて今の疎遠な兄

妹になった。
だから私が助けを呼んだところで来るのかどうかは半信半疑。むしろ来ないでいてくれたほうが厄介なことにならずに済むと思っていたのに。
「なんで来るかなぁ」
「リホっ、こっち来い！」
「まだ行くな」
どっちだよ。目を吊り上げて睨みつけてくる兄の傍には正直言って行きたくないなと思っていたら、雨宮君に腕を掴まれて行くに行けなくなってしまった。
「てめえっ」
「吉村翔太だな」
「俺に用があんなら来てやったんだ、リホはもういいだろ！」
「話を聞いたら離してやる」
なんか漫画のワンシーンみたい。
という暢気な感想は二秒で潰えてしまった。
二人の距離はおよそ三メートル。今にも殴りあうんじゃないかっていうピリピリした空気に触れて、私は知らず唾を飲み込んだ。
「雨宮廉って知ってるだろ」
「はぁ？　誰だそいつ」
その瞬間、私の腕を掴む雨宮君の手にものすごい力が入った。
「二年のとき同じクラスにいたやつだろ」
「神谷さん」
ヘルメット片手に神谷がゆっくりこっちにやってくる。
それにしてもクラスメイトの名前をすぐに忘れるのは私と一緒なんだな、兄ちゃん。
「お前、あいつの弟か何かか？　去年から登校拒否になってるって聞いたことあるけど、これとなんか関係あんの？」
おぉ、神谷がコナン君ばりの推理力を働かせているっ。見た目チャラいが中々鋭いやつだな。

私にはちょっと信じられないけど、雨宮君が言うには兄が彼のお兄さんを登校拒否にした原因らしい。
「俺の兄貴に何したんだ」
「知るかよ」
「だったらなんで兄貴はお前に怯えて部屋から出てこねえんだよっ」
そのとき初めて雨宮君が怒声を上げた。兄たちが来る前にひととおり話してくれたときは冷静だった彼が、今や無表情をかなぐり捨てている。掴まれた腕には彼の震えが伝わってきて、私はやりきれない気持ちになった。
「だから知らねえっつってんだろ。お前の兄貴に聞けよ」
「何も話さないんだ。だったらあんたに聞くしかないだろ」
雨宮君の声はどこか縋るようだった。
でも兄は本当に知らないんだと思う。それくらいは顔を見れば私にだって分かる。
だったら解決策はない。そうすると雨宮君のお兄さんを思う気持ちはどこに向かえばいいんだろう。

「万引き」

突然、神谷が言った。
「お前の兄貴、コンビニで万引きしてた」
「は、」
お前はいきなり何を言い出すんだ。
雨宮君が驚いた顔で神谷を見た。私も、兄でさえも。
「ショータはどうせ覚えてないだろうけど、去年の秋ぐらいにお前の兄貴が万引きしてたのを俺ら見たんだよ。そのすぐ後ぐらいじゃね？　お前の兄貴が学校に来なくなったのって」
そうなの？　と雨宮君に聞ける雰囲気ではなかった。彼は無表情とかじゃなくて、すべての感情が凍ったような顔をしていた。
「俺もいたけど、気づかなくてショータの名前だけ出したんだろ。

学校来なくなったのだって、俺らに言い触らされたり金脅し取られたりするんじゃないかって勝手にビビったからじゃねーの」
雨宮君は言い返そうとして言葉に詰まり、唇を戦慄かせた。すぐ近くにいた私には「まさか、でも」と雨宮君の震える声が聞こえた。
彼は視線を神谷から兄にやった。まるで否定してくれと言っているみたいに。
「俺は雨宮なんて覚えてねえ。それと、誰かを脅したこともねえからな」
兄は面倒くさそうに吐き捨てた。
勘違いかよ、くっだらねえ、と。
「だめ！！」
言ったときにはもう遅かった。雨宮君の拳が兄を襲っていた。
「ショータっ」
「って、この野郎！」
最悪の事態になってしまった。
喧嘩にだけはならないように気を張っていたのに、こんなはずじゃなかったのに。なのに二人はぐちゃぐちゃに殴り合っている。
「リホちゃん、離れてな」
「だ、だって、止めないの！？」
「ほっときゃいいんだよ。俺らは帰ろうぜ」
爆弾落とすだけ落として帰宅かコノヤロー！
「こらぁ二人ともやめろー！！」
「危ないって、……っあ」
一瞬何が起こったのか理解できなかった。
顔の中心に衝撃が走って、最初は何も感じなかったんだけど後からとんでもない痛みがやってくる。
弾かれた雨宮君の拳が不用意に近づいた私の顔面に偶然ぶつかったのだと遅れて理解した。
「ったぁ……！」
「リホ！」

あまりの痛みに私は両手で顔を押さえてしゃがみこんだ。痛い、超痛い。

「リホちゃん見せて」

「はながとれた、」

「取れるわけないだろ」

ですよね。ってイテー！！　冗談抜きでイテーよ！！

こんな痛いことを兄たちはしょっちゅうやってるのか。バカか、マゾか、痛すぎだチクショー。

涙止まんない。怖いとか悲しいとかじゃなくて痛みで涙がどばどば溢れてくる。

「ショータ！　そいつはいいからハンカチとか持ってないのかよ」

「ねえよ！」

「わた、わたしのかびゃんに、」

噛んだ。でも恥ずかしいどころじゃなかった。舌が回らない。

「眼鏡割れてる。破片で怪我したらいけないから外すよ」

「う、うそ、」

「ほんと。あいつに弁償してもらえよ」

「あう」

ハンカチで顔面を押さえられる。手を見ると血で真っ赤に染まっていた。……おぉう、勘弁してくれ。

「家帰って冷やさなきゃ。抱っこするから掴まってな」

今このときだけは神谷が神様みたいに思えた。兄はオタオタしてばっかでまるで役に立っていなかった。

そして不幸は続いた。

「お前ら何してんだー！！」

土手の向こうから自転車漕いでやってきたのは、この辺りの治安を守るお巡りさんだった。ちくしょう誰だ通報しやがったのは。

15、くまさんが泣いた

私、パトカーって初めて乗っちゃった。あとでキタちゃんに自慢しよっと。五味とか絶対羨ましがるだろうな。あいつ選挙カー見ても騒いでるし。

警察署に連行されて婦警さんに手当てされた私は、もはや現実逃避に打って出るしかなかった。

だってマジありえねぇえええ。

前科一犯？　前科一犯なのこれ。これから履歴書書くときは賞罰欄に書かなきゃいけないの？　あそこいつも書くことなくてなんか申し訳なかったんだけどこれからは埋められるよね、……ってなるか！

「あの、すいません、」

「なぁに？　ちゃんと冷やしとかないと駄目よ」

「はい、分かってます。……あのですね、学校にはもう連絡しちゃったりなんかしちゃったり？」

「それはまだだと思うけど」

よっしゃー！　家に連絡されてもいいけど学校はなんか記録残りそうだし噂になりそうだしでやだなと思ってたんだよね。それに部活停止にでもされたら目も当てられん。…大した活動なんてしてないけど。

「お願いします、学校にだけは黙っててほしいんですけど」

「それを決めるのは私じゃないから。少年課に」

「連れてってください！」

食い気味に言う私に若い婦警さんは若干引いていた。

少年課では兄たちはさぞや絞られてるだろう思いきや、

「またお前か、懲りんやつだな」
頭をコツンとやられている兄がいた。
なんですかこのアットホームな感じは。胸倉つかまれて引きずりまわされてるくらいの想像はしてたのに。
「リホ！」
刑事さんに向かってうざそうな顔をしていた兄が駆け寄ってきた。氷嚢を外して私の顔を覗き込むと、苦い顔をしてすぐにまた氷嚢を押し当ててきた。鏡見てないけどそんなにひどい有様なのだろうか。
「リホちゃん、大丈夫？」
「まだちょっとズキズキするけど大丈夫です」
指で触ってみるとちょっと腫れている。これからもっと腫れてくるわよ、と婦警さんは恐ろしいことを言っていたけど大丈夫だろ。
「雨宮君は？」
「あっち」
見ると、ひとりの刑事さんと話をしていた。でも喋っているのは刑事さんばかりで、雨宮君はむっつりと黙り込んでいた。
「あいつのほうから因縁つけてきたとしか言ってないよ」
神谷が耳元で囁いた。それにちょっと驚いていると、兄ちゃんと顔見知りの刑事さんが話しかけてきた。
「君が吉村の妹さんかい？」
「あ、はい。吉村里穂子と申します。兄がいつもお世話になっております」
「礼儀正しい妹さんだな」
よく言われます（初対面の人には）。
「顔、よく冷やしといたほうがいいぞ。後で熱が出てくることもあるからな」
「はい。ありがとうございます」
「しっかりしてるな。おい、本当にお前の妹か？」
「うるせえ黙れ」
「兄ちゃん！」

失礼な口きくんじゃねえよ。これから学校には連絡しないでくださいって頼むんだからよ。

「あの、刑事さん」

いつもより二割増しで儚い声と仕草で演出しつつ、私は申し出た。

「学校には連絡しないでいただけませんか？　お願いします」

「と言われてもなあ」

「あっちの子が何も喋らないんだよ。そうなると先生か親御さんに来てもらうのが普通なんだけど」

別の刑事さんが困ったように言った。

雨宮君が喋りたくない気持ちはよく分かる。でもこのままじゃ私たちにとって非常にまずい事態になるのは間違いない。

穏便に済ませるにはどうしたらいい。私は漫画を描くことばかりに使っている頭をこのときフル回転させた。

ぽくぽくぽく、チーン！

「兄ちゃんのバカ！　なんで彼との交際を認めてくれないの！？」

周りが突然のことにポカーンとしてるけど言っちまったもんは止められねえ。リホコ、千の仮面を被るのよ！

「刑事さん、実は私、そこにいる彼と付き合ってるんです。でも兄ちゃんがどうしても駄目だって、だから私たち、どうにかして二人のことを認めてもらおうって兄ちゃんを呼び出したんです。そしたらどっちも私を想うあまりに口論になって、挙句の果てには殴りあいにっ、私は必死に止めました、そしたら偶然彼の拳が私の顔に当たってしまったんです、お願いします彼を許してあげてください、私を殴ってしまったことで彼は傷ついているはずです、もうこれ以上彼を責めないでやってください！」

私は刑事さんの胸元に顔を埋めて泣き崩れた…フリをした。

駄目だ笑いが止まんねえ。自分で言って笑ってるとか一番駄目じゃん。でも震えた体がよりいっそうの真実味を加えたらしい。

刑事さんは「そうだったのか…」って騙されてるし。やったぜ月影先生。貴方のご指導の賜物です。

「学校に連絡されたら私たちが付き合ってることも知られちゃいます、そんなの恥ずかしいっ、だから刑事さん、」

「あぁ、分かった。学校には連絡しないよ。でも親御さんには」

「それも駄目ぇえええ！」

ただでさえ雨宮君のお兄さんはひきこもりなのに弟が警察のお世話になったなんて親御さんが知ったら育児について悩んじゃうじゃないか。

「彼のお母さんは心臓の弱い方なんです、うちはかまいません、でも彼のほうには」

「分かった分かった！　どちらにも連絡しない。君に免じてな」

刑事さんは私の頭を撫でながらどこにも連絡せずに帰してくれることを約束してくれた。

これ完全勝利じゃね。

ちょ、私すごすぎじゃねえの。アカデミー主演女優賞もんだよこれは。

「吉村、いい妹さんを持ったな。大事にしてやれよ」

いやいやこちらこそありがとうございます刑事さん。貴方がだまされやすくてよかった。一生忘れません。眼鏡ないから顔がよく見えないけど。

私は兄たちが余計なことを言い出さないうちに、さっさと警察署を後にした。

帰る間中、神谷がずっと爆笑していた。

後日、雨宮君が自宅に謝りに来た。

「兄貴が万引きしたのは本当でした。あれが初めてじゃなかった、何度かあったんです。神谷さんの言ったとおりでした……本当に、

本当にごめんなさい」
彼は潔く土下座した。その姿になぜか私が泣きそうになっていると、兄はふんと鼻を鳴らした。
「で、学校来るって？」
「それは…」
「俺たちゃ別に脅すつもりなんかねえぞ」
「分かってます。全部、兄貴の問題なんです。……学校の成績のことでストレスが溜まってたらしくて、それで万引きしていたそうです。学校に行かなくなった理由は前からあったんです。吉村さんに見られたのはただのきっかけにすぎません」
俺と同じで、弱いんです。
雨宮君は大きな体をしゅんとさせた。
兄ちゃん、どうするの。お願いだから何か言ってよ。
「たしかにお前らはどうしようもねえな」
ちょっとちょっとー！？
ここで追い討ちをかけるか。神谷もそうだけど兄ちゃんも中々のワルだよ。ほら見ろ、雨宮君が落ち込んでるだろ。
「特にお前だ。俺をぶん殴る度胸はあんのになんで兄貴を部屋から引きずり出す度胸はねえんだよ。怖がってんじゃねえよ」
「兄ちゃん、身内だからできないことってあるよ」
「身内にしかできないこともあるんだよ」
兄ちゃんのくせに私の言葉を逆手に取りやがった。
絶句する私を置いて兄ちゃんはさらに言った。
「俺に謝ったって仕方ねえだろ。兄貴殴ってこいよ」
「ちょっと兄ちゃん！？」
「びくびくして動けねえときゃそれが一番だ。おら、今から行ってこい」
「雨宮君、真に受けちゃ駄目だからね」
彼の顔を覗き込んだ私は息を呑んだ。
雨宮君は、泣いていた。

「うっぜえ。もう帰れ」
声も上げずに泣く雨宮君を家の外まで送った。どう言葉をかけようかと思っていると、彼は切れ切れに言った。
「俺にしか、できないこと、やってくる」
「雨宮君、」
「ありがとう」
涙に濡れる彼の顔を見つめながら、私は何一つ気の利いたことを言えなくて。
ただ、小さく頷くことしかできなかった。

16、本日ラッキーデー

「お願いしますあと一日だけ延ばしてくださいぃ…！」
自分の呻き声で目が覚めた。
眼鏡を外してしょぼしょぼする目を擦りながら、私は違和感に気がついた。
なんで眼鏡かけてんだろ。
自分の部屋で寝ていたと思っていた私は、そのときようやく自分の置かれた状況を知った。
「吉村君、起きたついでに黒板の問題解いてくれます？」
数学の鰐淵先生のめちゃくちゃ冷たい視線を受けてもなお私は動くことができなかった。往生際の悪い私は、これがまだ夢じゃないかと一縷の望みに賭けていたのだ。
「まだ寝てるんですか」
「すっ、すいません！　起きてましゅ！」
その瞬間、静かだったクラスが笑いの渦に叩き込まれた。
やっちまったな、私。
顔が熱くなるのを自覚しながら私は慌てて前に出た。

数学の鰐淵先生は、眼鏡にオールバックでスーツがこれまた嫌味なほどに似合っていて、丁寧な話し方と分かりやすい授業で就任当初から女子のハートをがっちり掴んでいる二十七歳の若手教師である。
私もファンのひとりで、彼を初めて見た瞬間に鬼畜眼鏡×男子生徒のいけない妄想を繰り広げたくらいだ。ちょっとナルシストが入っていて、嫌味や皮肉をよく言うところも非常に美味しいと思っていた。

だから大好きだったのに私は今とても裏切られた気分ですよ、先生。

「これを各クラスに運んでおいてください」

目の前にでんと積まれているのは数学の問題集が入ったダンボール。全部で六つ。

「……居眠りしてただけで罰ってありですか」

数学の授業で寝た挙句に寝言をほざいて台詞を噛んでクラス中に笑われた私は、鰐淵先生のいる数学準備室にて己の不幸を実感していた。恥をかいた上に罰なんてどんだけツイてないんだ。

「私、今まで真面目に授業受けてましたよね？」

「テストの点も良かったですね」

「なのにたった一度のミスでこれですか」

居眠りしたり宿題を忘れた子が罰をもらった話なんて聞いたことがない。鰐淵先生の言っちゃ悪いが神経質そうな顔（だんだん評価が下がってる）を見ながら、私はどうにか許してもらえないかと縋った。

「たしかに君は真面目な生徒だ。だからこそ僕はショックだった。飼い犬に手を噛まれるってこのことだと思いましたね」

「犬……」

「いや、君はリスって感じですけどね」

どっちでもいい。

私はこれからさっさと家に帰って原稿仕上げないといけないんだよ。よゆう入稿って言葉知ってっか先生。この世にはな、問題集運ぶよりも大切なことがあるんだよ！

「何か言いたげですね」

言いたいともさ！

でもここで漫画描きたいから帰してくださいと言ってこの先生が聞いてくれるだろうか。否。鬼畜眼鏡に勝てるキャラなんて天然ワンコくらいしか思いつかねえよ。あぁ駄目だ、思考が二次元に逃避している。

「やります。……やればいいんでしょ」
「最後のは余計ですよ。じゃあお願いしますね」
くっそー、でも眼鏡クイっは格好いいです先生。今度キタちゃんと眼鏡の可能性について夜通し語り合おう。
妄想はさておき、私はあらかじめ置いてあった台車に問題集を積み込むことにした。面倒くさいがさっさと終わらせて家に帰るに限る。
「あぁ、吉村君」
「やっぱりやらなくていいんですか。鰐淵先生ありがとうございます」
「誰もそんなこと言ってないでしょ。眼鏡変えたんですねって言おうとしたんです」
期待させんなよ眼鏡。私も眼鏡だけど。
「そういう鰐淵先生もしょっちゅう眼鏡が変わってませんか」
「たくさん持ってるんです」
「なるほど。オシャレさんですね」
身なりに妥協がないもんな。その髪型も朝どれくらいの時間をかけてセットしてるんだろう。スーツも上下で二万円とかの安物じゃないのは素人でも分かる。
聞いてみたかったけど「君には関係ないでしょ」と冷たい視線と共に言われそうなのでやめておいた。
「そちらの眼鏡のほうが似合ってますよ。前のは言っては悪いですが、センスの欠片も見られなかったので」
二年間お世話になった私の眼鏡に対してなんて言い草だ。まあたしかにレンズは分厚いしフレームもぶっとかったけど。
今の眼鏡はノンフレームのすっきりとしたデザインになっている。キタちゃん曰く、「あんたの持つ不気味さが若干弱くなった」らしい。あれは今思うと貶してたな。
「褒めていただいてありがとうございます。先生も眼鏡が似合ってますよ」

「当たり前です」
いただきました、『当たり前』。
この人はこの性格と言動で他の教師とうまくやっていけてるんだろうか。女子生徒には大人気だけど男子生徒にはぶっちぎりで不人気だからな、男性教師の受けも悪いだろうな。鰐淵先生が攻めなだけに。
なんて言ってる場合じゃなかった。
「そろそろ行きますね。それじゃあ失礼します」
「いってらっしゃい」
私は数学準備室の扉を閉めるとすぐさま壁に向かって拳を突きたてた。
怒り？　いいえ違います萌えたんです。
おぉおお今の聞いたか？　いってらっしゃい、だってよ!!
最近カツアゲにあったりガチンコファイトに巻き込まれたりと、私の日常はまったくもってオタクらしくなかったが萌はこんなところに転がってましたよハレルヤ!!
しかも鰐淵先生ちょっとだけど微笑んでたしっ、あの鬼畜眼鏡がっ、デレたのかあれデレたのか!?
「吉村？」
「は！」
ドコドコ壁を殴りまくっていた私は恐る恐る背後を振り返った。
「モ、モリ君」
そこには最近友達になったばかりの雨宮君が立っていた。
ハッズー！　萌えてるところを見られるほど恥ずかしいことはない。私は取り繕ったように笑い、「なんでもないよ」と言った。まったくもってなんでもないことはなかったんだけど。
「顔赤いぞ」
「もうすぐ夏だからね！　衣替えしたとこだしね！」
私は逃げるようにして台車を押した。その隣をモリ君がついてきた。

「それ、どこまで運ぶんだ？」
「二年生のクラス全部にだって」
「手伝う」
「えっ、大丈夫だよ」
「遠慮するな」
「でも、部活行かなくていいの？」
「ちょっとくらい遅れても構わない」
私は空手部だと思っていたが、実はモリ君、バスケ部だった。あの事件の前に一度部活を辞めていたんだけど、先輩や同級生たちに頼み込まれて再び入部したという経緯があった。
そのモリ君が私の顔をじっと見つめていたので、あぁ、と気がついた私は眼鏡を外した。
「もうほとんど痕残ってないよ」
「ごめん」
そういうモリ君の顔の痣も大分消えていた。
「もういいって。こんな素敵な眼鏡もいただいたことですし」
拳が当たったのはワザとじゃなかったんだし一応は断ったのだが、モリ君が眼鏡を弁償してくれた。眼鏡屋さんで選んでくれたのも彼である。
「この眼鏡、さっき鰐淵先生に褒められたんだよ。あの自分が一番大好きそうな鰐淵先生に」
その台詞にモリ君は少しだけ笑ってくれた。すぐに無表情になったけど、それを間近で見た私は。
「どうした？」
「なっ、なんでもない」
普段表情がないからこそ、その笑顔には価値がある。
私は思わず顔を背け、拳を握ったのだった。

17、女子トーク

七月になった。じめじめした季節も終わって本格的な夏が始まる。今年は例年よりも暑くなるらしい。

夏休みまでもうすぐだ。クラスの中にはすでに夏休みの予定を決めている子も少なくはない。海とか旅行などの会話が休み時間によく聞こえてくる。

私はといえばようやく漫画の原稿を仕上げ、あとは印刷所に入稿するだけとなった。締め切りに間に合わなかった去年に比べて格段の進歩である。

「あれ、吉村さん、どーしたの？」

放課後になって部室に行った私は、忘れ物を思い出してまた教室に戻っていた。ほとんどの生徒が帰っていたけれど、女子の何人かが残っていた。

「体操服忘れちゃった。持って帰って洗わないと臭いもんね」

「だよねえ。私一回忘れて汗臭いの着たことあるけど悲惨だったよ」

「私もあるー！」

普段あんまり喋らない女子のグループだったけど話してみると割と気さくだ。見ると机の上にはお菓子やジュースが散らばっていた。ずっとお喋りしていたらしい。

「吉村さん急いでる？　よかったらお話しようよ」

「私でよければいいよ」

「じゃあ座って座って！　私、前から吉村さんとこうして話してみたかったんだよね」

席を勧められた私は照れながらも着席した。いわゆるオシャレでイマドキといった感じの女子たちを目の前に、私なんかでちゃんと話ができるんだろうかと少し不安に思った。

「この間の数学の授業、面白かったよー」

「うわ、それは言わないでよ。今思い出しても恥ずかしいんだから」

「後で鰐淵センセに呼び出されてたよね。怒られたりした？」
「怒られたっていうか問題集運べって言われた。あの人鬼畜だよね」
「キチク！　ね、それ本人に言ったの？」
「言えるわけないよ！」
だよねーと皆でキャッキャッと笑った。おぉ、私ちゃんと話せてるじゃん。妹も彼女らと似た感じだけど、こっちのほうが遥かに話しやすいぞ。
「鰐淵先生ってさぁ、カッコイイんだけど性格が冷たすぎるんだよねぇ」
「えぇ、私そういうところが好きなんだけど！」
「あんたよくセンセーに罵られたぁいとか言ってるもんね」
「ちょっと変態入ってるよね」
「どこがよ！　吉村さんなら私の言ってること分かってくれるよね！」
ぽんぽん交わされる会話から突然こっちに振られてビックリして思わず「うん」と答えると、鰐淵先生に罵られたいらしい彼女は我が意を得たと言わんばかりに私の肩を組んできたのでこれまたビックリした。
「さあ吉村さん、こいつらに言ってやんなさい！」
「なにをよ」
「吉村さん、ほうっておいていいからね」
「あはは、でも鰐淵先生はあの性格だからこそいいって私も思うよ。あれで優しかったらなんか普通すぎてつまんないって」
「でしょ！？　生徒の機嫌ばっか伺ってる教師に比べたら鰐淵先生は立派じゃない！　『君、こんな問題も分からないんですか』って心底バカにした目で言うのよ、たまんないじゃない！」
「うわこいつMだよ」
「あんた実はわざと問題分かんないフリしてるんじゃないの」
「悪い！？」
M疑惑の真柴さんはそれから十分間くらい鰐淵先生の魅力につい

てぶちまけてくれた。もういいよ分かったよと他の二人が白旗を上げるまで延々と。そしていつの間にか私も鰐淵先生好きの同志とみなされていた。

……いや、まあファンだけどさ、罵られたいとまでは思ってないよ。と言ったけど彼女はまったく聞いていなかった。

「私はやっぱり同い年がいいな。岩迫君とかすごい好き」

「ねー！　テニス上手いし格好良いし私も好きー」

「吉村さん、よく喋ってるよね。もしかして付き合ってる？」

「ないない」

「そうよ。リホリホは私と同じで鰐淵先生が好きなんだから」

それもないない。

「数学の問題教えたらそこから仲良くなったんだよ。あと漫画とか貸してる」

「あー最近なんかやり取りしてるなあと思ってたら漫画かあ」

「漫研なんで、私」

「漫画描いたりしてるの？」

「うん、まあ」

「じゃあ今のうちにサインもらっとこーぜ！」

「どんな漫画描いてるの？」

「今度見せて」

ノリのいい人たちだ。漫研と言ったときは引かれるかなと思ってたんだけど。

その後漫画の話になって、何冊か貸す約束をした。

妹にオタクキモイと言われていたから構えてたんだけど、なんだ意外と平気なものなんだと私は拍子抜けした。たぶん彼女たちの人柄もあるんだろうけど。

「あ！　テニス部が走ってる！」

「あ、ほんとだ」

「岩迫くーん！！」

窓の向こうから聞こえた「内周１０周！」の掛け声にひとりが飛

びつき、残りも同じように窓に張り付いた。私が一番遅れて外を見ると、男くさい集団が走っているのが見えた。

「香坂センパイ素敵ー！」

「田辺、あんたさっき岩迫君が好きって言ってなかった？」

「それはそれー！」

「頑張ってくださーい！」

「あ、こっち見たよキャー」

「リホせんぱーーーーーい！！」

「……誰あれ？」

「知ってる。一年の五味君だっけ」

「リホリホ、なんか言ってあげなよ」

あのばかやろう。

私は窓枠に突っ伏していた顔を上げた。

「転べ！！」

「テニス部めっちゃ笑ってるよ」

「なんで『転べ』なのよリホリホ」

「岩迫君が笑いすぎて咽てるよ」

リホ先輩ひどいと五味は喚いていたようだけど、テニス部の集団はあっという間に校舎の向こうへ消えていった。

「五味はあれでも漫研なので、つい」

「だからかぁ。びっくりした」

「おっ、今度はバスケ部が来たよ」

「どれどれ！？」

「塔元、あんたバスケ部に好きな人でもいんの？」

「私、背の高い人が好きなの」

こっちに向かって走ってくるバスケ部を食い入るように見つめる

塔元さん。平均身長の私よりちょっと背が低い。
「身長差があるっていいよね」
「そうなのよ、私、大きい人にギュっとされたいのよ」
「彼の心臓の音が聞けたりね」
「ぐはーっそう！！　ちょっとなんで私の考えてること分かるの！？」
ばしばし肩を叩かれながら漫画からの知識ですとは言えなかった私。
それにしてもなんか凄いな。私オタクなのに皆と普通に会話ができてる。なんか嬉しいな。
ていうか私も彼女たちもただの女の子なんだ。
私とは合わないって勝手に判断していた自分に自己嫌悪した。こうやって仲良く喋っている彼女たちに対してそれはすごく失礼なことだった。反省。
「手振ってるよ。誰？」
「あ、モリ君だ」
「え！　リホリホの彼氏！？」
「違うよ、友達。がんばれー」
「そんなちっちゃな声じゃ届かないよ！」
「なんで塔元が興奮してんの」
「ちょっとリホリホ！　あんた鰐淵先生が好きなんじゃないの！？」
「真柴落ち着きなって」
「あ、田辺さん、テニス部が一周回って戻ってきたよ」
「香坂センパーーーーイ！！」
「田辺うるさいっ」
ひとしきりはしゃいだ後、私たちは一緒に帰ることになった。寄り道してアイスを食べようと真柴さんが提案し、他の皆も賛成した。
私の中にもう気後れはなかった。
「ところで私はリホリホで決定なの？」
「今さら！」

「遅いよリホリホ！」
「いつツっこんでくれるか待ってたんだよ！」
というわけで私のあだ名にリホリホが加わった。

18、恋はノンブレーキ

教室で無料の求人情報雑誌を熱心に読んでいると、隣の席の男子が覗き込んできた。
「吉村、なんかバイトすんの？」
「うん」
八月のイベントで大枚使うことを見越してバイトを始めようと思ったのは昨夜のことだった。
去年は有名なファミレスで働いていた私だけど、不況の煽りを受けて今年の三月で店舗は閉鎖。進級してからは新入生の勧誘とかキタちゃんとのコラボ漫画とか新刊とか、やることはあったりなかったりでつまりはダラダラしていた私は、テレビでマツケンを観て世の中金ヅラと思い出し急遽バイトに勤しむことにしたのだ。
「お、見ろよこれ、時給８００円から１，３５０円だってよ。頑張り次第で時給アップかあ。俺応募しようかな」
「騙されちゃ駄目だよ甲斐君。たぶん一年頑張っても５０円も上げてくれないと思うよ。こういう書き方してるところは要注意だね」
「えー」
「初心者はよく騙されるの。ここことかいいんじゃない？」
「工事現場の交通整理？　うげー焼けそう」
「なまっちろい甲斐君にはお似合いですよ」
「ひっでえ。お前だって白いじゃん」
シャーペンの先で突つかれたので私もやり返していると、次の授業の先生が入ってきたので私たちの戦いはお開きになった。
「リホ、バイトやらない？」
昼休み、メールで呼び出された私は部室にいた。メグっぺはいなかった。珍しいなと思っていると、キタちゃんがバイトの話を持ってきた。
「うちのじいちゃんの知り合いがやってる洋食屋なんだけどね」

「じいさまのってことは元警察官？」
「そ、元部下。早めに退職して店開いたって聞いたよ。最初は私に話が来たんだけど、今は本屋のバイトやってるから断ったんだ。どう？」
「たしかに今、バイト探してるけど、」
「条件はここに書いてあるとおりね。もしやるんだったら私にメールしてよ」
条件の書かれたメモを読むと、時給といい待遇といい中々良さげだった。私の目は『まかない付き』に釘付けだったのは言うまでもない。
お弁当を食べ終わった頃には、私はもうやる気でいた。

バイト先の洋食屋は五十代の店長夫婦が切り盛りしていた。じいさまの元部下と聞いていたからもっと年長で厳つい人を想像していたんだけど、店長の庄司さんは温和でとても優しい人だった。
店内はそれほど広くなく、カウンターとテーブルを合わせて三十席くらい。外国を思わせる外観に純喫茶風の内装が素敵である。
制服は半袖の白シャツに黒のシンプルなエプロンドレスで、ぶりぶりのメイド服じゃなかったことに私は安心した。あれは見る分にはいいけど着るとなると話は別だ。
若者向きのお店ではないけれど知る人ぞ知る名店らしく、雑誌にも何度か紹介されているらしい。
働いて一週間、私はすっかりこの店が好きになっていた。
「いらっしゃいませー……ってなんだ、五味か」
私の接客用の笑顔は普段使いの顔にレベルダウンした。
「なんだ俺かはないでしょ。せっかくいっぱいお客連れてきたのに」
「なんだと早くそれを言え！　あ、岩迫君だ、いらっしゃいませー！」

「さっきと全然顔が違うっ」
部活帰りのテニス部員を連れてきてくれたらしい。大きなテニスバッグを背負った男子生徒が五人。よくやった五味、なんて先輩思いなんだ。
「席くっつけるからちょっと待ってね。店長、五名様来店でーす」
「リホ先輩、俺たちでやるから大丈夫っすよ」
「いいっていいって。お客様なんだから」
四人席に二人席を合体させて私は急いで水を取りに行った。カウンターの奥には店長夫婦がいて、「どれが彼氏？」とベタなことを聞いてくる。
「後輩とクラスメイトとその部活仲間ですよ」
「じゃあどれが気になる子？」
「いってきまーす」
わくわくしている店長夫婦には悪いが、そんな甘酸っぱいものを高校生活に求めていない私はさっさとグラスを持ってオーダーを取りに向かった。
「リホ先輩、どれがオススメっすか」
「セットなんてどう？　けっこうボリュームあるよ」
五味にそう言いながら、私はひとつのメニュー表を二人で覗き込む男子高校生っていいよなあと腐れたことを考えていた。
大きな体をくっつけ顔を寄せ合ってるところなんか最高じゃないか。年配の人がお客に多いから今のうちに網膜に焼き付けておこう。
「吉村、俺のこと覚えてる？」
やましいことを考えていたこともあって私は大げさにビクついてしまった。声をかけてきた子に視線を移すと、私は思わず「あ！」と声を出していた。
「一年のときに同じクラスだったよね」
「そ。名前分かる？」
私が学生服についた名札を見るよりも早く、彼は手でそれを隠してしまった。

「……佐藤君」
「ブッブー全然違うし。美作だよ」
全国で一番多い苗字で当てにいったけど駄目だったか。ミマサカ君よ、すまなかったな。
「珍しい苗字なのに忘れるってところがリホ先輩らしいっすよね」
「俺、隣の席になったこともあるんだぜ。そのときけっこう喋ったのに」
「サコ先輩も来年には忘れられててもおかしくないっすよ」
「え、マジ」
「おい五味、先輩追い詰めて楽しいか」
私の印象が悪くなるだろ。元から大して良くもないが。
「お前らそろそろ注文決めろ。吉村さん、俺はAセットで」
黒髪の真面目そうな人が注文したのを皮切りに五味たちも慌ててそれに追随した。
なんか偉そうな人だな。悪い意味じゃなくて、本当に偉そうだぞこの人。岩迫君たちが敬語を使っているから先輩だろう。どこかで見たことがある気がするけど思い出せなかった。
夜のピークを過ぎてからの来店だったので、テニス部員以外のお客さんはまばらだった。暇になった私は店内を見渡せるカウンター付近に立っていた。
「格好良い子たちねえ」
「みゆきさん」
カウンター越しに店長夫人が話しかけてきた。
「私、一番奥の子がタイプだわ」
「五味ですか。空気読めないけど良いやつですよ」
「リホちゃんは学校に好きな男の子とかいないのかしら？」
「いませんねえ。あんまり興味ないというか、まだいいかなあって思ってます」
「あら勿体無い。恋は中学生か高校生のときにするのがいいのよ。一番浮ついて勘違いしやすい時期なんだからしなきゃ損よ」

それってどうなんだ。恋って勘違いでしてもいいのか。
みゆきさんを見ると、人生経験抱負な彼女らしい包み込むような笑みを向けられた。
「年をとると余計に理性が働いたり計算高くなっちゃうのよね。だから誰かを好きになるのはブレーキが壊れてる若いうちにするのがいいのよ、リホちゃん」
マジでか、私のブレーキ壊れてんの。
だったら恋愛って怖いな。どこかにぶつかるまでつっぱしっちゃうっていうことだもん。みゆきさんの言い方だとそれがいいみたいだけど、怪我するのは嫌だな。
「リホちゃん、お会計」
「あ、はい！」

「リホ先輩、すっげえ美味かったっす」
「ありがと。他の部員にも勧めといてよ」
店長の好意でもらった割引券を配りながら、私は営業にいそしんでいた。値段は手ごろなのに若いお客さんが少なかったので、これを期に増えるといいんだけど。
「吉村さん、ちょっといいか」
私を呼んだのは黒髪のどこかで見たことのある先輩だった。どこだろう、つい最近見た顔だ。
「あ、香坂先輩だ」
「なんで前のクラスメイトは忘れてんのに部長の名前は知ってんだよ」
美作君しつこいな。忘れたもんは仕方ないだろ。前向いて生きろよ。
「うちのクラスの田辺さんが香坂先輩の大ファンなんだよ」
部長だとは知らなかったけど、なるほどだから放つオーラが五味

とは比べものにならなかったんだな。高校生らしからぬ貫禄がある。
ちなみにもう一人の先輩は副部長らしい。眼鏡をかけた気の弱そうな人だ。
「うちの五味と岩迫がテストで世話になったと聞いて今日は来たんだ。こいつらが大会に出られないことになってたらまともな成績が残せないところだった。テニス部部長としてすごく感謝してる。吉村さん、ありがとう。ほら、お前らも言え」
「リホ先輩、ありがとうございました！」
「吉村、ありがとう！」
「ど、どういたしまして！」
部長の気迫に押されて私も慌てて頭を下げた。
体育会系は軍隊に近いって本当だな。体が声に反応して勝手に動いてしまった。漫研という究極にユルい部活に慣れきった私には信じられない世界だ。
帰っていく彼らを見送って、私は今日のバイトを終えた。
それにしても香坂先輩の言った「これからもこいつらをよろしく頼む」って台詞がすごく気にかかる。「これから（のテスト）もこいつら（の面倒）をよろしく頼む」って意味じゃないよね。違うよね。
またのお越しをお待ちしております。

19、ドイツ人形と夏の夜

夏休みはもうすぐ目の前である。

戦の準備はすべて終了した。あとは当日まで元気に過ごすだけだ。夏風邪ひいちゃったんだよ～とへらへら笑っている隣の席の甲斐君とは机を離しておいた。

気の早い先生はすでに夏休みの宿題を出している。数学の鰐淵先生は鬼のような量の宿題を提示し、私たち生徒を辟易とさせてくれた。あの人は自分が自分を好きでさえいればいいので他の人間からの好感度など気にしてはいないようだ。

ちなみにうちの学校は夏休み明けに定期テストが待ち構えているので油断ができない。その後に体育祭、文化祭、二年生なので修学旅行がある。正直、体育祭は憂鬱だった。雨で中止になればいいのに。

カレンダーに予定を書き込んでみると、今年の夏休みは去年よりも充実していた。キタちゃんはもちろん、漫研の後輩やクラスの友達と遊ぶ約束をしたからだ。予定だけ見てるとリア充っぽいな私。

夏休みが始まる前に、私には行くところがあった。

財布を持ち、目的地までの電車の乗換えをチェックする。時間に余裕を持って家を出ると、外はギラギラ太陽がアスファルトを焦がしていた。

開けた扉を再び閉めた私を責めないでほしい。

駅近くの雑貨屋で日傘を買おうと決め、私は玄関の扉を開けた。

「待ってたよーリホちゃん！」

某病院の個室を訪ねた私を熱烈歓迎してくれたのは、我が漫画研究部の部長である。

不幸にも交通事故に巻き込まれ全治三ヶ月の重症を負った彼女だが、退院が近いこともあって元気そうだった。
「外暑かったでしょ。来てくれてありがとね」
「いえいえ、ろくに顔も見せずにすいません」
「その手に持ってるお菓子をくれたら許してあげよう」
私は病院に行きがてら購入したドーナツを部長に進呈した。チェーン展開しているやつではない、百貨店に期間限定で出店していた有名店のドーナツである。
一階にあった売店で買ったお茶と一緒に、私もご相伴に預かった。部長はいかに病院食が不味いかを説きながら、あっという間にドーナツ三個を食べてしまった。
「そういえばもうすぐだね」
何がとは言われなかったが、私はもちろん心得ていた。部長は大仰に頷いてみせると、枕の下から小さなメモの切れ端を取り出した。
「なんでそんなとこに？」
「だって大事なものだもん」
英語と数字の羅列が並んだメモを受け取り、私は大事に仕舞いこんだ。最近は病室でもインターネットができるので、部長は傷を癒しながら目当てのサークルを調べたらしい。
「行けないことはないんだけどね、パパが駄目だって言うんだ。どうしても行きたいなら付き添いするって」
「うわあ」
「ってなるよね。どこの世界に親同伴でイベントに行くオタクがいるっていうのよ。ただでさえパパは目立つのに」
「部長単体でも目立ってますよ」
「そうかなあ」
部長は納得いかないと言わんばかりに金髪に指を絡めてくるくるさせた。
人形みたいに綺麗という表現がこうもぴったり当てはまる人を、私はこの人以外に知らない。

緑色の目はカラコンなどではなく、金髪は地毛。ドイツ出身の彼女の名はベアトリクス・幸子・ルーヴェンという。

小学生のときから日本に住んでいる彼女は言葉に不自由することなく高校生活を謳歌していた。不幸が襲ったのは今年の五月。同人誌を売りに行く途中に酒酔い運転の車に跳ねられたのである。

血を流して横たわる彼女の周りにばらまかれた大量の同人誌……後から話を聞いた私たち漫研のメンバーはあまりの恐ろしさに身悶えしたものだ。せめてただの漫画であれば、と部長の身に降りかかった不幸に同情せずにはいられない。

「北川ちゃんからメールで聞いたよ、二人で漫画描いてるんだってね」

「はい。文化祭で出そうと思ってます」

「いいなあ。私が入院してる間に楽しそうなこと始めちゃってさあ」

「さすがに病院でコスプレはできないですよね」

「やったら追い出されるわよ」

趣味に精を出すこともできずよっぽど欲求不満と見える。私は鞄から出しかけた雑誌を元に戻そうとしたのだが、目ざとい部長に見つかり結局彼女に渡すことにした。

「わーありがと！」

「とりあえず目に付いたものを買ってきました。でも読んだら余計に辛いかなって思ったんですけど」

「そんなことないよ、気が利くねえ！　さすがにパパに買ってきてとは言えなかったから、読みたくてたまんなかったんだよ」

買ってきてよかった。嬉しそうにコスプレ雑誌を捲る部長を見ながら、彼女のパパさんが犠牲にならなくて済んだことに私は満足した。

「後輩ちゃんたちとはどう？　私ってばろくに顔も合わしてないうちにこんなことになっちゃったからさ、一応気にはなってるんだよ」

「三人とも仲良しですよ。放課後よくお喋りしてます」

「智子はどう？　あいつほとんど来てないでしょ」

「トモ先輩は吹奏楽部が忙しそうですね。なんかパートリーダーとかいうのになったから、おいそれと来れないみたいです」
「あぁ、メールで言ってた。今年こそは万年銅賞から脱却するんだって吹奏楽部の部長が息巻いてるんだって」
放課後の部室にホルンを持ったトモ先輩がときどき訪ねてくる。といっても五分くらいなもので、お菓子とジュースをつまんで慌てて帰っていくのが常だ。夏に開催されるコンクールに向けて吹奏楽部は運動部ばりの練習をしているらしい。
「私が無理言って入部させたようなもんだけど、なんかごめんね」
「気にしないでください。私たちだってお喋り以外に大したことはしてませんし。それにトモ先輩も色々と気を使ってくれてますよ」
「そう？」
「去年のテスト問題くれました」
「テスト！　うわーもうちょっとやめてよ、嫌なこと思い出させないで！」
禁句だったのか、先輩はベッドに突っ伏してしまった。入院中に先生監督のもとテストが行われていたというのだが、結果は散々だったらしい。
その後、世間話を小一時間ほどして私は帰ることにした。

あれだけ存在を主張していた太陽も帰るころにはとっくに沈み、辺りは薄闇に包まれていた。
駅から家までの道を歩いていると、キタちゃんからのメールが来た。今日は本当なら二人で部長のお見舞いに行くことになっていたのだけど、キタちゃんの都合が合わずそれに対する謝罪のメールだった。
部長、元気だったよ。
ぽちぽちボタンを押していると、不意にすぐ目の前に誰かが立っ

たのが分かった。
「変態！！」
鞄を振り上げた私に変態は驚いて一歩後ずさった。丁度外灯の下だったので、変態の顔を見た私は驚いて声を上げた。
「なんだ、兄ちゃんか」
「声かけたんだぞ。なのになんで変態呼ばわりされなきゃいけねえんだよ」
「ごめんね、全然気づかなかった」
兄の眉間に皺を寄せた顔が外灯に照らされる。それには中々の迫力があったので私は愛想笑いで許してもらうことにした。
「どっか行くとこだったの？」
「別に。帰るぞ」
背中を押された私は不思議に思ったものの、まあいいかと歩き出した。
隣を歩く兄となんの会話もなく家路を辿るのは、とても居心地の悪いものだった。こういうときは男のほうからネタを振ってほしいものだ。
「兄ちゃん」
「なんだよ」
「お弁当、美味しい？」
「……まあまあだな」
そこは美味いって言えよ気の利かないやつだな。
むっとしながら睨みつけると、前を向けと無理やり頭を戻されてしまった。妹とはいえもっと女の子らしい扱いをしてほしいものである。
会話はそれきりだった。
無言で歩きながら、私は最後に二人一緒に帰ったときのことを思い出していた。私がまだランドセルを背負っていて、兄が大きめの学ランを着ていたころ。
懐かしく思った夏の夜だった。

20、真夏の戦い

私は幼稚園児のときから翌日に遠足などのイベントがあると眠られなくなる子供だった。

ただいま朝の六時。やっと寝られたのがたしか三時だったので何時間眠ったのかは言わずとも分かる。

しばらくボーっとしていると突然携帯が鳴った。

「もしもし…」

『おはよう。起きてた?』

「はんぶん…」

『洗面所に行きな。寝たらぶっ飛ばすよ』

「うぃ…」

キタちゃんにモーニングコールを頼んでおいてよかった。私はふらふらしながら一階の洗面所に向かった。

冷水で顔を洗ってようやく目が覚める。それからリビングに向かってお湯を沸かし、もう一度二階の部屋に戻った。

二度寝したい誘惑と戦いながら前日に決めておいた服を着て、荷物を玄関に運ぶ。ちょうどお湯が沸いたのでインスタントのスープと菓子パンを食べた。

テレビをつけてお天気コーナーを観てがっくりする。余裕の３０度越え。外に出るときは水分補給をしっかりしましょうとお姉さんが言っているのを聞いて、私は冷凍室に入れておいたペットボトルの存在を思い出した。

再び洗面所に行って歯を磨き、収まりの悪い髪を整えた。暑いのでひとつに纏めてお団子にした。

時計を見ると六時四十分。七時に駅に待ち合わせだからもう出ないとならない。

買ったばかりの日傘を持って、私は家を出発した。

地元の駅に到着すると、やっぱりだけどすでにキタちゃんがいた。
私とお揃いのカートを持っている。
「おはよう、キタちゃん」
「おはよう」
「聞いてよ、出る直前に兄ちゃんに見つかっちゃってさ」
話しながら歩き出す。夏休みの朝七時の駅は人もまばらだった。
だけど私たちと同じようなカートを引っ張っているお姉さんを見つけた。目が合うと頷かれた。おぉ同士よ。
「朝っぱらからどこ行くんだって聞かれて、」
「なんて言ったの」
「フリーマーケットって言っといた」
「それいいね。私も今度からそう答えようかな」
同人即売会と正直に親兄弟に言っているオタクは果たしているのだろうか。…いたな、部長がそうだ。五味も普通に言ってそうである。
途中、乗り換えの駅でマリちゃんと合流し、三人で喋りながら会場に向かった。
会場に近づくにつれ次第に目的を同じとした人たちが増えてくる。気合の入ったファッションやお馴染みのカート、やたらでかい鞄となんだか分からないが同じ匂いをまとった人たちは互いが互いを見れば容易に分かる。
「メグっぺは来れないんだよね？」
「はい。夏休み前くらいになって、やっぱり行けないってメールをもらいました。私の気のせいかもしれないですけど、最近めぐちゃんと放課後の部室で会わなくなりましたよね」
「マリちゃんもそう思う？　昼休みもいない気がするんだよね。友達と食べてんのかなあって思ってたんだけど実際どうなんだろ」
残り一枚のサークル入場チケットはそういう事情からマリちゃん

に渡った。五味は部活があるからと泣く泣く身を引いたのである。
「彼氏ができたのかもね」
とキタちゃん。私とマリちゃんは電車内で色めきたった。
ま、マジか、夏なのに春が来たのかメグっぺ…！
「実際はどうか知らないけどね。ほら降りるよ」
車内アナウンスが駅名を告げる。私は慌ててカートを持ち上げホームに降りたった。
約一時間半電車に揺られ、ようやく私たちは会場に到着した。
「おはようございまーす」
隣同士のサークルさんと挨拶を交し合い、いざ準備。
持参したテーブルクロスを広げ、量が量だけに印刷所から直接届けてもらった新刊を並べる。既刊も少しだけ持ってきていたので空いたスペースに置いた。去年はうっかり忘れた値札もちゃんと作ってある。
「私、最初に店番しなくていいんですか？」
「いいよいいよ、その代わりにお使い頼んでもいい？」
私は部長から渡されたメモとお金をマリちゃんに託した。キタちゃんには私の分のお使いを頼んである。
「じゃあいってらっしゃい」
狩の時間だ。会場がいっせいに動き出した。

始まってから三十分。サイトを知る客さんがちらほら来てくれたり、キタちゃんのファンを自称するお客さんも来たりと私に暇な時間はなかった。
行きかう人たちは真剣な顔で、でもどこか楽しそうな顔をしていた。雰囲気だけでもなんだか嬉しくなってしまう気持ちはよく分かる。
「あのぅ、」

「あ、はい！」
キタちゃんの新刊と私の新刊を一冊ずつ買ってくれたお客さんがいた。どっちか聞かれたのでサイトで名乗っている名前を告げると、毎日訪問してますと言われて私は舞い上がってしまった。
照れるな。声が上擦ってしまう。おぉ、握手、こちらこそありがとうございます。
緊張で汗をかいてしまった。ベタつく手の人だと思われやしなかっただろうか。
お客さんを見送り、私はタオルで顔をぬぐいつつ「グフフ」と笑った。
「これください」
「はっ、はい、」
慌てて顔を上げると、そこにいたのはなんと五味だった。
「……あんた何やってんの。部活は？」
「急遽休みになったんっすよ」
「ほんとに？　サボってきたんじゃなくて？」
「ほんとのほんとに休みっすよ！　なんならサコ先輩に聞いてください！」
疑わしいがそこまで言うのなら本当なのだろう。
それにしても五味、イベント会場が最っ高に似合わない男だな。
「新刊三冊出したんだ、すげー」
「五味君、それあげるからどっか行ってくんない？」
「リホ先輩、さっきからひどいっすよ」
周りを見ろ、オタク女子の皆様がお前を遠巻きにしてらっしゃるぞ。
一応この辺りはＢＬばっかりだから男は異質な存在になりうるのだ。女性専用車両に入り込むより気まずいはずなのに、五味は空気が読めていない。
「お客さんが寄り付かなくなるだろ。ほら、飴もあげるから立ち去れ」

「じゃあ後でまた来ます。終わったらメシ一緒に食べに行きましょうね！」

しっかり飴を受け取った五味は笑顔で去っていった。夏の大会に備えてこんなところにいる場合じゃないってことをやつは自覚しているのだろうか。

開始から一時間ほどしてマリちゃんが帰ってきた。

「もういいの？」

「はい。部長の本と、あとどうしても欲しいのは手に入れましたから」

マリちゃん嬉しそうだ。でも五味が会場にいることを告げると「何してんですかねアイツ」と若干テンションが下がっていた。

「値札があるから大丈夫だよね。あと小銭なくなりそうになったら電話してね」

「はい」

「じゃあ行ってくるね」

マリちゃんに店番を任せ、私は差し入れと新刊を持って知り合いのサイトさんに挨拶に向かった。メールではもう何度も親しいやり取りをしているけど会うのはこれが初めだから緊張感がハンパない。キタちゃんに一緒に来てもらったらよかったかな。やばい、また汗かいてきた。

あの人だよねとサークル番号を確認して、私は一度深呼吸した。私、普通だよね。変じゃないよね。

私はドキドキしながら声をかけた。

「そうなんです、会社員二年目なんですって。関西から来たって言ってましたよ。メールでもそうだったんですけど喋っても面白い人なんです。あ、携帯のメルアドも交換しちゃいました」

無事イベントを終え、五味を加えた四人で食事をした後帰路につ

いた。
家に到着してからも私は今日の興奮が忘れられず、部長に電話していた。頼まれた本は無事手に入ったことを告げると部長は受話器の向こうで喜んでいた。
「さっきも携帯にメールくれたんです！　思わず保存しちゃいました。あはは、キモいのは分かってますよ」
それから病院の消灯時間まで話し込み、私は携帯を切った。今日一日のことを思い出すと途端に口元がニヤけてしまう。
「カレシ？」
「わっ、なんだカナか」
またノックもしないで勝手に入ってきたな。
こっちが文句を言う前に、妹のカナはにやにやと笑いながら訳知り顔で頷いた。
「ふーん、リホのくせにやるじゃん」
「は？」
「どんな男かは知らないけど、がんばりなよ」
「はぁ」
お前はなにを言ってるんだ。
カナは分かってる分かってると言いながら私の部屋にあったゲームソフトを持って部屋を出ていった。
いったいやつは何を分かったんだというのだろうか。
疑問を残しつつ、私の夏の一大イベントは終了した。

21、妹よ

今日はバイトもないし部屋で一日中ごろごろしているはずだった。
それなのに。
「っう、…グス、グス」
何の動物の鳴き声だとお思いの貴方。違いますよ。
うちの妹の泣き声です。
なんでこんなことになっちゃったの。

今日は朝から散々だった。
「カナちゃん落ち着いてぇえええ！！」
洗面所で顔を洗っていると、妹の花菜子がカミソリ片手に私に襲い掛かってきたのである。
「動いたら怪我するよ」
カナは私よりも背が高いうえに力も強い。壁に押さえつけられた私の顔にカミソリを沿えた妹はもう悪魔以外の何者にも見えなかった。
最近、私に対してキモいと言わないし蔑まないし普通に喋ってくるからなんだやっと姉の偉大さを知ったかと思っていたらとんでもない。あれは油断させるための演技だったんだな。
じょりっ。
「あふぅっ」
「キモい声出すな。ったく、高校生にもなって眉毛いじってないなんてありえないんだけど」
悪かったな、でもそのままの君（眉毛）でいて欲しいって恋愛ドラマじゃしょっちゅう言ってるだろ。なにごとも自然が一番なんだよ。

「喋るな。切るよ」
はい、黙ります。私は貝になりたいです。
無言になった私の口の周りの産毛をカナはカミソリで器用に剃っていく。ついでだと言われて結局顔全体の産毛を剃られてしまった。化粧するときファンデーションが浮いて邪魔なんだってよ。知るかよ。
「よし、顔洗って」
私はお姉ちゃんのはずである。本来なら私が妹に対して絶大な権力を振るえるはずなのにおかしいよこれは。
疑問に思いながらも口にせず、私は大人しく顔を洗った。泡を落とすと、私の顔はつるんとした肌触りに変わっていた。しかしまだ終わりではなかった。
「じゃあ次は眉毛カットするから」
「え」
すべてが終わったときには、私の眉毛は半分とまでは言わないが前に比べると明らかに細くなっていた。
これは喜ぶべきなのか。妹のように長さが半分になっていないことに胸をなでおろすべきなのだろうか。
「なにぼさっとしてんの。二階行くよ」
「今度はなに」
「着替えんのよ。買い物付き合って」
「えぇっ、やだよ！」
今日は一日中怠惰に過ごすって決めてるのに。
ブーブー言ってごねる私だったが、妹のカナだって負けていなかった。もう一度言うが私よりも妹のほうが強いのだ。私はジャイアンを目の前にしたスネ夫にすぎなかった。
私が漫画をわんさか持っているように妹も服などの装飾品をわん

さか持っていた。
カナは私が持っている服を基準に自分の服や靴などを貸してくれた。いや、貸してくれたんじゃない、着ろと押し付けてきた。
それから無理やり化粧された。妹のようなギャルメイクではなかったけどあれこれ付けられ弄くりまわされた。
おい唇がベタベタするぞ。視界に何か映ってるけどこれ私の睫毛か。
ごわごわの髪もどうやったんだっていう髪型にされた。お団子だけど私がするより複雑な感じだ。触ろうとしたら怒られてしまった。あとストパーあてたほうがいいと言われたけどなにそれ、ストツーなら知ってる。
襲われてから一時間半後、私は妹に引きずられるようにして家を出た。
「欲しい靴があるんだよね」
「あんなにいっぱいあるのにまだ欲しいの？」
「オシャレは足元からだよ、リホ」
そう嘯く妹は十センチはあろうかという踵の靴を履いていた。グラディエーターミュールというらしい。お前は今から戦いに行くのか。
私にしてみれば非常に歩きにくそうなのだが、カナは颯爽と歩いているから凄い。ときどきかっくんかっくんしながらも踵の高い靴を履いている人を見ると、なぜそうまでしてと思う私だった。でもカナは実に堂々と歩いている。
「うおっ、と！」
「なにしてんの、どんくさいな」
それに比べて私は三センチもない踵のミュールで躓いていた。ダセェ。
「待ってカナ、早いよ」
リホが遅いんだよと言いながらカナは歩調を緩めてくれた。
妹に気遣われた私は改めてカナを見た。足、長いなあ。モデルみ

たいな体してる。ショートパンツから伸びた足や細い二の腕をじろじろ見ているとまた躓いてしまった。

目当ての店は大型商業施設の中にあった。

今まで近づいたこともないギャル系の服を取り扱う店を前に、私は立ちすくんでいた。見えないバリアがあるんですけど。視線を向けることさえ躊躇われるんですけど。

「突っ立ってないで入りなよ」

「は、入っていいの？」

「当たり前じゃん」

「お、おじゃまします…」

ものすごく呆れた顔をされた。

だってだって仕方ないじゃん。私絶対ここで服を買うことないよ。似合わないし興味もないのに入って怒られないのか。

「あった。これこれ」

「それが欲しいの？」

「うん。カッコよくない？」

皮素材で金具がたくさん付いている。カナが格好良いと言うんならそうなんだろう。

「あーでも黒もあるなあ。ねえ、どっちがいいと思う？」

「私は茶色が好き」

「じゃあそうしよっと」

おいおい私の意見で決めちゃうのかよ。あとで黒がよかったって言っても知らないからな。

それからいくつか服を見た後レジに行った。カナが鞄から財布を出す前に、私はお札を出して支払った。

「……なにしてんの？」

「カナ、もうすぐ誕生日でしょ」

「知ってたんだ」

「お姉ちゃんだもん、当たり前じゃん」

なにをそんなに驚いてるんだか。覚えてるに決まってるじゃん。

だって私が少し前までハマりまくってたキャラの誕生日と一緒だったしな。余裕、余裕。

「ありがと…」

「大事に履きなよー」

恐ろしいまでのメイクをした店員が微笑ましそうに私たちを見ている。おめでとうございます～と言いながら妹の靴の入ったバッグを渡してくれた。

その後せっかく商業施設に来たのだからと他の店も見て回ることにした。二人でお買い物は実は初めてだった。だから知らなかった。カナはファッション番長だった。

私がいいなと思って手に取った服をことごとく地味だと言って却下してくれた。買うならせめて他のもっと派手な服と合わせろとうるさく言ってくる。

結果、普段買わないような服を買ってしまった。

信じられないだろ、袖がないんだぜ、これ。

恥ずかしい。絶対上になんか着よう。そんなことを考える私を見透かしていたカナはこれと合わせると可愛いよと言ってこれまたヒラヒラした服を持ってきた。ボタンが一個しかねえけど付いてる意味あんのかそれ。

けれど結局買ってしまった。

勢いに乗って、というかヤケになった私はそれから妹に勧められるがままに恐れ多くて今まで見向きもしなかったミニスカートやショートパンツなどを購入した。

今年の夏の作戦名は『ガンガンいこうぜ』で決定だな！！

……後で思うと暑さでどうにかなっていた。

「お腹空いたぁ。ねえリホ、あそこで何か食べようよ」

お昼になると、買い物バッグを両手に下げた私たちは一階のフードコートに立ち寄った。

四人席の座り、空いた椅子に荷物を乗せた。が、全部乗り切らなかった。

「買いすぎちゃったなあ」
「足りないくらいだよ。リホ、あれだけの服でよく間に合うね」
「あんまり外出ないもん」
「だから白いんだ。羨ましいな」
私は妹の体型が羨ましい。どんな服でも似合いそうである。
食べたらあと何店か回って帰ろうということになった。お昼ごはんはハンバーガーセット。二人でもりもり食べていると、カナが突然「彼氏とはどうなの」と聞いてきた。
「何それ。誰の彼氏？」
「リホに決まってんじゃん。いるんでしょ、彼氏」
…初耳なんですけど。
勘違いにしても豪快すぎるぞ妹よ。私がいつそんな素振りを見せたというのだ。
「メールしてるんでしょ。関西出身の会社員」
「オガタ様！？」
「様付け？　マニアックな彼氏だね」
ポテトを食べてる妹にビンタしてやりたくなった。
オガタ様はな、私が敬愛して止まないサイトの管理人様だよ！こないだのイベントで急接近したんだよ！　とぼけたこと言ってんじゃねえぞ！
ここがフードコートじゃなかったら言ってたけどそうじゃないから我慢した。
「その人もオタクなの？」
「そうだけど、いや違う」
「どっちよ」
オタクだけど彼氏じゃない。
そう言おうとしたとき、不意に私の後ろを見たカナが目を見開いて硬直した。
つられて私も背後を振り返った。眼鏡をかけた少年がハンバーガーの乗ったトレイを持って立っていた。

「吉村？」
妹の友達みたいだ。
カナを見ると、…なぜか挙動不審になっていた。目があっちむいてこっちむいて唇はぱくぱく開閉していてほっぺたに塗ったチークとやらがさっきよりも赤くなっている。
落ち着けカナ、今警察に職質かけられたら間違いなくパクられるぞ。
「カナのクラスメイト？」
「ふ、二ツ木、ていうの」
語尾はほとんど聞こえなかった。なんだどうした急に大人しくなって、この子に弱味でも握られてんのか。
もう一度振り返ると二ツ木少年と目が合った。眼鏡のせいか真面目そうな印象を受ける。そして私と同じ匂いがするのは気のせいだろうか。
「こんにちは。妹がいつもお世話になってます」
「ちょ、リホ！」
「えっ、吉村の姉さん！？」
驚くのも無理はない。姉妹だと言えば妹に見られるのは私のほうだし。
それにしてもクラスメイトか。とりあえずここはいっちょお姉ちゃんがんばっちゃうぞ（嫌がらせ）。
「カナはこんなんだけど意外に良い子なんでよろしくね～」
「なっ、」
「この子とよく話すの？　暴言吐かれたりしても許してあげてね」
日ごろ圧政に苦しむ民衆はいつか蜂起するのだ。教科書にも載ってるだろ。
最初は驚いていた二ツ木少年はニコっと笑った。おぉ真面目そうなのに笑うと人懐こい。ギャップ萌え。
「ゲームの話とかよくしますよ。吉村、けっこう詳しいんです」
「私のゲームソフトしょっちゅう掻っ攫ってるんだよ」

「じゃあお姉さんがゲーマーなんだ」
「そういう君も中々のもんだと見た」
「リホ、バカ、」
妹は真っ赤になって俯いてしまった。耳の先まで紅潮している。
珍しいなと眺めていると、二ツ木少年の連れがやってきた。同じく眼鏡をかけた二人は二ツ木少年に声をかけ、それからカナを見てぎょっと目を剥いた。
「っげ、吉村だ」
人の妹を見て「っげ」とはなんだ。
大人しそうな顔してなんか嫌な感じだな。そのヤバいのに会っちゃったよって顔はなんだ失礼だぞ。おいカナ、なんか言ってやれ。
「……私、トイレ」
カナは突然立ち上がると荷物と食べかけのハンバーガーを置いて走り去ってしまった。そっちはトイレじゃない。
二ツ木少年は不思議そうな顔でカナが走り去った方向を見つめていたけど、ここにいても仕方ないと思ったのか彼らと共に席を離れていった。
カナはいつまでたっても帰ってこなかった。

22、お姉ちゃん

Q，電話をしてもメールをしても出ない妹はどこにいたか。
A，商業施設近くの公園にいた。

ふざけんなよ。
おいカナなんで外に出てんだよ、マジありえねえよ。一階から四階にあるトイレ全部探したんだぞ。屋内アナウンスもしてもらったっつーの。その間ずっとあんたの分の荷物持ち歩いてたんだぞ。オタクに重労働させんなよ。
「っう、うぇっ、グス、グスっ」
言いたいことは山ほどあったけど妹が泣いていたのでやめた。私ほんとにいいお姉ちゃんだな。
泣きじゃくるカナの隣に腰を下ろすと、私はハンカチを貸してやった。背中を撫でながら妹の顔を覗き込んだ私は思わずのけぞった。
「お化けだ」
私の率直な意見を聞いたカナは泣いていたのが嘘みたいに恐ろしい顔を私に向けると問答無用でほっぺを抓ってきた。
「信じらんないっ、普通そこは大丈夫か聞くべきでしょ！？」
「甘えんな！　探しに来てやっただけでもありがたく思え！」
私も負けじとほっぺを抓り返し、夏休みの公園で遊ぶ小学生たちの注目を集めまくってしまった。サッカーよりも面白いと思ったのか、周りを囲む小学生たちの存在に気づいた私たちは一時休戦することになった。
「じゃあ帰るか」
「なんで泣いてたか聞けよ」
聞いて欲しいのならその態度をどうにかしろと言いたい。なんでこんなに生意気に育っちゃったの。お父さんもお母さんも末っ子だからといって甘やかしすぎなんだよ。

でもカナが泣くなんてよっぽどのことである。私はお姉ちゃん私はお姉ちゃん私はお姉ちゃんと三回唱えて気持ちを落ち着け聞いてやることにした。感謝しろよカナ。

「分かってると思うけど、私あいつが好きなんだ」

「え、どいつ？」

「二ツ木に決まってんでしょ！　なに？　全然気づいてなかったわけ！？」

「だってあんたの今までの彼氏ってチャラ男ばっかだったじゃん。二ツ木君って真面目そうだしオタクっぽいからむしろあんたの嫌いなタイプじゃないの」

今までの妹の彼氏といえばそのどれもが同じタイプで、ズボンがやたらとずり下がっていたり邪魔そうな前髪をしていたりのチャラ男もしくはギャル男だったのだ。

対する二ツ木少年は私の指摘どおりオタクだった。ゲームにやたらと詳しいらしい。なるほど、ゲーオタか。また全然違うタイプの男を好きになったものだ。

「し、仕方ないじゃん、好きになっちゃったんだもん…」

「ひでー顔して恥らわれても」

「うっさい！」

それにしてもそうか、二ツ木少年が好きだったのか。思い返してみるとたしかにテンプレ通りの反応をしていたので頷ける。

カナはハンカチをいじりながら二ツ木少年との馴れ初めを話してくれた。

「元カレにひどいフラれ方されたことがあってさ、そんとき慰めてくれたんだ。向こうは偶然会ったから喋ったくらいにしか思ってないだろうけど、でも私は嬉しかった。気づいたら好きになってたの」

カナの目からまた涙が零れ落ちた。

それを見た私は、本当に彼のことが好きなんだなあ、となぜかこっちまで切なくなってしまった。

最近、私のゲームを借りまくっていたのもゲーオタの二ツ木少年

と話したいがための行動だったのだ。なんともいじらしい。
「好きって言わないの？」
「言えたらいいけど、でもダメだろうなぁ。一緒にいたやつらの顔見たでしょ。私とあいつとじゃ釣り合ってないのよ」
「なにそれ、なに言ってんの」
「派手で頭の空っぽな女だって周りから思われてんの知ってるもん」
マジでなに言ってんだこいつは。
無性に腹が立ってきた。なんだそれ、ムカつく。空っぽって誰が言いやがったんだ。
「……リホ？」
「わけ分かんない、カナあんたバカじゃないの」
「バカはあんたよ、なんで泣いてんのよ」
気づけば私はぼろぼろ泣いていた。でもどうしてかなんて自分でもよく分からなかった。
「笑って言ってんじゃねえよ、悲しいくせに、好きなくせに、笑って勝手に自分の評価決めてんじゃねえ」
「リホ、」
「好きならそれでいいじゃんか、なのに釣り合うとか釣り合わないとかごちゃごちゃ言いやがって、ムカつくんだよ、好きなんだろ、だったらその気持ちに自信持てよ、誰に何言われようが堂々としてろよ」
「リホ、」
「しゃんとしろ。お前はいい女だ」
それ以上は言葉が続かなかった。
目をごしごし擦ったら手の甲が黒くなった。それにぷっと吹き出すと後はもう止まらなかった。気づいたらカナと一緒になって笑い転げていた。

公園を出る頃には太陽の位置も随分傾いていた。化粧くずれの激しい私たち姉妹は誰かとすれ違うたび顔を下に向けなければならなかった。

「ねえリホ、私にもお弁当作ってよ」

「えー。前聞いたらいらないって言ったじゃん。コンビニのほうが好きだって」

「作ってくださいお姉ちゃん」

「し、仕方ねえな」

今の幻聴とかじゃないよね。小学校で呼ばれた以来だよ。

基本、身内には萌えない私だけど今のはキュンときた。くそう。

「あ！」

突然カナが声を上げた。携帯を見て驚いている。

「二ツ木からだ」

「えぇ！」

『大丈夫？　様子がおかしかった気がしたから。勘違いだったらごめん』

カナは携帯を抱きしめてうずくまってしまった。また泣いてるみたいだった。

「どうしよ、嬉しいよぅ…っ」

「ほ、保存だ！　急げ」

「もうした」

あぁ、よかった。カナが好きになった子が彼で本当によかった。

泣いて笑ってまた泣いて、私たちは家に帰った。

23、人として軸がズレている

「美術館のチケットがあるんだけど、リホちゃん興味ある？」
神谷はいつも唐突な男である。
その日も私の部屋のドアをノックもしないで入ってくるなりそうのたまった。
言いたいことは色々あったけどこの男のことだ、右から左に受け流すに違いない。だったら言うだけ無駄だ。私は非生産的なことはやらない主義なのだ。
「このチケット、今までたらい回しにされて俺のところに来たんだよね。遊園地とか水族館ならまだいいけど、美術館に積極的に行きたがる女の子なんて少ないし、よかったらリホちゃんどう？」
見ると、誰もが一度は聞いたことのあるような有名な画家の美術展のチケットだった。でも積極的に行きたいかと聞かれれば答えは否だろう。どうせ観るなら漫画の原画展のほうが百倍は楽しいと思う。
「まあでも、くれるって言うんならもらっときます」
「観に行くの？」
「タダだし。後学のために」
二枚あるからキタちゃんでも誘ってみようかな。うん、意外とキタちゃんこういうの好きそうだし。
「じゃあ明日の十時に駅前の時計台に集合な」
「は？」
私が何かを言う前に、神谷は部屋を出て行った。

翌日、十時になっても神谷は現れなかった。
どうやら私はかつがれたらしい。半信半疑ではあったけどそれで

も一応やってきた私が馬鹿だった。
神谷のボケ。お前なんか女に刺されて入院してベテランのオバちゃん看護師に迫られてトラウマつくればいいんだ。
十時半になったら帰ろう。そうだな、せっかく外に出たんだから漫画喫茶に寄るのもいいかもしれない。そうだそうしよう、手塚先生待っててください。
「ごめーんリホちゃん、待ったー？」
斯くしてきっかり三十分遅れで神谷は姿を現した。
三十分も待ってた私、超エラい。正確には十分前に着いていたから実質四十分待っていたんだけど。
来なかったら神谷のメルアドを消去しようと思っていたところに、やつはまったく急ぐ素振りもなくやってきた。息ひとつ乱してねえ。
「早いねー」
「……今何時ですか」
「十時半だよ。携帯忘れた？」
いるよいるいる、遅刻はオシャレだと思ってる人種が。
まったく悪びれない神谷に怒りが募る。言いだしっぺが遅れるなんてあり得ない。この仕打ちに彼女とかは怒ったりしないのだろうか。それとも何か、来ただけでもありがたいと思えなのか、えぇオイ。
「なにしてんの。早く行こうぜ」
たった三文字でいい。謝ってくれ。な？　今ならリホちゃん許してやるからさ。
さっさと『ごめん』って言わんかい。
「リホちゃんと二人で出かけるの初めてだよな」
ギュ！
……ん？
「神谷さん」
「なに？」
「この手はなんですか」

「それって謎かけ？」
いやいやいや……いやいやいやいや！
繋いでるしっ、ねえからっ、そういうの駄目だからっ、男の子と繋ぐの幼稚園のとき以来だからっ。
「顔赤いよ。なに、俺のこと好きだったの？」
「んなわけないでしょ。私たぶん雄ゴリラと手を繋いでも顔赤らめますよ」
「リホちゃんは相変わらずズレてんなあ」
その後どんなに振り回しても神谷は離してくれなかった。完全に嫌がらせである。

電車に揺られて三十分。
美術館に到着すると、入り口の外まで行列が伸びていた。
「嘘、マジ？」
「こんなもんでしょ」
有名な画家ともなるとこれくらい当たり前である。もっと人気があると目の前の比ではない行列ができあがる。
たった一列でうんざりしている神谷を見て、やつが今まで美術展というものにまったく縁がなかったのは容易に分かった。
「ほら、暑いんだからさっさと並びますよ」
「えー行くの？」
「私は行きます。嫌ならそこの喫茶店で茶でもシバいといてください」
「分かった。行くよ」
渋るなら最初から来なきゃいいのに。高校三年生にもなって見通しの甘いやつだ。
「俺、今度からは絶対デートに美術館は選ばないよ」
「神谷さんの場合、そうしたほうがよさそうですね」

「……ほんとズレてんなあ」
なんのことか分からなかったので無視した。
幸い列は美術館の影になっていたのでそれほど苦にはならなかった。三十分ぐらいで屋内に入ることができた。
美術館の雰囲気は好きだ。
温度と湿度が設定された建物の中は実に心地が良い。天井も高いし、来場客のひそひそ声も雰囲気に一役買っていると思う。
私が独特の空気に浸っていると、ぐいっと体が引っ張られた。
「歩くの遅いよ」
「ちょっと待ってください。美術館はそんなにスタスタ歩く場所じゃないんですよ」
「早く観て早く出たい」
「じゃあ別行動しましょう」
「やだよ。一緒に来た意味ないじゃん」
小声で言い争っていると、後ろに並んでいた老夫婦に笑われてしまった。
超ハズい。神谷、お前のせいだぞ。
なんだかんだで結局一緒に観て回ることで落ち着いた。これがイベントだったら別行動は当たり前なんだけどな。
来たからには元を取らないと気が済まない貧乏性な私は、たぶん買い物にうるさい主婦並の眼光の鋭さで絵の端から端まで見ていたと思う。食い入るように絵にかじりついていると、繋いだ手がくいくい引っ張られた。
「リホちゃん、面白い？」
開始早々、神谷が飽きていた。
「面白いですよ」
「そう？　俺にはまったく意味が分かんない。綺麗だとは思うんだけど」
「いいんですよそれで。綺麗だなあって思う心、プライスレス」
大なり小なり心を動かすってことは実は凄いことなんだぞ神谷。

私もいつか自分の漫画でたくさんの人の心を動かしてみたいもんだ。壮大な夢かもしれないけど、そうやって夢見る心もプライスレスなのだ。

「それにただ描いてるってだけじゃないんですよ。ほらほら、この絵を見てくださいよ。わざと人物をずらして端のほうに描いてるでしょ。空いた空間がこの人の寂しいなーって気持ちを表してるんです」

「そんなこと説明書のどこにも書いてないけど」

「書いてないけど察しろよってことですよ」

それから私の勝手な解釈を交えながら絵画を巡っていった。神谷は私が作ったストーリーにときどきツッコミを入れたり笑ったりして、少なくともつまらなそうではなかったので元は取れたと思う。

「うわ、もうすぐ二時だよリホちゃん。けっこういたんだな」

美術館を出るころには当然お腹が空いていた。駅からここに来るまでによさげなレストランがいくつかあったので、そのひとつに私たちは入ることにした。

席に座ると、私はそこで初めてずっと手を繋いでいたことに気がついた。温もりが離れて逆に変な感じがした。ていうかなんで手なんか繋いでたんだ。

「奢るから何でも好きなの頼んでいいよ」

気恥ずかしさはその一言で吹っ飛んだ。

やったね。がっつり食べますよ。

今なら何でも入る気がする。私は上機嫌でエビフライとハンバーグのセットを注文した。

「リホちゃんってさ、ズレまくってるよな」

「は？　なんです？」

注文した料理が来て食べていると、神谷が突然そんなことを言い出した。今日すでに何度か言われた気がする台詞だった。

「普通さ、男の前だともっとお淑やかに食べない？」

「はぁ」

お腹が空いていたせいか私の食べっぷりは豪快だった。がつがつとまではいかないけど、もりもり食べていたと思う。
「小鳥のようにちまちま食べろってことですか」
「そうは言ってないけどさ」
「お淑やかに食べてたら料理が冷めちゃいますよ。美味しいものは味わいつつどんどん食べるのが一番です」
「うん。俺もそう思うよ」
「ところで神谷さん、クリームコロッケとエビフライ交換しませんか」
「いいよ」
なんかもう諦めた、というふうに笑われたのが気になったけど、熱々のクリームコロッケを目の前にしてそれは瑣末な疑問にしか過ぎなかった。

「またデートしようよ」
家の前まで送ってくれた神谷がおかしなことを言いだした。
「デート？」
「そうだよ」
「言いだしっぺが遅刻してきて一言も謝らなかったこれがデート？」
「三十分くらい、いいじゃん」
いやいやよくねえじゃん。
オーケー、分かった、理解した、いっつもこうなんだな。相手待たせて当然なんだな。
私ははぁ～っとそれはもう盛大にため息をついた。
「神谷さんってズレてる。もうズレズレ」
「それはリホちゃんだろ」
「私、今日は時間前集合だったもんね！　三十分以上待たされて周りに『あの子スっぽかされてやんのププー！』って思われたんだよ、

なのにちんたら歩いてきやがって謝れコラー！」
「十時って言ったら普通は十時過ぎのことだろ」
「そんなの聞いたことねえよ！　映画は前戯といい神谷語録には碌なのがねえな！」
「メールしてくれたらよかっただろ。来てるって分かってたら俺だって走ったっつーの」
「逆ギレ！？　そこで素直に謝ったら少しはズレも直るのにほんと駄目だな！　このズレ谷！」
「ズレ子に言われたくねえよ」
拳？　拳いっちゃうかコレは。
喧嘩番長を兄に持つ私だ、やればできる。マグレでもいいから一発ヒットさせてやる。こいつのひん曲がった根性に渇を入れてやるのだ。
「こっちはまたデートしようって言ってんだよ、そっちこそ素直に頷いとけよ！」
「っわ、」
言い終わらないうちに握った拳を掴まれ引っ張られる。突然のことだったので私は踏ん張ることができなかった。
神谷に正面からぶつかった私は痛む鼻を押さえてなんとか顔を上げた。神谷の顔が近い。
「リホ」
背後で兄の声がした。神谷の動きがぴたりと止まった。
「家の前で騒いでんじゃねえ。早く入れ」
「う、うん」
なぜかは分からないけどものすごくお怒りのご様子だったので私は素直に従うことにした。
一瞬、神谷が抵抗するように手を引っ張った気がしたけど、本当に一瞬のことだったので気のせいだったと思う。私がそそくさと家に上がると、兄が外に出て玄関の扉を閉めた。
数秒後、何かを打つ音がしたのだけど、早々に階段を上がってい

た私の耳に届くことはなかった。

もうすぐ夏が終わる。

２４、甲斐君は見た

夏休みが終了し、二学期が始まった。
「リホリホっ、久しぶりだねえ！」
「久しぶり。焼けたねえ」
「海で泳いだからね。てかリホリホ、白すぎだよ」
「徹底的に日向を避けたからね」
廊下を歩いていると後ろから田辺さん、真柴さん、塔元さんの三人組に声をかけられたので一緒に体育館に行くことにした。これから二学期も始まるというので校長のありがたい話があるのだ。
今年も校長は「イエスウィーキャン」を使ってくるのだろうか。旬はとっくに過ぎていると思うのだが、校長はあれを持ちネタにしようとしているフシがある。
「鰐淵先生も日焼けしてなさそうよね」
「当たり前じゃない！　私イヤよ、先生が松崎しげるみたいになってたら！」
「それはそれで面白いじゃん、よし早いとこ行って確かめよう」
結果から言うと鰐淵先生は美白を保っていらっしゃった。しかもまだ暑いというのにスーツのジャケットを汗ひとつかかずに着ていらっしゃる。まあ肌着の透けた鰐淵先生なんて見たくもないけど。
夏休みはどこか行ったんですかと真柴さんが尋ねると、先生はウィーンでオペラ鑑賞をしてきましたとおっしゃった。
……この人はなんで高校教師なんてやってんだろう。
キャー素敵と言っている真柴さんには悪いけど、私と田辺さんと塔元さんはこの数学教師に対して胡散臭い気持ちを抱いたのだった。
『生徒は整列してください』
それまでお喋りに夢中になっていた生徒たちは、それぞれのクラス委員長が先頭に立つ列に加わっていった。出席番号順ではなかったので、私たち四人は固まって整列した。

三年の学年主任の先生の固い挨拶から始まり、次にいくつかの部活の大会成績が発表された。

男子テニス部は見事全国ベスト8に輝いていた。テニス部部長の香坂先輩が壇上に上ると、田辺さんがもっとよく見ようと背伸びをしていた。

そして三年のトモ先輩が所属する吹奏楽部は銀賞を受賞した。吹奏楽部の部長らしき女子生徒が緊張した顔で香坂先輩の隣に並んだ。

それから数人の部活代表者が壇上に上り、盛大な拍手が贈られた。香坂先輩への声援がどこからか飛び出し、田辺さんも負けじと声を上げていた。

次に新任の教師の紹介が行われた。

出産や定年などで夏休み前に春日坂を去った教師は何人かいた。漫研の顧問である古典のおじいちゃん先生もそのひとりだった。

後任の顧問はまだ決まっていない。はっきり言ってやることなんてほとんどないのだから誰でもいいんだけど。

新任教師の紹介をぼんやり聞いていると、後ろにいる田辺さんが話しかけてきた。

「ねえ、リホリホ」

「なに？」

「夏休み、彼氏とデートしてなかった？」

「彼氏！？」

しーんと静まり返る体育館。周囲から突き刺さる視線。塔元さんのごめんというジェスチャー。

それらすべてを受けた私は真っ赤になりながら首を竦めて小さくなった。

タイミング的にも非常にマズかった。校長が今まさに「イエスウィーキャン」を言おうとした矢先のことだった。

『あー、オホン……イエスウィーキャン』

校長めげない。ナイスガッツです。でも今日は失笑すら起こらない。

朝礼はかつてないほど微妙な空気で終了した。

教室に戻るとさっそく隣の席の甲斐君にからかわれた。なまっちろかった彼は夏休み明けにはこんがり焼けていた。交通整理のバイトをしていたらしい。

「一週間後には定期テストだからなー」

担任から試験の日程表を渡されうんざりする生徒多数。彼らが夏休み中に試験勉強をしていたとは思えない。もちろん私もその一人だ。

「じゃあ今から席替えするから、右の列から順番に籤引いてくれ」

沈んでいたクラスの空気もこれで一気に浮上した。私は真ん中から後ろだったらどこでもよかったけど、一部の生徒のテンションは凄かった。

「吉村とこれでお別れかあ」

「甲斐君、新しく隣になった子にウザがられないよう気をつけてね」

「吉村の暴言もこれが最後かと思うと感慨深いわ」

「握手しとく？」

「うん」

甲斐君、君のことはときどきウザかったけど嫌いじゃなかったよ。私が勧めたバイトを実はやってたなんてちょっと嬉しかった。

でも汗ばんだ手は若干いただけないな。

「次、四列目だぞ」

私の列だ。先生自家製の箱に手を突っ込むとぐるぐるかき回して指にひっかかった一枚を引いた。

出た数字と黒板に書かれた座席表を見る。通路側から数えて二列目の後ろから二番目だ。利点といったらすぐにトイレに行けること

ぐらいだな。
鞄と一緒に移動して席についた。両隣はまだ決まっていないようだ。
すると後ろからつんつんと背中をつつかれた。
「よ！」
さっき握手して別れた甲斐君がいた。なんだこの残念な気持ちは。
「名コンビ復活だな」
即解散してえよ。コンビになった覚えもないし。私は腐った魚みたいな目をして甲斐君を見ていたと思う。
「吉村、吉村」
今度はなんだよ。
右隣を見ると、なんと岩迫君がいた。
「よろしく！　ていうか久しぶりだよな」
「そうだね。あ、テニス部おめでとうございます」
「ベスト8だけどな」
「それでも十分凄いと思うけど」
「いや、でも完敗だったから」
夏休み前よりも日焼けした彼はそれだけ練習に打ち込んだのだろう。爽やかさにワイルドさが加わって、男っぷりが上がったと思う。
「吉村が隣でマジ嬉しいよ。当てられたときは頼むな」
笑顔がパワーアップしてらあ。
キラキラしてるよ。彼の後ろにお花が見える。甲斐君のヘラヘラスマイルとは大違いだ。これが毎日近くで見られると思うと席替え万歳である。
「そういやさ、体育館で叫んでたの、あれって何だったの」
「え」
「彼氏って言ってたよな。吉村、彼氏できたの？」
そこを蒸し返しますか。
神谷と美術館に二人で行ったところを塔元さんに目撃されていたわけだけど、あれは従兄のお兄ちゃんですと誤魔化しておいた。正

直に話すと余計な誤解を招きそうだったし、まあバレないだろう。
「従兄と一緒に歩いてたのを彼氏と間違われたんだよ」
「そうだったんだ」
「そうそう。彼氏なんているわけないじゃん」

「だったらよかったー」

直後に後ろで激しい物音がした。
「何してんの甲斐君。コントの練習ですか」
見ると甲斐君が椅子ごと仰向けに倒れていた。三枝師匠ばりの豪快な倒れ方に、私だけでなく周囲の生徒も驚いていた。そのすぐ後に笑いが起こる。
「甲斐君、頭大丈夫？」
「その言い方やめ。頭は打ってない。てかお前らってさあ、」
私と岩迫君を交互に見て、甲斐君は何かを言いかけた。けど結局何も言わなかった。
「全員、席決まったな。じゃあ本日これで終了！」
担任の号令で生徒は散り散りとなった。明日から通常授業が始まる。

25、不安のたね

二学期最初の定期テストが昨日終わった。

となると次にやってくるイベントといえば体育祭である。我が春日坂高校の体育祭は全クラスが四組に分かれて競い合う。

放課後、我が二年六組は出場種目を決めるべく教室に残っていた。担任は体育祭実行委員の二人に任せてさっさと帰ってしまった。去り際、俺は生徒の自主性を重んじるとか言ってたけどぜってー嘘だ。

「吉村、何出るから決めた？」

「パン食い競争は外せないね」

とうの昔に廃れたと思っていた競技が、なんと今年になって組み込まれていた。おそらく生徒会長の仕業だろう。春日坂の歴史上最もふざけていると誉れ高い会長は、他にも飴食い競争やぐるぐるバットリレーなるものを提案し実現させていた。

「岩迫君はリレー？」

「うん。というか運動部は強制だろうな」

「じゃあ文化部の私は技術で赤組に貢献するね」

「相当パン食いに自信があるんだな…」

やったことないけど、なぜだろう私できる気がする。お笑いの血が騒いでる。

「それじゃあ希望する競技に名前書いてってー。一人最低二種目は出てね。あと定員オーバーしたらジャンケンで決めるから」

体育祭実行委員の村っちがてきぱきと進行してくれるお陰で今日は早く終わりそうだ。

私はさっそくパン食い競争に名前を書いた。あともうひとつはどうしよう、……玉入れでいいか、楽そうだし。

その五分後、私はジャンケンに負けて玉入れからはじき出されていた。仕方ないので残っている種目に振り分けられることになった。

それが男女混合二人三脚だった。

「私、はっきり言って足遅いよ」
「いいんじゃない？　息が合うかどうかでしょ」
いいのかなあ。
男子メンバーを見ると運動部の錚々たるメンバーが揃っていた。対する私は漫研のモヤシだ。チーターとカメが組むようなものである。
でも村っちにゴネても仕方ない。決まったからには迷惑かけないようにしよう。
「二人三脚のペア決めるから集まれだってさ」
「真柴さん」
「鰐淵先生以外の野郎とペアになりたくないんだけど。誤解されたらどうしてくれんのかしら」
真柴さんが同じ競技なのは頼もしいけど、彼女はしなくていい心配をしていた。絶対に大丈夫だよ、と私は言っておいた。
「ていうか男女ペアってあり得なくない？　私たちが今どんだけナイーブな年頃だと思ってんのよ」
「安心しろ、真柴。少なくとも俺たち男子はお前のこと女子だとは思っちゃいねーよ」
「は？　足折られたいの笠野」
競技開始前から息が合ってねえ。
村っちの言うとおりだった。どんなに足が速くてもこれじゃあ駄目だ。ペアになったら殴り合いそうな二人がいる。
「とりあえず真柴と笠野はペア組まないほうがいいってのは決まり。そうだな、身長差があんまりないようにしてペア組もうか」
サッカー部の酉谷君が冷静に場を仕切ってくれた。ナイスアシストである。
「じゃあ俺と吉村じゃね」
真柴さんとガンつけあっていた笠野君が言った。二人で並んで立ってみると、他の男子に比べて差異は少ないのが分かる。
「決まりじゃん。いいよな」

「うん。よろしくね」
その後はとんとん拍子にペアは決まった。あとは体育祭まで何度か練習しないといけないらしい。ぶっつけ本番で挑むつもりだった私は、今から憂鬱な気持ちになったのは言うまでもない。

放課後、部室に行くと部長とキタちゃんがいた。
「リホちゃん、体育祭の競技決まった？」
「パン食いと二人三脚です」
「あ、私も二人三脚だよ！　合同練習頑張ろうね」
部長、めっちゃ楽しそうだな。
漫研だけど運動神経抜群の部長は二年のときにはクラス対抗リレーに出て大活躍だった。今年は私と同じ赤組なので優勝が期待できる。
「今年も体育祭ＭＶＰ獲りそうですね」
「だとすると三年連続かあ」
「獲れたらだけどね」
控えめに笑う部長が綺麗すぎて部室と見事にミスマッチしてた。
ここがロココ調で統一されたお城の一室だったらピッタリなのに。
ちなみにキタちゃんはスウェーデンリレーに出るという。剣道の持久力を見込まれての抜擢だった。彼女もまた漫研部員とは思えないほど運動が得意だった。組は違うけど応援しよう。
「ねえねえ、部活対抗リレー出ない？」
部長がとんでもないことを言い出した。
部活対抗リレーとは得点にはなりはしないものの、一目でどんな部活か分かる格好か小道具を持って走るというエンターテイメント性溢れる競技である。去年の体育祭では卓球部はラリーをしながら、剣道部は打ち合いながらトラックを走っていた。
「ペンと原稿用紙持って走るんですか？」

「なに言ってんの、コスプレするに決まってるじゃん」
ドイツ人もビックリである。
二人仲良く言葉を失う二年生を置いて、部長は嬉々としてどんなコスプレにしようか話し出した。
だめだここで止めないと当日大惨事だ。黒い歴史に名を刻んじまう。
「やめましょう！」
「そうですムリです考え直してください」
「五味君はノリノリだったよ」
五味あンのやるぉおおあああ！！
シメる。あとで絶対シメる。でも今は幸子部長の暴挙を留まらせることが先決である。私とキタちゃんはかつてないほど一致団結した。
結果、コスプレは強要するものではないと部長は理解してくれた。よかった。本当によかった。
「そ、そういえばキタちゃんと五味って同じ青組だったよね。マリちゃんが白組でしょ、メグっぺは何組だろ」
私はとにかく部活対抗リレーから話題を逸らすことにした。
するとキタちゃんは難しい顔をして視線を逸らしてしまった。それが何組かを考える仕草ではないのは明らかだった。
「どうしたの、キタちゃん」
見ると部長も同じような顔をしていた。二人は声を潜めるようにして言った。
「さっき園田に会った」
「けど無視、されちゃったのかなあ、あれは……」
予想外の答えに私は目を丸くした。
あの礼儀正しいメグっぺが無視。いやいや、ないでしょうそれは。
「うん。園田に限ってそれはない」
「なんかワケありって感じだったよ」
「一緒にいた男が原因だと思う」

それって夏休みに一度だけ冗談みたいに言ってたあの『彼氏』ですか。

ますます私は驚いて瞬きした。それがなんで私たちを避けることに繋がるのだろうか。

「分かんない」

「でもメグちゃん、なんか泣きそうだったかも」

メグっぺ、なにがあったの。

私の胸に言いようのない不安が渦巻いた。

26、一、二、一、二

体育祭に向けて学校全体が準備に奔走していた。
美術部のちよちゃんは入場門のアーチを作ってるし、応援団員の子達は必死に振り付けを覚えている。イヤなのは体育教師がいつもより気合が入っていることだ。
本日、赤組の二人三脚メンバーは旧体育館前に集合である。体操服に着替えた私は真柴さんと一緒に集合場所に行った。
「笠野来てないじゃん」
「あれ、聞いてない？　笠野、騎馬戦に行ったよ」
「はぁ？　なにそれ」
なんでも部活のライバルから騎馬戦での勝負を申し込まれたらしい。代わりに騎馬戦のメンバーから二人三脚に誰かが移ってくるのだが、その誰かはまだ分からないと酉谷君は言った。
「ったく、勝手なやつ」
「誰でもいいけど、時間やばいよ」
代わりの子はまだ来ない。というか本当に来るんだろうか。
いや待てよ、相手がいなけりゃ私練習しなくてもいいじゃん。よーいドン係だやったね！
しかし私の野望は二秒で終止符を打たれた。
「ごめんお待たせ！」
やってきた男子を見て、赤組女子が嬉しそうな声を上げた。
「吉村、よろしくな」
イケメンスマイルを浮かべてやって来たのは、お隣の岩迫君だった。
「さっちゃん、内側の足からな」

「分かった、やっちゃん」
美男美女カップルがいる。
私たち赤組のメンバーの視線はひとつのカップルに釘付けになっていた。
我等が漫研部長、ドイツ出身の幸子部長とテニス部部長の香坂先輩である。
さっちゃんやっちゃんと呼び合う二人は幼馴染だった。しかも息はピッタリ。足が繋がれているとは思えない速さでトラックを爆走している。
あの二人がいたら一位確実だろ…私たち練習いらないんじゃね。
「吉村、足結んでいい？」
やっぱりやらないわけにはいかなった。
赤いハチマキで二本の異なる足が結ばれるのを見下ろしながら、私は神谷が手を繋いできたときのことを思い出していた。
あのときと同じ気恥ずかしさがある。真柴さんの言うとおりだ、いかんよこういうのは。
「よし、行こうぜ」
「う、うん」
二人三脚、それは密着する競技である。二人が一体とならなければならないので、肩を組むのは当然だった。
「うわっ」
「な、なに、どうしたの岩迫君」
「吉村、肩ちっちゃい！」
「普通だと思うけど……」
「なんか緊張する、うわー俺、顔赤くなってない？」
なってますとも。
やめてこっちまで赤くなっちゃうから落ち着いて！　ていうか岩迫君、今までに女の子の肩くらい抱いたことあるだろ。なに今さら驚いてんの。ここは余裕ぶっこいてくれないとこっちが困るんだけど。

「お前らなにしてんだ」
「見てるこっちが恥ずかしいからやめてくれる？」
酉谷・真柴ペアに注意されるほど私たちは狼狽えていた。
「相手はイモかカボチャかぐらいに思っときゃいいのよ」
「だそうだ」
実に堂々たるペアである。
私たちは赤い顔を見合わせて苦笑いした。
そして練習開始から三十分。
私は自分の運動オンチぶりを呪っていた。
「ごめんね、ごめんね」
「そんなに謝んなよ。まだ一回目だろ」
「本っ当にごめん」
ていうか私体力無さすぎだろ。すぐに息が上がって足が縺れてしまう。
二人一緒に何度か転んでしまって、私はこれ以上はないくらいにいたたまれない気持ちになっていた。
「ちょっと休憩しよう」
「うん……」
間違いない、赤組のウィークポイントは私だ。
どんより落ち込む私の隣で岩迫君が励ましてくれるけど、駄目なもんは駄目である。当日は罵声を浴びるんじゃないかという妄想にまで及んで、重いため息が出る。
「そんな落ち込むなよ。完璧な人間なんていないんだからさ」
「運動できないって致命的じゃん。自然界じゃ生き残れないよ」
「吉村は頭いいだろ。俺はそっちのほうが羨ましいよ。それにさ、吉村は嫌かもしれないけど、俺はけっこう嬉しいな」
「なにが？」
「だってやっとお前に恩返しができるんだぜ。数学とか教えてもらうとき、俺も今の吉村みたいに心の中じゃ何度も謝ってた。俺、バカだから一回の説明じゃ理解できないだろ。でも吉村、何回でも丁

寧に教えてくれるじゃん。だから謝るなよ。何回でも練習に付き合うからさ。頑張ろう、な？」

「岩迫君……！」

なんて良い子なんだ。天然記念物として国はこの子を保護するべきだね。

最近の若者は、なんて言ってるけどここにとびきり素敵な若者がいますよ。

「そろそろ休憩終わり。やれそう？」

「うん」

もう迷いはなかった。

私たちは立ち上がって練習を再開することにした。

27、本日晴天、心は曇天

あっという間に体育祭当日である。
天気予報では曇りだったのに、外は憎らしいほどの晴天だ。
「しんどい」
「まだ始まったばっかだぞ」
私の呟きに甲斐君が反応した。ちょっと前までは私と同じモヤシっ子だったくせに、夏のバイトですっかり逞しくなった彼は今日この日を楽しみにしていたらしい。「体育祭日和じゃん」とか言ってウキウキしている甲斐君を見ていると、なんとも言いようのない腹立たしさがこみ上げてくる。
「クラTも評判いいしさ。もっと元気出せよ」
そう、我が二年六組のクラスTシャツのデザインは私が考えさせてもらった。担任の茂木先生をデフォルメした珍妙なキャラクターが全面にデカデカと印刷されていて、自分でも中々の出来だと自負している。ネタにされた茂木先生には評判悪いけど。
「あ、ほら見ろよ。岩迫が出るぜ」
「ん？　あーほんとだ」
障害物競走の第四走者に岩迫君が出た瞬間、赤組だけでなくすべての応援席から女子の黄色い声援が上がった。
「すごい人気だねえ」
三位でバトンを受け取った彼は素晴らしいスタートダッシュを見せた。女子の声がまた一段と大きくなる。アイドルのコンサート会場みたいだ。
「岩迫ってモテるよなあ」
「あれだけ格好良けりゃね」
「これでまたファンが増えるんだろうなあ」
「体育祭終わったら告白ラッシュだろうね」
「吉村、焦んない？」

「え？　……っあ！　ヤバい、私もうすぐパン食い競争だ！！」
「は？　いや、そうじゃなくて」
「甲斐君ありがとね、それじゃあ行ってくる！」
危ない危ない、忘れるところだった。
集合場所にはすでに私以外の選手が集まっていた。体育祭実行委員の冷たい視線に身を縮ませながら、私は列に加わった。
そのとき、ひときわ歓声が大きくなった。背伸びをしてトラックを覗き込むと、岩迫君が一位で次の走者にバトンを渡しているところだった。

「リホリホお帰りー！」
競技を終えた私は笑顔のクラスメイトたちに迎えられた。
「すごかったよ、リホちゃん。あんなに見事なパン食い見たことないよ！」
「なにあれ練習してたの？　他とはレベルが違ってたわよ！」
「えへへ、どうも」
ジャンプする高さといいタイミングといい自分でも文句のつけようが無かったと思う。袋に入ったあんぱんはそのまま走者がもらえるというので、小腹の空いていた私はさっそく皆と分けっこして食べることにした。
「吉村、すごかったな」
「ありがとう、岩迫君。あんぱん食べる？」
「食べる。さっき走って腹減ってたんだ」
美味しいものと勝利の喜びを分かち合いながら、体育祭もいいもんだと私は思い始めていた。
お弁当も今日だけは豪華にしてきたし、デジカメも持ってきた。あとでクラスの皆やキタちゃんたちと撮ろう。
「体育祭なんて雨で流れちまえって思ってたけど、けっこう楽しい

もんだね」
「吉村、そんなこと考えてたの」
「今は違うよ」
それにしても美味いなこのあんぱん。コンビニで売ってる百円のやつじゃねえぞ。
きめ細かな餡子に感動している私の視界に、見知った女子生徒が映った。その瞬間、私は走り出していた。
「メグっぺ！」
私の声にびくりと肩を揺らすメグっぺに追いつき、逃げられないようTシャツの端を掴んだ。
メグっぺは困ったような、気まずいような顔で私を見ていた。なんでそんな顔をするのか分からなかった。メールをしても、校内で呼び止めても、メグっぺは一度も本当のことを話してはくれなかったから。
「あ、」
「先輩？」
「あんぱん食べない！？」
メグっぺはきょとんとして瞬きを繰り返していた。
は、ハズしたかこれは。
「いや、あのね、このあんぱん、すごく美味しいんだよ！」
「……さっきの、ですか」
「うんそう！　見てた？」
「はい。先輩、すごかったです。忍者みたいでした」
メグっぺはそう言って笑った。
久しぶりに見る彼女の笑顔はやっぱり可愛かった。こういうのを可憐っていうんだろうな。私は嬉しくなって、へらりと笑い返した。
「食べる？　かじってないよ」
「じゃあ、少しだけ」
ぎこちない会話が続く。私はなんとか話を途切れさせまいとあれこれ話題を振った。端から見ても私は必死だったと思う。

そして一番訊きたかったことを、訊いた。
「メグっぺ、部活、もう楽しくない？」
意地悪な訊き方だったと思う。
なんで部活に来なくなったの、でよかったのに。心のどこかで腹を立てていたのかもしれない。メグっぺの罪悪感を煽るような言い方だった。
「そんなのじゃ、ないんです、私、」
「じゃあなんで？」
「先輩、……先輩、ごめんなさい、」
メグっぺの顔が泣きそうなほどに歪む。それを見た瞬間、私は後悔した。
違う、そうじゃない。謝ってほしかったんじゃない。こんな顔をさせたかったんじゃない。
私、馬鹿だ。なにしてるんだろう。言いたくないことを無理やり言わせられるのは誰だって嫌に決まってる。これじゃあ苛めてるのと同じじゃん。
「私、わたし、」
「……言わないでっ、言わなくて、いいよ」
「先輩？」
「ごめん、メグっぺ。怖がらせてごめんね」
私は不安だった。居心地の良いあの場所がメグっぺにとってはそうじゃなかったかもしれないということに、たまらない不安を感じていた。
でもそれってただの我侭だ。自分も楽しいから相手も楽しくなきゃいけないなんて傲慢以外の何ものでもない。そんなことにも気づかないでメグっぺを責めるような真似をしてしまった。私、先輩なのに。本当に馬鹿だ。
「あんぱん、もうちょっと食べる？」
「……はい。いただきます」
メグっぺ、ごめんね。

あんぱんの甘い味が、今はしょっぱい。

28、一難去ってまた一難

午後になって、日差しはますます強くなっていた。それに反比例するように私の心は暗く曇っていった。

メグっぺの泣きそうな顔がどうしても思い浮かんでしまって、そのたびに罪悪感から頭を抱え込みたくなる。

あんなふうに人を傷つけてしまうなんて最低だ。何をどうしたら相手が傷つくかなんて、高校二年生にもなってどうして分からなかったんだろう。

メグっぺ、あれから泣いてないかな。

「吉村、吉村！」

肩を揺らされた私は驚いて顔を上げた。岩迫君だった。

「集合だって」

「あ、うん、」

「元気ない？　どっか具合悪いのか」

「そんなことないよ」

無理に笑いながら立ち上がると、岩迫君が心配そうな様子で顔を覗き込んできた。私はそんな彼の顔が見ていられなかった。

「赤組の得点がどうなってるか知ってる？」

「今は二番手だよ」

「じゃあ二人三脚、頑張らないとね」

へらへら笑って誤魔化している私を、岩迫君は何かを思うように見ていた気がする。けど優しい彼はいつもどおり会話に乗ってくれた。

もうすぐ競技が始まろうとしていた。スタートライン近くに案内された私たちは互いの足をハチマキで結ぶ。

ピストルの音が響いて、第一走者が走り出す。歓声がすごい。熱気が伝わってくる。それなのに。

……あぁ、駄目だ。私全然集中できてない。違うこと考えてる。

馬鹿、集中しなきゃ。岩迫君に迷惑がかかる。でもメグっぺ泣きそうだった。

「次だぞ、吉村」

今だけ。今だけ集中しよう。落ち込むのは後でいいから。

でも、でも。

「リホリホっ」

「岩迫、頼む！」

クラスメイトの声にはっとなった。うそ、もう私たちの番がきた。

慌てる私の肩がぐっと引き寄せられる。隣を見上げると岩迫君が頼もしい顔で頷いていた。

「練習どおりいこう」

「う、うん」

内側から。大丈夫、岩迫君がペースを作ってくれる。私はそれに合わせるだけでいい。あれだけ練習したんだから落ち着いていれば転ばない。

走り出すと、どこからかキタちゃんの声援が聞こえた。五味や、マリちゃんの声も聞こえた気がする。女の子の声がすごい。全部岩迫君への声援かな。

あ、メグっぺがいる。

「ぅわ！」

突然のことで何が起きたのか分からなかった。

一瞬後に、私は状況を理解してざっと青ざめた。

「いってー。吉村、大丈夫？」

転んだんだ、私。

咄嗟についた左手が痛い。ううん、そんなことどうでもいい。

何やってんだ私。集中切らして転ぶなんて。岩迫君に迷惑かけるなんて。

立たなきゃ。早く。でも足が震えてうまくいかない。どうしよう、何なんだ私、なんでこんなに馬鹿なんだ。落胆の声が聞こえる。どうしよう、立たなきゃいけないのに。

「リホ先輩、頑張って！」
メグっぺの可愛い声が聞こえた。
私を応援、してくれてる。違う組なのに、大きな声出すの苦手なのに。
さっきあんなに傷つけたのに。
「……ごめんっ、走ろう！」
心入れ替えて頑張るんだ。
あの子の声援に応えたい。その一心で立ち上がった私だったけど、非情な現実が待っていた。
「ハチマキ切れてる…」
「えぇ！？」
馬鹿ヤロウ空気読めハチマキっ、ここで後輩にビシっと格好良いとこ見せたいんだよ！　どんだけヤワなんだよ！
「あ、じゃあ頭に付けてるやつで」
言いかけた私の体が浮いた。…浮いた？
「吉村、ごめんな！」
直後に女の子の悲鳴が聞こえた。
私はその日、人生で初めてお姫様だっこされながらゴールした。
次の走者の唖然とした顔をよく覚えている。

「吉村、そんな落ち込むなよ。盛り上がってたじゃん……一部の女子以外は」
甲斐君の言葉など何の励ましにもならない。
知らない女子生徒たちがヒソヒソ喋りながら目の前を横切っていった。ほらさっきの、という台詞が聞こえて耳を塞ぎたくなった。
明日、上履きに画鋲が入っていたらどうしよう。人の噂は七十五日というけど、二ヵ月半はけっこう長いんだぜ。
あれから岩迫君は何回も謝ってくれたけど、そもそも最初に転ん

だ私が悪いので彼を怒る気にはなれなかった。でも、あれはないだろと言いたくもなる。せめておんぶにしてほしかった。

唯一の救いといえば、あれが失格にはならなかったことだ。生徒会長に判断は委ねられたんだけどなんか素敵やんとか言ってＯＫサインを出してくれたらしい。適当な人でよかった。

結果、赤組は香坂・幸子部長ペアの驚異的な追い上げもあって最下位から見事一位となった。

「それにしても、お前ら中々お似合いだったぜ」

「うるせえ甲斐」

静かになったので私はぼんやり競技を観戦した。

今は借り物競争をやっていた。色々と無茶なものを借りてこいと書いてあるらしく、選手たちは右往左往している。

中には鰐淵先生と取っ組み合いをしている男子生徒もいた。あれはおそらく先生の眼鏡を借りてこいと書いてあったんだろう。

鰐淵先生のあんな必死な顔は初めて見る。周りの先生はそれを笑って眺めているところを見ると、先生の人徳が伺える。

「いたー！」

聞きなれた声がしたので視線を移すと、目の前に五味が立っていた。

「リホ先輩、一緒に来てください！」

「はぁ？　なんで」

「先輩が借り物なんです！　おさげの眼鏡女子！」

「マジか！　私以外の何ものでもないな」

中学からの惰性でこのスタイルを続けてるんだけど、まさか誰かの役に立つ日が来るとは思ってもみなかった。

「ほら早く！　今なら一番っス！」

「でもさ、あんた青組じゃん」

一緒に行ったらそれ即ち敵に塩を送るってやつじゃないの。謙信様は大好きだし何度もプレイしたよ。でもここで手を貸したら青組が一位に躍り出ることになるじゃないか。

「諦めて他の探してよ」
「リホ先輩の意地悪！　後輩が可愛くないのか！」
「私は今日色々あって他人に優しくする気持ちになれないんだよ。っあ、おいこら、そっからこっちの線は赤組だっつーの、部外者は入ってくんな」
　白線を跨いで応援席に入ってくる五味の姿に、周りはなんだなんだと注目する。私はこのときものすごく嫌な予感がした。
「サコ先輩にできて俺にできないことはない！　というわけで優勝はもらったー！」
「おいやめっ、……やめてください五味君っ」
　必死の懇願もむなしく。
　私はその日、二度目のお姫様抱っこでゴールしたのだった。

　閉会式。赤組は惜しくも優勝を逃してしまった。
『え～今年の体育祭は近年稀に見る盛り上がりを見せ、わたくし生徒会長としましても』
　私は生徒会長の締めのスピーチを半ば雑音として聞いていた。ときどき笑いが起きているけど、今の私は笑える状況になかった。
「甲斐君、私が苛められてても友達でいてくれる？」
「大げさなんだよ。意識しすぎると逆に変だぞ」
　そうだろうか。今日から私のアダ名、クソビッチになったりしていないだろうか。
　岩迫君もそうだけどあの五味もモテるからな。事情はどうあれ二人にお姫様抱っこされていい気になってんじゃねえぞって思われたりしていないか心配だ。
『ＭＶＰは三年二組の、幸子ちゃんです！』
「あ、部長だ」
　拍手と歓声の中、我が漫研部長が朝礼台に上がった。嬉しさと恥

ずかしさではにかむ部長は女の私から見ても惚れ惚れするほど可愛かった。

『三年連続の受賞、おめでとう！　ついでに俺と付き合おう！』

「ごめんね、私好きな人いるから」

なんか会長があっさりフラれとる……。

今年の体育祭は会長と私の涙で締めくくられた。

29、諸君、私は制服が好きだ

テレビでチヤホヤされているパンダを観ていると、次は絶対あの白黒に生まれ変わってやろうと思う。最近では別の動物と戯れるだけでも周りは優しくしてくれるらしいから、来世は動物がいいな。だって清掃活動なんてしなくていいし。

「おいそこ吉村ー、イヤなのは分かるけど黙ってやれー」

「はーい」

春日坂高校の伝統ともいっていい。それは生徒たちによる秋の清掃活動である。普段お世話になっている町内の皆様に恩返ししようと何代か前の校長先生が発案したらしい。

エリアごとに二クラスずつ生徒が振り分けられ、ゴミ袋とはさみ片手に町内を練り歩く。ときには何でこんなものがというものまで落ちている。軍手が片方だけとか謎なんだけど。

あーあ早く終わんないかな。恩返しとか言ってるけど、高校の知名度とか好感度的なものを上げるのが狙いなんじゃないの。少子化ナメんな。こんなんで入学者数が増えるとでも思ってんの。

「だから吉村ー、皆のやる気がなくなるからそういうの言わんでくれー」

「……」

「無視!?　吉村そんな子だったか!?」

さっき黙ってやれって言ったじゃん。

私は大して中身の入っていないゴミ袋を引きずりながら横道に入った。人通りが少なさそうなのに、意外と煙草の吸殻がたくさん落ちていた。

実際目の前で煙草のポイ捨ては何度も見てきた。その度にあぁヤダなあとは思ってたけど、清掃する側に回ってみるとその気持ちはなおさら大きくなる。

携帯灰皿ぐらい持てよバカちん。

ムカムカしながら一本ずつ拾っていると、四角い物体を発見した。
「せんせーい」
「なになにどうした吉村」
さっき無視したせいか茂木先生がやたらと嬉しそうに近づいてくる。
「財布が落ちてました」
随分分厚い財布だった。詳しくないけどたぶんブランド物だと思う。
「そうだなあ、俺は監督役しないといけないからなぁ……吉村、交番に届けに行ってくれ」
「その場合、学校じゃなくて私が一割お礼をもらっていいんですか」
「吉村、まだ十六歳だろ。そういう計算高い女の子は先生好きじゃないな」
そういうわけで私は最寄の交番に財布を届けに行くことになった。その間清掃活動はしなくていいからある意味ラッキーなのかもしれない。
清掃エリアにある交番に行くと、警察官が二人いた。
そのとき私の視線が鋭くなった。
だって制服である。どんだけフツーのおじさんでも格好良く見せる制服を着ているのである。しかもまだ暑いから半袖シャツだと？
サービスがいいじゃねえか。
「すいません。さっきそこで財布を拾ったんですけど」
すべての煩悩を押し隠し私は出頭、…違う、財布を届け出た。
「ありがとう……あ」
「星野巡査？」
「里穂子ちゃん」
二人のうち一人はあの星野巡査だった。
キタちゃんの家にお邪魔するとけっこう高確率で出会うので、すでに顔見知りの仲である。
「知り合いか？」

「はい。引退した北川先生の……可愛がってる子です」
その説明微妙なんですけど。
そもそもあのじいさまに可愛がられた記憶なんてない。この間なんて無理やりクッサイ防具付けさせられて脳天に竹刀ぶちかまされたんだよ！　あのとき軽く脳震盪起こしたんだからね！
「異議あり！　星野巡査は嘘をついています！」
「って言ってるぞ」
「久賀さんも見れば分かりますよ」
もう一人の警察官は久賀さんというらしい。
三十歳代の渋カッコいいお人だ。よき先輩という感じ。
この二人が狭いハコの中で勤務しているというわけか。けしからんな。なんか間違いがあったらどうするんだ。
「そうだ、財布は？」
「はっ、はい、これです」
あんまり妄想が過ぎるとしょっぴかれるぞリホコ。
私は拾った財布を差し出した。それから拾った場所と時間を聞かれたので正確に回答した。
「名前と電話番号書いてもらっていい？」
「それって書かなきゃ駄目ですか」
「任意だけどね。でもお礼したいって人もいるから」
「あぁ、だったら結構です」
計算高い女の子はいただけないと先生に言われたからではない。
久賀さんが開いた財布から札束が出てきたからである。
「学校の清掃活動中なんで。それじゃあ失礼します」
私はお辞儀をするとそそくさとその場を逃げ出した。小走りしながら私は冷や汗をかいていた。
間違いないっ、あの財布の持ち主はヤクザだっ！！
昨日見た『眠らない警察』に出てきたヤクザの財布があんな感じだった。札束がごそっと入っていた。あれはきっとショバ代ってやつに違いない。そうじゃなくてもあんな大金を財布に突っ込んでる

人間に禄なのはいねえ。
拾ったのが私だと分かったら『中身見たやろお嬢ちゃんア～ン？』とかインネンつけられるに決まってる。関わったらヤベェ！
「吉村、早かったな」
「先生のバカ！」
「罵倒！？　なんでだ吉村、先生なんかやったか！？」
生徒にあんな役目押し付けやがって。なんか事件に巻き込まれて新聞に載ったらマジ恨んでやる。

そんな事件があった三日後、私はキタちゃんの家を訪ねていた。
インターホンを押すとおばさんが顔を見せた。
「麗華なら道場にいるわよ」
「……休憩になるまで母屋にいていいですか」
道場に顔を見せてじいさまに捕まりたくなかった。するとおばさんが笑いながら言った。
「あら、大丈夫よ。もう無理に剣道はやらせないってお義父さん言ってたから」
「ほんとですか？」
「ほんとほんと。お義父さん、あれからかなり反省したのよ。リホちゃんがもしあのせいでバカになったら責任とるとまで言ってたんだから」
幸いなことに私はバカにはならなかった。たぶん。
一応安心して道場に行くと、数人が打ち合っていた。中には星野巡査もいた。私は隅っこのほうで待つことにした。
程なくして休憩になると、真っ先に声をかけてきたのはキタちゃんじゃなくて星野巡査だった。
「財布の持ち主見つかったよ」
「ホシが見つかったんですか！」

「ホシ？」
「いえなんでもありません」
きょとんとされた。間違いない、ヤクザは私の早とちりだ。
星野巡査の話によると、財布の持ち主は近くに住む自営業の人だった。売り上げを銀行に振込みに行く途中で落として私に拾われたということで、あの後すぐに現れたらしい。まったくヒヤヒヤさせんなよな。
「持ち主の人、すごく感謝してたよ」
「それはよかったです」
「お礼はいらないなんて、里穂子ちゃんは良い子だな」
ざ、罪悪感がパネぇえええ！
まさか持ち主をヤクザと勘違いしてました、なんて言えるわけがない。
あぁキタちゃん、君には『財布の持ち主はヤクザ説』は話していたね、でも今はお願い黙っていてくれないか。
「里穂子ちゃんみたいな妹がいたら、翔太も安心だろうな」
「兄のこと知ってるんですか」
「高校が同じだったんだ」
知らなかった、先輩後輩の仲だったんだ。
待てよ。兄と知り合いってことは星野巡査は元ヤンなのか。見た感じ、好青年そのものなんだけど。
「でも前に会ったときは喋ってなかったですよね」
「あいつにはちょっと恨まれてるからな」
「……何したんですか」
星野巡査は何も言わなかった。ただ昔を思い出すように小さく笑って、私の頭を撫でてくれた。
その手の大きさといい感触といい兄にソックリだったので、私は驚いて星野巡査をまじまじと見つめてしまった。
「……仲直り、できるといいですね」
「そうだな」

星野巡査はもう一度頭を撫でてくれた。話はこれで終わりと言うように。

30、われわれはうちゅうじんだ

部室でお弁当を食べた私が教室に戻ってくると、大きな体が入り口を塞いでいた。
「モリ君、どうしたの」
「吉村？」
はい吉村ですよ、ちょっと通してくださいね。
大きな体の脇を通り抜けて席に着くと、空になったお弁当箱を鞄に仕舞った。ちょうどそのとき、モリ君が話しかけてきた。
「吉村、現代文の教科書持ってないか」
「うん、持ってるよ」
教室の後ろのロッカーの中に入れていたはず。置き勉は駄目だと言われているけど、律儀に守っている生徒はいないし、いちいち注意する教師もいない。
「あったよ。はい」
「ありがとう」
モリ君はほっとした顔で受け取った。けっこう几帳面そうに見えるんだけど、彼はよく教科書を忘れるウッカリさんらしい。
「お前ら、いつの間に仲良くなってたんだ？」
私たちのやり取りをずっと黙ってみていた岩迫君が言った。
私とモリ君は同時に顔を見合わせ、そして同じように微妙な表情を浮かべた。
「いや、なんて言うか、ねえ？」
「なんというか、まあ、うん…」
「なんだよ教えろよ」
まさか一緒に警察のお世話になった仲とは言えなかった。
それに私が顔面に青痣作って登校してきたとき、岩迫君はすごく心配してくれたのだ。だからこそ本当のことを話すわけにはいかなかった。

「え〜っと、アレだよ、アレ！」
「アレだな」
「どれだよ。何なんだよ二人とも、俺には言えないことなのかよ」
唇尖らせたってダメ！
可愛い仕草をしたって騙されないぞ。ちょっと、いやかなりグラっときたけど。
そのとき授業五分前を知らせるチャイムが鳴った。
「モリ君、もうすぐお昼休みが終わるよ」
「そうだな。じゃ、後で返しに来るから」
モリ君は大きな体をすばやく翻して教室を去っていった。めでたし、めでたし。
……にはならなかった。岩迫君がなんかめっちゃ睨んでくるんですけど。
「もういいよ」
ぷいっと顔を反対に背け、岩迫君は黙り込んでしまった。
なんだなんだ、私が悪いみたいになってんじゃん。でも本当のことも言えないしどうしたらいいんだこれは。
「い、岩迫君？　ほんと大した理由なんて無いんだよ？」
しまったなあ。最初に変に誤魔化さずに「なんとなくだよ」って言っとけばよかった。
「だからもういいって言ってるだろっ」
お、怒っていらっしゃる…！
これ以上は何も言わないほうがいいかもしれない。自然に怒りが静まるのを待とう。
私は正面に向かって座りなおすと、隣を気にしつつ次の授業の準備をした。
私はこのときまだ楽観視していた。岩迫君のことだからすぐに話しかけてきてくれるだろうって思っていた。
でもその日の授業が終わっても、彼の機嫌は一向に直らなかった。

放課後、帰ろうとした私を後ろの席の甲斐君が引きとめた。そして開口一番に訊かれた。
「岩迫と何があったんだよ」
「あー……やっぱり分かる？」
「分かるに決まってるっつーの。岩迫、すっげえ機嫌悪かったじゃん。なに、お前ら喧嘩したの？」
「そんな大げさなもんじゃないと思うんだけど……たぶん」
空になった隣の座席。岩迫君はついさっき黙って部活に行ってしまった。いつもなら何か声を掛けてくれたりしてたんだけど、授業が終わった途端にテニスバッグを持って教室を出ていってしまった。
休み時間はもちろん会話なし。なによりビックリしたのが、六時間目の数学の授業だった。
あの苦手な数学で岩迫君はいつも当てられる。その度に私が解き方を教えていたんだけど、彼に「いらない」と断られてしまったのだ。
それがけっこうショックだった。そのときの岩迫君の声が冷たかったのもあるけど、なんだか急に彼が遠くに行ってしまったような感覚がしたのだ。
「後ろから見てたけど、なんか岩迫が一方的に怒ってるって感じ。昼休みに何かあったのか？」
「うーん、あったような、なかったような」
「話せ話せ。この俺が相談に乗ってやる」
甲斐君が頼もしく見える！　不思議！
「なんで急に眼鏡のレンズ拭いてんだよ」
「いや、うん、なんでもない」
ちょっとしたボケをかましたんだよ甲斐君。レンズの汚れのせいかもしれないと本気で思ったわけじゃないからね。
私はキレイになった眼鏡を掛けて、甲斐君に昼休みに起こったた

ったの五分間の出来事を話した。
「それじゃあつまり、雨宮ってやつとの仲を疑われたんだな」
「なんか違う。岩迫君を仲間はずれにしたから怒っちゃったんだよ」
「仲間はずれって、小坊じゃねえんだから。いいか、岩迫はお前のことが」
甲斐君の言葉を遮るように突然教室の扉が開いた。二人同時に視線をやると、そこにはモリ君がいた。
「教科書返しに来た」
それからお礼にと飴をくれた。二つもらったので一つを口に入れると、一瞬甲斐君を見てから私は残り一つをポケットに入れた。
「いや普通そこは俺にもくれるだろ」
「これすごく美味しいんだよ！？」
「もう一つやるよ」
モリ君は大人だった。
その後少しだけお喋りして彼は部活に行った。
「あれが雨宮かぁ、格好良いなぁ」
「バスケ部のスタメンなんだよ」
「バスケ部っていったら今年全国行ってなかったか？　すげー」
「ねぇ、今度練習観にいこうよ。飴のお礼に二人でモリ君を応援しよう！」
「いいなそれ。じゃあさっそくこれから、ってちがーーーーう！！」
芸人顔負けのノリツッコミに私は感心した。
今のは長さといいタイミングといい完璧だったよ。甲斐君才能あるよ。あとは所属事務所選びだけど、ここは手堅く吉本に行くべきかそれとも斜め上で太田プロダクションに行くべきか、ねえ甲斐君どっちがいい。
そんなことを考えていた私に、彼はなぜか説教をかまし始めた。
「お前がそんなのだから岩迫が怒るんだよ！」
「なにそれ、意味分かんないよ。私どんなのだよ」

「もういい。よし、バスケ部じゃなくてテニス部に行くぞ」
甲斐君は立ち上がると自分と私の分の鞄を持って教室を出ていった。私は慌ててその後ろをついていった。
「行ってどうするの？」
「誤解とくんだよ」
「誤解ぃ？」
「吉村はもう何も考えるな。いいか、雨宮君はただの友達だから誤解しないでねって言うんだぞ」
私は思わず立ち止まった。
「なにそれ。それだとまるで岩迫君が私のこと好きみたいじゃん」
甲斐君はたっぷり十秒は私の顔を見つめていたと思う。あまりにもじーっと見てくるから私も負けじと見つめ返した。そして先に逸らしたのは甲斐君だった。勝った。
「……吉村、お前もっとうぬぼれてもいいと思うぜ」
「甲斐君って宇宙人だっけ？」
「は？」
「さっきから言ってる意味が全然分かんないんだけど」
「俺にしてみたらお前のほうが宇宙人だっつーの」
「じゃあ私たち二人とも宇宙人だね」
「……そーかもな」
甲斐君は疲れた顔をして私に鞄を返してくれた。それから二人でゆっくりと歩き出した。
下駄箱に到着して靴を履き替えていると、甲斐君が何か秘密を漏らすみたいに小声で話しかけてきた。
「俺ってさ、一番後ろの席じゃん？　だから色々と見えるわけよ」
「うん」
「授業中、誰が誰を見てるのかよく知ってんの」
「うん」

「吉村のことしょっちゅう見てるやついるんだぜ」
「えっ、なにそれ超怖いんだけど！」
甲斐君はなぜかやりきれないと言わんばかりの顔をした。それはまるでカップラーメンの湯きりに失敗したかのような切ない表情だった。人の顔を見てそんな表情を浮かべないで欲しい。
「……俺帰るわ。また明日な」
「テニス部見に行くんじゃなかったの？」
「なんかもういいや。だってお前全然分かってないし、それにたぶん岩迫も無自覚だろうし。なのに俺だけがムキになってて馬鹿みたいじゃん」
甲斐君はそう言うと本当に帰っていった。
その後姿を見送りながら、私の周りにいる男の子ってなんでああも勝手なやつばかりなんだろうと考えていた。自己完結して帰っちゃったよ。結局なんだったの。
今までの会話を思い出してみてもさっぱり理解できなかった私は諦めて帰ることにした。
さて、どうやって岩迫君と仲直りしよう。

31、仲直りの処方箋

場の空気の悪さによく胃を押さえているシーンが二次元でよく見られるけど、あんなのは大げさな表現だとずっと思ってた。

でも私の認識は甘かった。図らずも岩迫君と喧嘩してしまって、隣の席同士という気まずい状況に置かれた私は今まさに胃の具合を悪くしていた。

まあ、朝っぱらからトースト二枚も食べたせいなんだけど。

「吉村、顔色悪いぞ」

「そう？」

プリントを後ろに回すと、甲斐君がやたらと心配してくれた。

現在二時間目。一時間目から体育だったのも具合が悪い原因だと思う。それに昨日はあまり眠れなかった。そのせいもあってちょっと貧血っぽい。

私は教科書を置いて机の上にうつ伏せになった。先生の授業の声はまるで頭に入ってこない。歴史の先生は生徒が眠っていても知らん顔だから安心だ。

目をつぶって、私はどうやって隣の席の男の子と仲直りしようか考えていた。

何事もなかったように話しかけるのはどうだろう。……無神経な奴だと思われそうだ。

モリ君とのことを正直に話す。……モリ君の家庭の事情も絡んでいるから却下だ。こういうのは勝手に話しちゃいけない気がする。

時間が解決してくれるのを待つ。……友人関係までもが時間の経過で消滅してしまいそうだ。

結局、ろくな案は生まれなかった。

「吉村、授業終わったぞ」

「もう？　早いなぁ」

「お前やっぱり顔色悪いって」

甲斐君に言われて私はおもむろに顔を触った。それで何かが分かるというわけではなかったけど、体温がいつもより低い気がした。
「次の授業、なんだっけ」
「化学室で実験。先生には言っとくから、お前保健室に行ったほうがいいぞ」
「……そうする」
実験するときのグループを思い出し、私は次の授業を欠席することにした。こんなんじゃいつまで経っても岩迫君とは仲直りできない気もしたけど、彼と面と向かって授業を受けないで済むことに私は少しだけほっとしていた。

保健室にはこれまでに何度もお世話になったことがある。
それは主に体育の授業関連だが、私は女の子の日になると普通に授業が受けられないほどの痛みに苛まれるので、そんなときはここのベッドの住人となっていた。
「吉村さん、今日はどうしたの？」
「食べすぎと寝不足と貧血と友達と喧嘩してしまったことによる精神的疲労です」
「どれもお薬が出せないわね。ベッドに寝てていいわよ」
保健医の篠原先生の笑みに誘われ、私は一番端っこのベッドに横になった。保健室のベッドは固くて寝にくいんだけど贅沢は言っていられない。
「先生。友達と仲直りできる薬はありませんか」
「吉村さんが喧嘩なんて珍しいわね」
「私はそんなつもりはなかったんだけど、相手の子は仲間はずれにされたと思って怒っちゃったんです」
篠原先生は何かの書類を纏めながら話を聞いていた。その背中を見つめていると、私はなんだかすごく安心した。

「私、すぐに仲直りできると思ってました。普通に話しかけてきてくれるんじゃないかって期待してたんです。でもそうはならなかったんですよね」

「人間、誰かの一番になりたいって思うのは当たり前のことだからね。ちょっとやそっとじゃ許せないと思うのも仕方のないことよ」

「一番、ですか」

それって疲れそうだなあ、と私は思った。そんなふうに相手から強く想われたいなんて考えたこともなかった。友達同士に順番なんてないとそう思っていたけど、それは違うのだろうか。

「吉村さん、友達と喧嘩ができないタイプでしょ」

「え？　あぁ、はい、そうかも」

「喧嘩するくらいなら相手の意見を呑んで穏便に済ませたい？」

「はい」

「でもね、中にはそういう誤魔化しがきかない相手もいるのよ。今、喧嘩しちゃった相手がそうね」

先生が少しだけ振り返ってくすりと笑った。

私は今まで友達と喧嘩をしたことがなかった。もちろん相手に対してカチンときたり納得いかなかったりしたことはあったけど、それをわざわざ口に出してはこなかったから喧嘩になんてなりようもなかったのだ。

今にして思うと、それって本当に正しいやり方だったんだろうか。面倒くさいって考えてた私に問題があったんじゃないだろうか。

そうやって相手に対しておざなりな態度をとってきたから、今回しっぺ返しをくらったんだ。

「先生、私どうやって仲直りしたらいいのか分からないんです」

「相手の子と話してみた？」

「まだです」

「じゃあまずは自分が相手のことをどれだけ大事に思っているか伝えてみることね。相手は自分がないがしろにされたと思ってるわけでしょ？　そうじゃないって吉村さんのほうから言わなきゃ。不安

だろうけど、仲直りしたいって気持ちがあれば大丈夫よ」

篠原先生の目が優しく細められるのを見ながら、私はわずかに頷いた。ベッドに横たわってから眠気に誘われていたけどそろそろ限界みたいだ。

目が覚めたら岩迫君に謝ろう。そして大事な友達だよって伝えよう。

32、そして私は蓋を閉じる

「吉村さん、吉村さん」
「あと五分…いや四分三十秒…」
「もうすぐお昼休みよ」
「えぇえぇ！？」
びっくりして起き上がって時計を見ると、お昼休みの十分前だった。
寝不足だったせいかぐっすり眠ってしまったらしい。三時間目だけならまだしも四時間目までサボってしまった。
「もっと早くに起こそうかと思ったんだけど、気持ちよさそうに寝てたから」
「す、すいません」
お陰で頭はすっきり。気持ち悪さも綺麗さっぱり消えていた。
私はベッドを下りて靴を履くと、篠原先生にぺこりと頭を下げた。
「相談に乗ってくださってありがとうございました」
「いいのよ。生徒の悩みを聞くのも私の務めだもの」
「先生ってなんかお母さんみたいで何でも話せちゃうんですよね」
「この職業に就いてからその台詞しょっちゅう言われるわ。私まだ三十台なのに」
ぼやく先生にもう一度頭を下げて私は保健室を出た。
まだ授業は終わっていないので廊下に人気はない。私は歩きながら携帯を開いてメールをチェックした。クラスメイトの何人かが心配するメールをくれていた。その中に岩迫君のは無かったけれど、これからなんだからと落ち込むのはやめにした。
メールに返信しながら私は食堂に向かっていた。今日は寝過ごしたのでお弁当を作っていなかった。お陰で兄には睨まれ、妹にはブーイングを食らった。勝手な奴らである。たまにはそっちが作ってみろってんだ。

「あら、早いわね」
食堂のおばちゃんは驚いていたけど、授業中に生徒が来ることには慣れているらしかった。私はパンと大好きな牛乳プリンを買った。
食堂を出たところで四時間目終了のチャイムが鳴った。一気に騒がしくなった廊下を歩いていると、前から鰐淵先生が歩いてきた。目が合った瞬間、私は嫌な予感がした。
「四時間目、いませんでしたね」
「保健室で休んでました」
「ぐっすり眠ったんでしょうね。頬にシーツの跡がついてますよ」
言ったと同時にノートの束を渡された。
「数学準備室までお願いします。君のノートは甲斐君が出してくれたので大丈夫ですよ」
こっちは大丈夫じゃねえですよ。病み上がりの生徒にノートの山を持たせるってどんだけ。
「突っ立ってないで行きますよ。僕だって早くランチが食べたいんです」
先生、私だって早くお昼ご飯が食べたいんですよ。

薫り高い紅茶を目の前に、私は食堂で買ったパンを出すのを躊躇していた。
「食べないんですか」
「い、いえ、いただきます」
私はなぜか鰐淵先生とランチをご一緒することになっていた。
真柴さんが知れば泣いて悔しがりそうだが、叶うのならばどうぞどうぞしたい。
先生は英字が印刷された小さな紙袋からサンドイッチを出して食べていた。
それ知ってる…！　駅前のけっこう有名なパン屋のサンドイッチ

だ。それだけで八百円以上はするんだよ、高校生には贅沢すぎて手が出せないんだよ。
「欲しいのならあげますよ」
「い、いいんですか！？」
「そんなに見られていたら僕だって食べにくいですよ」
「あ、じゃあお礼に私のパンを」
「いりません」
百五十円のパンなんてお口に合いませんってか。っぺ。
それにしてもサンドイッチまいうーである。生ハムかこれ。さすが高価なことはある。
「美味しいです。ありがとうございます、先生」
「どういたしまして」
紅茶を飲む先生に倣って私もカップに口をつけた。そして驚いた。
「先生っ、これすごく美味しいです！」
「おや、分かりますか」
分かります。だっていつも安いのしか飲んでないもの。
先生が手ずから入れてくれた紅茶はこう言ったら変かもしれないけど、サラサラしていて飲みやすかった。茶葉から入れた紅茶は皆こうなのだろうか。
「おかわりいりますか？」
「いただきます」
パンを食べつくした私はデザートに入る。牛乳プリンをウキウキしながら開封してスプーンを突き刺しひと掬い、あぁ至福のとき。
「それ、そんなに美味しいんですか」
「食べたことないんですか！？」
「食堂に行ったことすらありません」
この人どこの貴族だよっ、と思った私に罪はない。
春日坂に通っていてこのプリンを知らないなんてモグリもいいところである。
「この牛乳プリンを知らないなんてありえない！　いいですか、こ

の牛乳プリンはプリン界のプリンスの称号を得ているほどで」
「市販のプリンにそんな大げさな」
「何言ってるんですか！　この牛乳プリンをそこらへんのと一緒にしてもらっちゃ困りますよ。数量限定でうちの学校に卸されてるの知らないんですか。買うときは一人一個、すぐに売り切れちゃうんですよ」
　私は興奮も露にこのプリンの素晴らしさを語った。
　先生はどうせ知らないだろうけど、このプリンを食べたいがために春日坂に入学してくる生徒だって存在するのである。それぐらい凄いのだ。貴族は知らないだろうけど。
「そんなに美味しいのならいただきます」
「はい？」
「サンドイッチあげたでしょう」
「え、嫌です」
　鰐淵先生の表情が一瞬引き攣った。
　この人、他人に逆らわれるのが凄く嫌そうだな。
「そんなに食べたいなら自分で買ってきてください。もうないでしょうけど」
「いいから一口よこしなさい」
「だから嫌ですって！」
「生意気な。教師に逆らっていいと思ってるんですか」
「先生こそ生徒の食糧奪っていいと思ってるんですか」
　ところで数学準備室にいるのは私たち二人だけではない。英語準備室も兼ねるほどの広さがあるわけだから、他の教師ももちろん在室していた。
　というわけで私たちは多数の先生たちの前で、ものすごくレベルの低い争いをしていたわけである。
「ミズ吉村、一口あげなさい」
　私は英語教師の穂積先生に窘められ、
「鰐淵先生、そんなムキにならんでも…」

鰐淵先生は同じ数学教師の伊藤先生に呆れられ、
「す、すいません、」
「……お騒がせしました」
二人同時に謝る羽目になったのである。
鰐淵先生はものすごく不服そうだった。プライドの高い人だ。
私は仕方なく、本当に仕方なく鰐淵先生にプリンを一口差し上げることにした。
「美味しいですね」
「でしょう？」
「思っていた以上です。うん」
「ちょっと！　なに二口も食べてるんですか！　あ、三口！？」
悪魔がいる。
私の牛乳プリンはあっという間に半分も食べられてしまった。
「ご馳走様でした」
「最低！　信じられない！」
教師採用試験では人格も審査するべきだと思う。じゃないと悪魔が私たち天使の学び舎に侵入することになる。現に私の心はズタボロだ。
「紅茶にサンドイッチもあげたんですよ。これくらいもらって当然じゃないですか」
「言い訳なんて聞きたかないですよ。もういいです、帰ります」
そう言いつつも私は残りのプリンを食べ、おかわりの紅茶をしっかり飲み干してから準備室を退室したのだった。

鰐淵先生のせいで昼休みはあと十分しか残っていなかった。
次の授業はなんだったっけ。ぼんやり考えながら歩いていると、私の体は突然後ろに引っ張られた。
「わ！？」

驚いて後ろを見ると、そこには息を乱した岩迫君が立っていた。
彼はびっくりして声も出せない私を睨みつけると、今まで聞いたことがないくらい大きな声で怒鳴りつけた。
「どこに行ってたんだよっ、心配しただろ！！」
口を開けてぽかんとする私に、彼は焦れたように腕を引っ張った。
「こっち来い！」
私は引きずられるがままに屋上へと繋がる階段の踊り場まで連れて行かれた。
使わない机や椅子が置いてある踊り場は人気はないけどホコリっぽい。
私は一体何を言われるのだろうと戦々恐々としていた。岩迫君は昨日とは比べものにならないくらいに怒っていた。
こんな不意打ち聞いてない。篠原先生、こういうときはどうしたらいいんですか。岩迫君が怒りで我を忘れてるんですが。
「なんで保健室からまっすぐ教室に戻ってこないんだよ！　俺、どっかで倒れてるんじゃないかって心配したんだぞっ、なのに平気な顔して歩いてるし、俺、昼メシ食ってねえし、」
「岩迫君…」
ずっと探してくれてたんだ。
なのに私ときたら鰐淵先生とプリンの取り合いなんかしていた。
申し訳ないにもほどがある。
「……昨日からギクシャクしてんのに、なんだよ、俺だけかよ、お前と仲直りしたいと思ってんのは、俺のほうだけなのかよ」
「そんなことないよ！　私だって仲直りしたいって思ってるよ！」
「ほんとに？」
「ほんとほんと！」
「じゃあ雨宮と何があったんだよ」
「え」
途端に口を閉ざした私に、彼は悲しそうな表情を浮かべた。
「雨宮に聞いても答えてくれなかった。……そういうの、やなんだ

よ。俺だけ知らないのが、なんかすげえ嫌だ」
「でも、モリ君とは別に」
「その呼び方もやだ！」
「えぇ？」
突然、彼の怒りが子供っぽいものに変わった気がした。
私は虚を突かれて、瞬きを繰り返しながら彼を凝視した。
「『モリ君』ってなんだよ、なにそれすげえムカつく！　俺のことは『岩迫君』なのに、なんで後から知り合ったあいつのほうが仲良いみたいになってんだよ！！」
詰め寄られた私は答えを持っていなかった。
それこそ「なんとなく」である。

「雨宮のことはこの際もうどうでもいいよ！　俺が腹立つのは、吉村が他の男と仲良くしてるってことなんだよ！！」
言ってしまってから、岩迫君はハっとした顔になった。それから徐々に頬を赤く染めていった。
「あ、いや、違う、今のナシ！」
「うん」
「納得すんなよ！　あぁもう！」
岩迫君は一人で悶えていた。
私はさっき言われた言葉の意味を考えようとして……やめた。だって岩迫君がナシだって言ってたし。うん、忘れよう、そのほうがいい。
「ねえ、岩迫君」
「なに！？」
「そろそろお昼休み終わるよ」
予鈴のチャイムはとっくに鳴っていた。私たちは何かを誤魔化すように慌てて教室に戻ったのだった。

その日、めでたく私たちは仲直りしたわけだけど、前とは少し違うような……いや、やっぱりやめておこう。

めでたしめでたし、である。

33、しかし彼は蓋を開ける

「A子、重いだろ、俺が持ってやるよ」
「いいわよB男君」
「何言ってんだよそんな細い腕してさ、ほら貸せよ」
「あ、ありがとう……B男君って力持ちなんだね」
「これくらい普通だって。A子は無理すんなよな」
「うん…っ」
「でも頼るのは俺だけにしろよ」
「え、なに？　ごめん、聞こえなかった」
「別に！　ほら行くぞ」
「あっ、待ってよB男君！」
トントントントン……トン。
「って感じでさー、あっさりくっついちゃうのよ分かる？」
真柴さんによる『文化祭におけるカップル生成のプロセス』もとい小芝居に私は感心していた。分かりやすかったかどうかは別にして。
「あ、ちょっとそこ押さえてて」
「了解」
トントンカンカン。
現在、看板製作中。廃材を寄せ集めて作った板には『江戸時代喫茶』と達筆な文字で書かれている。
「これニス塗っといたほうがいいのかな」
「外に飾るわけじゃないし、いいんじゃない？」
「のれん付けようよ」
「だったら百均にあったよ」
「調理係ー、検便出したかー？」
「先生、思春期の私たちにそういうことを大きな声で訊かないでください」

二年六組はいつもの倍以上騒がしかった。たぶん、他のクラスもこんな感じなのだろう。

春日坂高校文化祭はあと一週間と迫っていた。

「ていうか今さらなんだけどさ、『江戸時代喫茶』ってどうなの？時代に逆行しすぎじゃない？」

「年配の人には受けがいいと思うよ」

メイド喫茶が一世を風靡したのは過去の話。

クラスの出し物が喫茶店に決まったはいいものの、メイド喫茶は食傷気味だったのもまた事実。

女装喫茶、男女逆転喫茶、コスプレ喫茶と案を経て、我がクラスが『江戸時代喫茶』と相成ったのは、クラスメイトのひとりが多数着物を用意できると発言したのが決め手であった。

「私、着物似合わないんだよね」

「似合う似合わないってあるの？」

「あるよー。私は背が高いしいかり肩だから、余計にごつく見えちゃうのよ」

それゆえに真柴さんはあまり文化祭に対して乗り気ではないらしい。「鰐淵先生に私の似合っていない着物姿を見られたりしたら耐えられない」と零している。

「鰐淵先生っていえばさ、漫研の顧問になったってホント？」

「あぁ、うん…」

嫌なことを思い出した私は金槌を打つ手が止まった。

「顧問が見つかったって部長が言うから誰かと思ったら、よりによってあの先生だったよ」

「いいじゃん！　なにショボくれてんのよ！　うちの陸上部の顧問と代わってほしいくらいよ！」

金槌振り回して興奮する真柴さんには悪いけど、鰐淵先生が顧問だなんて悪夢以外のなにものでもなかった。でも顧問がいないと文化祭の展示教室も借りられないし、予算ももらえない。

いや、待てよ。鰐淵先生の顔面目当てに女子生徒の部員が増える

んじゃ…？

「吉村、看板できた？」

鰐淵先生の経済効果に思いを馳せている私に声を掛けたのは岩迫君だった。彼は喫茶スペースの内装を手がけていて、片手には脚立を持っていた。

「ううん、もうちょっとかかるよ」

「できたら俺に言ってよ。高いところに飾るんだろ、危ないから自分でやろうとしたら駄目だからな」

「へいへい」

「女の子は”はい”だろー」

「男の子だって”はい”だよ」

「とにかく言えよ。俺、あっちにいるから」

脚立を軽々担いで岩迫君は去っていった。

私は向き直り、看板の仕上げに取り掛かろうとして……複数の視線に気がついた。

「リホリホ～」

「A子このこの！」

看板チームの女子たちにビシバシ叩かれた私はよろめきながらずれた眼鏡を掛け直した。なにか誤解されている気がして口を開いた私だけど、それより先に真柴さんが言った。

「誤解だなんて言うのは無しよ。いい？　男女の友情なんて成立しないんだからね」

金槌を突きつけられて言われた私はぐうの音も出なかった。

仲直りした翌日、岩迫君はこっちがびっくりするほどいつもどおりだった。

いつもどおりの筈なんだけど、でも何かが違う気がした。その何かが私にはよく分からなかった。分かっちゃいけない気もした。

誰かに相談するのも憚られて、私はもやもやした気持ちを抱えたまま今に至っている。そのうち慣れて忘れてしまうのだろうか、そうなったらいいなと思う。

ぼんやり考えながら、私は大通りから細い路地に入った。街灯はあるけど人気はない。時刻は午後七時半を回った辺りで、空は当然暗かった。

行き交う人もない路地を歩いていると、背後から別の足音が聞こえてきた。思わず振り返ってみるけど、街灯の下にいないと何も見えない。会社帰りのサラリーマンだろうか。

すると突然後ろの足音が駆け足になった。ぎくっとして一瞬足を止めた私は、思い直して歩き出した。

いやいや、ないない。自意識過剰な私キモい。

きっと急にトイレに行きたくなったんだろう。それか家までどれだけ速く走られるか試したくなったのかもしれない。人間、突発的にいつもと違うことをしたがるものである。

横を通り過ぎていくことを期待した私だったけど、予想に反して足音はすぐ後ろで停止した。

まさかと思った瞬間、私の肩に誰かが触れた。

「っほぎゃあ！！」

自分でもどうかと思う悲鳴を上げたときにはもう私は走り出していた。

鞄を叩きつけてもよかったけど、今日に限って教科書がいっぱい詰まっていた。これでは重くて持ち上がらない。

私は走って走って走りまくった。そのときの私にはトイレの神様ならぬトラックの神様が降臨していたと思う。

三秒で捕まったけど。

「よ、吉村っ、俺だって、」

「ぎゃぁあああ、……あ？」

「俺」

岩迫君、だった。

「ごめん、いきなりでびっくりしたよな。先に声掛ければよかった」
「そ、そうだよ、私、てっきりグサっとやられるかと」
この平和な町で殺人事件なんて聞いたことなかったけど、その第一号が自分になるのだと本気で考えていた私は安心感からふらふらと座り込んでしまった。走ったせいで気持ち悪い。
何度か咳き込んでいると背中を擦られた。息が整った頃、同じようにして座り込んだ岩迫君と目が合った。
「私に何か用だったの？」
「暗いのに一人で帰ったって聞いたから追いかけてきたんだ。その、送ろうと思って」
あぁ、まただ。また違和感。
「……私、大丈夫だよ」
街灯から離れた場所にいた私たちは互いの表情が見えなかった。それが良かったのか悪かったのか、後になっても分からなかった。
「岩迫君の家、うちとは逆方向でしょ。早く帰ったほうがいいよ」
立ち上がろうとした私を、肩に置かれた手がそうはさせてくれなかった。目線がまた同じになって、私は咄嗟に地面に視線をやった。
「迷惑だった？」
「え、いや、そうじゃないけど」
「大丈夫だなんて思ってるの吉村だけだよ。さっきだって俺に簡単に捕まってただろ」
「……次は逃げられるよ」
「無理だって。もう一回やってみる？」
違和感ってもんじゃない。
変。岩迫君、変だよ。
「肩、」
「え？」
「肩小さいよな。顔も小さいけど」
「そう、ですか」
「うん。隣の席になってから結構見てるけど、吉村って全部小さく

できてる」
　岩迫君の声がいつもと違って聞こえるのはどうしてだろう。周囲が静かだからか、それとも彼が意識して変えているからなのか。
　いつまでも肩に乗ったままの手が気になる。私は次第にそわそわと落ち着かない気分になっていた。それは岩迫君も同じなようで。
「吉村、文化祭で着物きるだろ」
「あ、うん。配膳係だし」
「俺、やばいかも」
「なにが？」
「うん、……まぁ、うん、」
「なに？」
「……もうっムリ！！」
「ヒィ！？」
　突然シャウトしたかと思うと岩迫君は頭を抱えて膝に顔を埋めてしまった。あーあーと呻くこと数十秒、彼は羞恥と戦っているようだった。私は驚いた拍子に尻餅をついていた。
「くっそー全然駄目だ、うまく言えてねえしっ」
「岩迫君？」
「俺、攻めてみたんだけど分かってる？　吉村、ちゃんと分かってくれてる！？」
「は、攻め？」
　君は受けじゃないかな。
　などと思っている私の横で、岩迫君の言葉は止まらなかった。
「甲斐がさ、言うんだよ、もっと攻めろって、吉村ボケてるから小学生でも分かる方法で行けって、でもなんか途中から恥ずかしくなってくるし自分でも何言ってんのか分かんなくなってるし、だからさ、さっきの忘れてくれる？　また今度やり直すから！」
「あ、うん」
「よし！　じゃ、帰ろうぜ」
　切り替えはやー！

何も無かったみたいに歩き出した彼を見て、私は驚くと同時にひどく安心している自分に気がついた。

うん、なんとなく、なんとなく分かってたんだよ。違和感の正体は、分かってないフリして分かってたんだよ。

でも分かってしまったらお終いだと思っていた。男女の友情は成立しないなんて言われたから、分かってしまったら認めるしかないって。

それがすごく怖かった。

「私にはまだ早いよ。心の準備なんてできてないし」

「なに？」

「なんでもない。それはそうと岩迫君、ベスト裏返しに着てるよ」

「うわっ、ほんとだ！」

あたふたしている彼を見て私は笑った。

ずっとこうなら楽なのにな。

番外編、貴方のためだから（神谷視点）（前書き）

時間としては『２３、人として軸がズレている』の前になります。

番外編、貴方のためだから（神谷視点）

当時、佐倉木高校一年だった俺にとって、ショータは憧れの男だった。

長身に鍛えられた体、甘さを削ぎ落とした男らしい顔。喧嘩は負け無し、先輩だって敵わなかった。男の理想を全部詰め込んだような男、それが吉村翔太、クラスメイトのショータだった。

そんな奴とダチになれたのは、まったくの偶然だった。同じ日、同じ場所に別々の先輩から呼び出された俺たちは、喧嘩したその日から親しく話すようになった。それから二人で組んでよく喧嘩をした。全部が向こうから売ってきたものだったけど、ショータがいれば絶対に負けない、そんな自信が俺にはあった。

入学して数日経ったころには、ショータを知らない奴は佐倉木にはいなかった。俺もけっこう名前は知られていたけど、ショータには遠く及ばなかった。せいぜいがいつも隣にいる奴、そんなだった。

ショータは女によくモテた。男にもモテた。

前者は彼女にしてほしくて。後者はアレだ、舎弟、いや下僕志願。

ショータの強さに惹かれて役に立ちたいとやってくる男は本当にいた。気持ちは分からなくもないけど、正直マジかよって俺も最初の頃は驚いてた。

ちなみに俺はただの、もう一度言う、『ただの』ダチである。誤解してる奴がいるけど、俺はあいつに蹴られたいとかパシられたいとか思ったことは一度も無い。

本人に自覚は無いだろうけど、つまりはショータは立派なタラシだった。

適当に女を食って捨てて、擦り寄ってくる男を使っては足蹴にして、そのくせ相手の名前すら覚えていない薄情っぷりは近くで見ていた俺にしてみるといっそすがすがしいほどだった。

女も男も魅了して、そのくせ他人に興味がない。こいつが何かに

必死になることなんて天地がひっくり返っても無い気がした。
ショータには誰も必要じゃない。俺はずっとそう思っていた。
「リホ！」
そのときまでは。

ショータの一コ下の妹に、里穂子がいる。
それが吉村翔太が唯一必死になる『もの』だった。
妹が二人いるのは知っていた。二コ下の花菜子には家で会ったことがあるけど、そっちは言われなくても分かるほどに顔がショータに似ていた。
でもこれ、全然似てねーじゃん。
「何してんだバカ！」
「ど、怒鳴らなくてもいいじゃん、」
おさげに眼鏡の今時ねーよっていうスタイルの女の子が、野良猫数匹に囲まれて涙目になっていたのは数分前のことだ。
それを見つけた瞬間、俺の隣にいたはずのショータは既にいなかった。唖然とする俺の目の前で、奴は野良猫の群れを蹴散らしていた。
あいつのあんなに慌てた顔を見るのはもちろん初めてだった。あまりにも信じられなくて、これは立ったまま見た夢か幻かと半ば本気で思った、それくらい凄まじい光景だった。
なんせあいつは手をつけた女どもが修羅場ったときでさえ、コーヒー牛乳を飲みながら澄ました顔して眺めていたくらいだ。それが野良猫にインネンつけられて縮こまってる妹のために全力使うなんて誰が想像できる。
「さ、最初は一匹だったんだよっ、そしたら茂みの中からどんどん出てきて、可愛い顔してまさかギャングの集団だったなんて」
「動物苦手なくせにエサなんかやるからだ」

「だってだって、痩せてて可哀想だったんだよっ、」
「それでお前が食われたらどうすんだよ！」
ねえよ。
猫が人襲って食ったなんて聞いたことねえから。ショータ落ち着けよ、お前今すっげーバカだぜ。
怒りながらも目の前の妹が心配でたまりませんって顔をしたショータを見つめながら、俺は何かがガラガラと崩れ落ちる音を聞いた気がした。
でもそれは失望の音じゃなかった。俺の目が覚める音だった。
暴力とカリスマ性で佐倉木高校に君臨する男。あり得ないほどの幻想を抱いてあいつを見ていた俺の目は、その日初めて本当の吉村翔太を捉えることができた。
奴は、ショータは。
まぁ、つまりはただのシスコンだったわけだ。

あれから二年、俺とショータは相変わらずだ。
と言いたいところだけど、実際には俺とショータの間には最近見えない火花が散っている。
「おいショータ、知ってたか」
屋上で昼飯を食べていた俺は、ふと思いついて言った。
「なんだよ」
「妹とは結婚できねえんだぜ」
言い終わる前に、中身の半分残ったペットボトルが投げつけられた。
首をずらして避けると、二年の保に命中した。ツイてない奴。
「つまんねーこと言ってんじゃねえよ。ぶっ殺すぞ」
「つまんなくねーから。これって法律。日本人なら守らなくちゃいけねえの。幸せそうに弁当食ってるから忘れてると思って親切に教

えてやったんだよ」
　妹と結婚しちゃいけませんって決まりが無かったら、この鬼みたいな形相してるけど中身はシスコンバカはマジでリホちゃんと結婚していたと思う。
　他人が聞けば冗談に聞こえるかもしれないけど、一年からずっとショータを見ている俺が言うんだから本当だ。あいつの妹を見る目は尋常じゃない。
　これでリホちゃんが美少女とかだったらまだ納得もいくんだけど、本当に普通の女の子だから世の中不思議なもんだ。
　まあたしかに、あの掴みやすい頭とかときどきムカつくこと言う唇とか、言いたいことがあるのに言わないでこっちをじっと睨んでくるところなんて動物みたいで可愛いかもしれない。
　あと普段はビビリなくせしてここぞってときには度胸のあるとこみせるから見ていて面白い。警察署で見せた芝居は傑作だった。
　なんでうちの高校に来なかったんだろう。いたら絶対楽しいのに。ショータの病気も回りにバレて俺にとっちゃ愉快でたまらん毎日になってただろうに。
「吉村先輩、パン買ってきたっス！」
「いらねー」
「はい！」
　弁当だけじゃ足りねえから買いに行けって言ったのにこれだ。後輩も後輩でパシリが無駄足になったのに嬉しそうなのがまたイタい。
　何も知らないでショータに群がってる連中を見てると、ほんと無知って幸せだと思う。お前らが崇拝してやまないこいつはいたいけな妹に行き過ぎた愛情注いでんだぞって言ってやりたい。
「神谷、なんか言いたそうだな。言ってみろ」
「殴られるからヤダ。言わない」
　こいつの目にリホちゃんはどう映ってんだろうか。
　俺と同じに見えてるのだろうか。
　十年以上も兄妹やってるとイカれちまうのかもしれない。俺もリ

ホちゃんとの付き合いが今後も続くとショータみたいに病気になるんだろうか。でも俺の場合、血の繋がりは無いわけだし問題にはならないよな。

そうだ、問題なんて何もねーじゃん。

「ケータ、これいらねえからやる」

澤田の声で、俺の思考は一時中断となった。

押し付けられたのは展覧会のチケットだった。

「美術なんて俺も興味ねえよ」

「だよなー。まあ捨ててもいいし、誰かにやってもいいから」

これまで何人の手に渡ってきたのか、もらったチケットは相当皺くちゃになっていた。はっきり言ってゴミだ。丸めてコンビニの袋に入れた。

そのとき携帯が振動した。開くと、リホちゃんからのメールが来ていた。

『おにぎりの具材で入れた明太子が古かったので、兄に食べるなって言ってください』

遅い。ショータはもうとっくに弁当を食べていた。

まあ愛する妹が作った弁当で腹を壊したとしても奴は本望だろう。ショータのことだから、妹が食えといったらたとえ靴下でも食うに違いない。食中毒くらいどうってことないだろう。

ちなみにショータはリホちゃんのメルアドを知らなかった。きっと恥ずかしくて聞けないという気持ちの悪い理由に違いない。

『夏休み、遊ばない？』

俺はメールの内容を無視して送信した。

返信は来なかった。たぶん俺と一緒に出かけるのが嫌なんだろう。見なかったことにして携帯を閉じるリホちゃんの姿が容易に想像できた。

リホちゃんのくせに生意気な。

こういうことをされると腹が立つというより闘争心が掻き立てられる。俺もけっこう病気だ。

「先輩、このゴミもう捨てていい？」
「待った」
ついさっきコンビニ袋に放り込んだチケットを取り出すと、手で丁寧に皺を伸ばしてポケットに入れた。
後輩は目を丸くして俺を見た。ニヤリと笑い返すと、少し怯えた顔をされた。ショータほどじゃないけど、これでも俺はあいつの次に恐れられている。
「先輩、なんか悪いこと考えてる？」
「そう見えるか」
「見える、ていうか、なんか楽しそう」
俺はますます口角を吊り上げた。
視線の先に、後輩に纏わりつかれて鬱陶しそうにしているショータがいた。
悪いな、ショータ。これもお前を犯罪者にしないため、リホちゃんを不幸にしないためなんだ。
ポケットの上からチケットを叩き、俺は一足先に屋上を後にした。

番外編、αとβを見守るカイ（甲斐君視点）（前書き）

『３３、しかし彼は蓋を開ける』の前の話になります。

番外編、αとβを見守るカイ（甲斐君視点）

クラスメイトに、岩迫総一郎という男がいる。
イケメンでテニス部レギュラーで女にモテて、男の俺からしたら不幸に見舞われろってなるくらいに恵まれた奴なんだが、本人はいたって穏やかな性格をしていて嫌味がないから嫌いになるほうが難しい。
クラスの女子にも岩迫を狙っている奴は多い。いや、多かった。今はたぶんもういないだろう。
「甲斐君」
「なに。吉村」
「消しゴム落ちてたよ。これ甲斐君のでしょ」
「ほんとだ。よく分かったな」
「まだ新しいのに角っこ全部使ってるから、堪え性の無い甲斐君のだと思って」
吉村里穂子。
大人しそうな外見をしているが、さっきの台詞から分かるように性格はちっとも大人しくない。
おさげに眼鏡、規定どおりの長さのスカート。校則なんてあってないに等しい春日坂じゃちょっと浮いたタイプに見えるかもしれない。中身はけっこう強かなんだが、それを知っているクラスメイトはたぶん少ないだろう。
二学期になって席替えをしてから、俺にはひとつの楽しみができた。
それはこの吉村と、今は席にいない岩迫の観察である。
「岩迫帰ってこないな。どこ行ったんだ？」
「さあ？　もうすぐ次の授業始まるのにね」
「トイレ、大のほうかな」
「イケメンは大しないよ」

「するって。大をしてもイケメンなんだよ」
「なるほど」
俺たちはときどきもの凄くバカな会話をしてしまう。俺にしてみると吉村は男友達に近いから、たぶん下ネタも平気で言い合える気がする。
でも岩迫にとってはそうじゃない。あいつにとって吉村は驚くことに女の子なのだ。それに気がついたのは二学期初日、席替えをした日。
「なに話してんの？」
「あ、お帰り岩迫君」
「ただいま。で、顔つき合わせて何の話？」
案の定俺たちは無言になった。話題が話題なだけに、なあ？
「甲斐、なに喋ってたんだ？」
岩迫しつこい！　そこはさらっと流せよ。
思ったんだが、こいつはけっこう嫉妬深いのかもしれない。吉村が言うには「岩迫君は天然ワンコ属性だと思う」らしいが、普段害が無さそうなのに限っていきなり凶暴になるんだ。
俺はラケットで撲殺されたくなかったので、「岩迫が帰ってこないから心配してた」と言った。嘘ではない。
「二人して俺の心配してたのか？　普通にトイレ行って廊下で喋ってただけなんだけど」
「いやいや、遅いから心配してたんだぜ、なあ？」
「そうそう、帰ってきてよかった。安心したよ！」
「大げさだって」
そんなん分かってるよ。いいから早く座れ。鰐淵入ってきたぞ。
ちょうどそのときチャイムが鳴り、学級委員が起立の号令をかけた。鰐淵の冷たい声で数学の授業が始まり、それと同時に俺の観察タイムも始まった。
ほぼ全員が黒板に集中する中、そうでない奴がひとりだけいる。
観察対象α、岩迫だ。

以前は数学の授業中によく居眠りをして鰐淵にネチネチと責められていた岩迫は、最近になって真面目な態度で授業に挑むようになった。

というのはもちろん嘘で、俺の目の前の席に座る吉村を授業開始直後からチラチラ、チラチラと、もういっそのことガン見でいいだろとツっこみたくなるくらいに頻繁に見つめているのだ。

岩迫はたぶん、いや間違いなく吉村に惚れていると思う。これが俺の勘違いだったら、明日からスカート履いて登校してもいい。

このことにクラスの大半は気づいていて、知らぬは本人たちだけだ。岩迫狙いだったクラスの女子があっさり諦めたのは俺には意外だったけど、もしかしたら応援したくなったのかもしれない。

だって見てて最っ高にイラつくんだよ!!

好きって言えばいいじゃん。口で言えないんなら手紙かメールでいいから告白しろよ。す、き。たったの二文字だろ。それがなんで言えない。俺が代わりに言ってやろうか。

「この問題、分かる人います？」

分かんねえよ。それより今は岩迫だ。チラチラ見てるだけじゃなくて手ぐらい握れよ。吉村の右手にソフトタッチだ。

「いないんですか？　じゃあ吉村君」

吉村の肩がビクっと震えた。

隣の席だった頃、吉村は頻繁に「鰐淵先生って素敵だよね」「あの性格悪そうなところがたまんないよね」とか言ってたくせに、最近はどうにも苦手なようだ。

渋々といった感じで教壇に行き、俺にとってはチンプンカンプンな数式を前に少しの間考え込んでいた。

吉村は数学が得意だった。数学だけなら学年でも十番以内に入っているという。本人曰く、ぱっと答えが閃くらしい。俺にとっては未知の領域だ。

ほどなくして、吉村はスラスラと計算式を書き始めた。鰐淵が満足そうに頷いている。

「できました」
「けっこう」
珍しく笑みを浮かべた鰐淵に、クラスの女子がざわめいた。吉村もちょっと顔を赤くして席に戻ってきた。
たぶんクラスの男子全員が内心舌打ちしたと思う。

観察対象β、吉村里穂子。
前にも述べたように、（黙っていれば）何の変哲も無い女子生徒だ。俺と同様に集団の中では埋没するタイプである。
もし仮に、漫画みたいに眼鏡を取ったら美少女だった、なんてことがあるかといえば、もちろんない。美少女は眼鏡を掛けていても美少女だからだ。
吉村はいたって普通の顔をしていた。顔は平均より小さくて、そのせいで目が大きく見えるけど、それがイコール可愛いかとなるとちょっと違う。愛嬌があるかと言えば、答えはノーだ。必要に駆られない限りは愛想を振り撒こうとしない、それが吉村だ。
ではなぜαはβに惹かれたのだろうか。
それは俺ではなく、同じクラスの笠野という奴が体育の授業中にズバリ聞いてしまった。
「え、なんで好きって、え？　ていうか、なんで知ってんの？」
「見てたら分かるって。女子だと吉村とばっか喋ってるじゃん」
今日の体育は室内でのフットサルだった。隣のスペースでは女子がバスケットをしている。
突然の質問にうろたえた岩迫が立ったり座ったりを繰り返し、試合中のチームからもなんだこいつはという目で見られていた。
「なあ、なんで吉村なの？」
クラスメイトの笠野はそれほど身長は高くないが、けっこうモテることで有名だった。ちなみにあんまり話したことはない。だって

ちょっと怖いもん。
　俺は離れたところでフットサルの試合を見ているフリをしながら聞き耳を立てていた。目の前ではうちのクラスのチームが得点を上げていたけど、それよりも気になるのが岩迫の答えだった。
「なんでって、か、可愛いからだろ」
　得点に沸いた歓声と笠野の「え～？」という声が重なった。俺も「え～？」って言いたくなった。吉村、ごめんな。
「どこが？　普通じゃん」
「いいだろ！　俺は可愛いと思ってんの！」
「俺も吉村は可愛いと思うよ」
　ここでまさかの第三者が参戦した。
　衝撃の発言をしたのはクラスメイトの酉谷だった。サッカー部である酉谷はフットサルで鬼のような強さを発揮するので、チーム編成のときには取り合いになった、というのは今はどうでもいい情報である。
「俺、小さいの好きだし」
「だったら塔元のほうが背は低いし顔も可愛いじゃん」
「背が低いと小さいは違うって。吉村は他の女子よりも体つきが華奢だろ、そういうのがいいって俺は言ってんの」
　酉谷よ、ストイックそうな顔してけっこう見てんだな。俺はちょっとショックだ。
「まあ、可愛いとは思うけど彼女にしたいとは思ってないから。岩迫、そんな顔すんなよ」
　怒りと悲しみ両方の表情を浮かべた岩迫は見ものだった。酉谷は申し訳なく思ったのか、その場を去っていった。
「お前も、吉村が小さいから可愛いと思ってるわけ？」
「いや、うん、まあ……」
「華奢っていうか貧弱だろ、あれ」
　視線の向こうには必死になってドリブルをしている吉村がいた。その姿は運動音痴を遺憾なく発揮している。むしろボールが吉村を

ドリブルしてるんじゃないかってくらいだ。
そしてシュート……やっぱり外した。しかも落ちてきたボールが頭に当たって呻いてるし。
「どんくせえ。なあ、ほんとに可愛いか？」
「可愛いだろ！　見ろよ吉村の顔、バスケットボールよりずっと小さいんだぞ！」
岩迫の嗜好がよく分からなくなってきた。顔の小ささで惚れたのかお前。もっと胸がキュンとなるような理由はないのかよ。
「鼻も小さいし、唇も小さい。最近乾燥してきたからリップ塗ってんだけど、そんときの仕草がすごい可愛い」
「お前、意外とマニアックだな」
「笠野には分かんないよ。お前、いっつもおっぱいばっかじゃん」
「おっぱいは大切だっつーの！　見て楽しいし触っても楽しいだろ！　お前はせいぜいあいつの小さいおっぱい想像して満足してろ！」
「小さくない！　吉村あそこは普通にあるんだからな！」
いや～今がフットサルの試合中でよかったですよ。
体育館超うるさいし、そうでなけりゃお前ら生徒指導室行きだったと思うよ、うん。
下ネタでひととおり罵り合ったあと、岩迫と笠野は顔を背けて離れていった。俺としてはおっぱい派を支持したいけど、岩迫を応援しているので何も言わないでおこう。
「なあ甲斐。甲斐は吉村のこと可愛いって思うよな」
「え」
「思うよな」
「あー……吉村は友達だし、可愛いとかそうでないとか考えたことないかな」
ここは無難に答えておくのが一番だろう。本音としては吉村と可愛いは別次元の問題だと思うけど。
岩迫は複雑な表情を浮かべながら、俺の隣に座った。
近くで見ると、岩迫は本当に格好良かった。こんな奴がなんで（

少なくとも外見は）平凡な吉村に惚れてしまったんだろうか。
「俺も最初は可愛いとか思ってなかった。面白いなーって思って見てただけなんだ」
「あぁ、うん。それは分かる。吉村は面白い性格してるよな」
失礼な性格とも言うけど。あいつ、口には出さないだけでもっとんでもないことを思ってそうだ。
「体育祭でさ、吉村が後輩と喋ってるところを見てからかな……はっきり自覚したっていうか、あぁ吉村ってすっごくいいなあって思って、普段はけっこう飄々としてんのに、偶然見ちゃったから俺一気に落ちちゃって、単純かもしんないけど、俺もっとあいつのこと知りたいって思ったんだ、そしたらいつのまにか吉村が可愛くて可愛くて」
後輩が誰なのか俺には分からなかったけど、どうやら吉村の意外な一面を見て岩迫は参ってしまったということらしい。
よくある話といったらそうかもしれない。でもそれが岩迫の琴線を掻き鳴らしてしまったんなら特別な出来事になる。他の人間ならどうとも思わないことでも、岩迫だったから何かが心に芽生えたんだろう。
誰でもいいってわけじゃない、好きになるってこういうことなんだなあと俺はしみじみ感じることができた。
「俺、ほんとに好きなんだ。それって笠野とか、他の奴からしてみたら変なことなのかな」
「そんなことないだろ。似合う似合わないで恋愛してるわけでもないし。お前が一番分かってんじゃないの？」
「うん。……うん。でも、俺にしか分かんない気持ちって、ほんと厄介だよなあ」
両手で顔を包み込んだ岩迫の視線の向こうでは、吉村がちょうどスリーポイントを放っていた。もちろん半分も届いていなかった。
「吉村の着てるジャージのサイズ知ってる？」
「は？　知らないけど」

「Sサイズだって。なのに肩があんなに余ってる……ほんと可愛い」
なんかどーでもいいところでキュンキュンしてるんだけどこいつ。
大丈夫か。岩迫ってこんなのだったか。さっきちょっぴり感動したんだけどそれ返してくれ。
そうして俺は今日も二人の観察を続ける。

登場人物（前書き）

私が忘れそうなので今さら登場人物紹介。

登場人物

＜漫画研究部＞

・吉村　里穂子
二年六組。
眼鏡におさげ、ザ・オタク女子。
得意科目は数学。
理数系のくせに頭で考えるよりも先に言葉が飛び出し墓穴を掘ることもしばしば。
将来の夢は漫画家。

・北川　麗華
二年三組。通称キタちゃん。
里穂子の親友。じいちゃんっ子。
実家は剣道場。本人も剣道を嗜む。
自分の名前が大きらいな小説書き。

・五味　貴志
一年生。テニス部と兼部。
文句なしのイケメンだが、中身は〝ど〟のつくオタク。
基本、雑食なのでＢＬも普通に読める。

・木崎　真里
一年生。通称マリちゃん。
おっとりしながらも毒の利いた台詞をぽんぽん放つ。
弟がいる。

・園田　めぐみ
一年生。通称メグっぺ。

大人しい女の子。
ある理由から漫研に顔を出さなくなった。

・ベアトリクス・幸子・ルーヴェン
三年生。部長。
ドイツ生まれの日本育ち。
金髪碧眼の美少女だが、日本のオタク文化にどっぷり漬かったコスプレイヤー。
テニス部部長とは幼馴染。好きな人がいるらしい。

・野々宮　智子
三年生。副部長。吹奏楽部と兼部。
部員不足のために頼まれて入部した幽霊部員。

＜二年六組の仲間たち＞
・岩迫　総一郎
テニス部。
何をどう間違ったのか里穂子に惚れる。
スポーツ万能、勉強はちょっと苦手な正統派イケメン。

・甲斐　基春
里穂子と岩迫の仲が気になる男子生徒。
趣味はお菓子づくり。

・ちよちゃん、村っち
里穂子と仲の良いクラスメイト。

・真柴さん、田辺さん、塔元さん
里穂子をリホリホと呼ぶ。

・酉谷くん、笠野くん
二人ともモテる。

・茂木先生
担任。四十二歳、独身。
最近、見合いしたらしい。

＜里穂子の家族＞
・吉村　翔太
佐倉木高校三年。
佐倉木高校に君臨するキングオブヤンキー。
妹の里穂子が死ぬほど好きだが、その愛はまったくと言っていいほど本人には伝わっていない。

・吉村　花菜子
美松谷高校一年。
流行に敏感な今時のギャル。
ゲームオタクの二ツ木にうっかり惚れ、彼の趣味を理解しようと苦手なゲームを必死にこなす。
最近ではギャルゲーに手を出そうかどうか悩んでいる。

・里穂子の両親
超多忙な仕事人間。

＜翔太の悪友たち＞
・神谷　蛍太
佐倉木高校三年。翔太と同じクラス。
時間を守らないルーズな男。里穂子からは毛嫌いされている。
翔太を『お義兄ちゃん』と呼ぶのがマイブーム。

・澤田　唯
佐倉木高校三年。翔太と別クラス。
可愛い外見と名前に反して中身はドS。
里穂子のものは俺のもの、俺のものは俺のもの。

・浅野　青二
佐倉木高校三年。翔太と別クラス。
里穂子曰くインテリヤンキー。眼鏡を外したときはキレたとき。

＜春日坂高校にまつわるひとたち＞
・雨宮　森
二年二組。通称モリくん。
バスケ部所属の大柄な男子生徒。
寡黙で何を考えているか分かりにくいが、意外とアツい一面もある。
里穂子とは一緒に警察の世話になった仲である。

・鰐淵　忍
数学教師。二十七歳。
色んな意味で隙のない人。眼鏡をたくさん持っている。
女子に人気の教師だが、男子からは嫌われている。
漫研の顧問に就任した。

・香坂　弥四郎
三年生。テニス部部長。
幸子とは幼馴染。さっちゃん、やっちゃんと呼び合う仲。
威圧感があって近寄りがたい。

・美作くん
二年生。テニス部。

里穂子の元クラスメイト。根に持つタイプ。

＜そのほか＞

・星野巡査
北川剣道場に通う新米警察官。
里穂子の兄となにやら因縁あり。

・キタちゃんちのおじさん、おばさん
キタちゃんの両親。
おじさんは現役警察官、おばさんは元婦人警官。

・キタちゃんのじいさま
キタちゃんの祖父。
元警察官。現在は剣道場で現役警察官達に指導している。
里穂子を可愛がっている。

・二ツ木
里穂子の妹、花菜子の想い人。本人は気づいていない。
ゲームに詳しい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4455q/

春日坂高校漫画研究部

2011年10月26日12時00分発行